

北陸高速自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

焼屋敷遺跡
杉之森遺跡

1976

新潟県教育委員会

北陸高速自動車道

埋蔵文化財調査報告書

焼屋敷遺跡
杉之森遺跡

1976

新潟県教育委員会

序

本書は、北陸高速自動車道の建設に伴い、昭和50年度において新潟県教育委員会が調査主体となって発掘調査を実施した、燕市焼屋敷遺跡及び南蒲原郡中之島村杉之森遺跡の発掘調査の記録をまとめたものである。

本調査により、焼屋敷遺跡では中・近世の遺物群が検出されたことにより、低湿地における遺跡、近世墳墓のあり方の一端が明らかになるとともに、杉之森遺跡では古墳時代、中世の遺物群と井戸などの遺構が検出されたことにより、低湿地における集落のあり方の一端が明らかになった。県内では他にも低湿地の遺跡調査が進められており、本調査の成果が今後の研究の一助となれば幸である。

なお、本調査に参加された調査員各位はもとより、多大なる御協力御援助をくだされた地元燕市、中之島村の両教育委員会関係者、また計画から調査実施に至るまで格別の配慮を賜わった日本道路公団、県高速道路課、燕用地事務所の各位に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第である。

昭和51年3月

新潟県教育委員会

教育長 厚 地 武

例　　言

1. 本報告書は北陸高速自動車道建設に伴って消滅する埋蔵文化財包蔵地のうち、昭和50年度に日本道路公団から新潟県が委託を受け、県教育委員会が発掘調査を実施した2遺跡の発掘調査記録である。
2. 昭和50年度に発掘調査を実施したものは焼屋敷遺跡（燕市関崎）、杉之森遺跡（南蒲原郡中之島村大字杉之森）で、本報告書はこの順序で掲載した。
3. 遺物の整理・復元作業は県教育庁文化行政課埋蔵文化財担当職員があたった。
4. 遺物の実測・写真撮影及び図版などの作成は本間信昭・和田寿久・高橋陽子（焼屋敷遺跡）、戸根与八郎・駒形敏朗・家田順一郎（杉之森遺跡）があたった。
5. 本報告書の執筆は発掘担当者を中心にして各調査員と協議の上、分担執筆をしたもので、文末に執筆者の氏名を明記した。
6. 発掘調査にあたり、参加者各位及び住民各位の温かい支援とご協力を賜わった。また、日本道路公団新潟工事事務所、県高速道路課から種々のご配慮を賜わったことを記して感謝の意を表したい。
7. 本報告書の作成にあたり、次の諸氏から適切なご指導と助言を賜わった。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

上野喜八郎・上原甲子郎・石川秀雄・奥田直栄・丸山法勝・西田蔵六

目 次

燕市焼屋遺跡発掘調査報告

I 調査の経緯	1
1. 発掘調査に至る経過	
2. 調査経過	
II 遺跡	4
1. 立地	
2. 歴史的環境	
3. グリッドの設定	
4. 層序	
III 遺構	11
IV 出土遺物	12
1. 中世陶質土器	
2. 近・現代陶磁器	
3. 石製品	
V 近世墳墓	17
1. 外部形態と土層	
2. 内部施設	
3. 出土遺物	
VI 総括	24
1. 新潟県における近世火葬墳墓	
2. 出土陶器について	
3. まとめ	

南蒲原郡中之島村杉之森遺跡発掘調査報告

I 調査の経緯	29
1. 発掘調査に至る経過	
2. 発掘調査の経過	

II 遺 跡	32
1. 遺跡の立地と周辺の遺跡	
2. グリッドの設定	
3. 土層堆積と遺物の出土状況	
III 遺構と伴出遺物	38
1. A地域の遺構と遺物	
2. B地域の遺構と遺物	
IV 遺 物	51
1. 土 師 器	
2. 須 惠 器	
3. 中世陶磁器	
4. 近・現代陶磁器	
5. 錢 貨	
6. 金 属 製 品	
7. 木 製 品	
8. 土製品・石製品	
V 周辺遺跡の概要と出土遺物	69
1. 杉之森（通称 根岸）遺跡	
2. 横山遺跡	
VI 総 括	80
1. 出土遺物について	
2. 遺構について	
3. 杉之森遺跡の性格	

図版目次

焼屋敷遺跡

- 図版第1図 焼屋敷遺跡の遠景（南東側より）、焼屋敷遺跡の近景（南側より）
図版第2図 発掘風景
図版第3図 86F北グリッド土層断面、90B北グリッド土層断面
図版第4図 78北グリッド土層断面、中世陶器出土状態
図版第5図 井戸、井戸の断面
図版第6図 中世陶質土器
図版第7図 近・現代陶器
図版第8図 近・現代陶磁器・石製品
図版第9図 近世墳墓近景（西側より）、近世墳墓近景（南西側より）
図版第10図 骨蔵器出土状態、鉢・1号甕・2号甕出土状態、3号甕出土状態・植木鉢
出土状態
図版第11図 骨蔵器出土状態断面、骨蔵器除去平面
図版第12図 骨蔵器甕・鉢・蓋
図版第13図 骨蔵器甕・鉢・鋤鉢・甕・植木鉢・蓋

杉之森遺跡

- 図版第14図 杉之森遺跡周辺の航空写真
図版第15図 遺跡の近景（北側から）、遺跡の近景（南側から）
図版第16図 89Kグリッド断面、120Hグリッド断面
図版第17図 A地域遺構群（4～6号溝・ピット）
図版第18図 遺構群（1号溝・ピット）、遺構群（3・4号溝）
図版第19図 ピット各種
図版第20図 2号ピット断面、16号ピット断面
図版第21図 4号溝断面、5号溝断面
図版第22図 B地域遺構群（東側から）、B地域遺構群（西側から）
図版第23図 遺構群（1号溝・ピット）、遺構群（ピット）
図版第24図 井戸跡出土状態、井戸内部珠洲系土器出土状態
図版第25図 2号溝、2号溝内曲物出土状態

- 図版第26図 遺物出土状態（土師器・珠渦系土器・土師質土器・下駄）
- 図版第27図 A地域ピット内出土遺物
- 図版第28図 A地域溝内出土遺物（1～5号）
- 図版第29図 A地域溝内出土遺物（6号）
- 図版第30図 A地域溝内出土遺物（6号）、B地域遺構内出土遺物
- 図版第31図 土師器（壺・高杯・器台・壺・蓋・底部）
- 図版第32図 土師器（壺・洞部破片）
- 図版第33図 須恵器（壺・壺・甕）
- 図版第34図 舶載磁器・陶器・土師質土器・近現代陶磁器
- 図版第35図 中世陶質土器（摺鉢・甕）
- 図版第36図 中世陶質土器（甕・摺鉢）
- 図版第37図 錢貨・金属製品・土製品・木製品・石製品
- 図版第38図 杉之森（通称 根岸）遺跡出土遺物
- 図版第39図 杉之森（通称 根岸）遺跡出土遺物
- 図版第40図 杉之森（通称 根岸）遺跡・横山遺跡出土遺物

挿 図 目 次

焼屋敷遺跡

第1図	周辺の地形と遺跡の分布	5
第2図	越後絵図に表れた地名と館跡	7
第3図	グリッド設定図	8
第4図	土層断面図と土層柱状図	9
第5図	平面土層図	10
第6図	井戸	11
第7図	中世陶質土器	12
第8図	陶器	14
第9図	石臼	16
第10図	近世墳墓全測図	18
第11図	骨蔵器の出土状態	19
第12図	骨蔵器壺・鉢	21
第13図	骨蔵器壺・蓋・植木鉢・鉢	22

杉之森遺跡

第1図	中之島村周辺の地形	32
第2図	中之島村遺跡分布図	33
第3図	調査地域旧土地更正図	34
第4図	グリッド設定図	35
第5図	土層断面図	36
第6図	遺物・遺構分布模式図	37
第7図	P ₁₆ 実測図	38
第8図	A地域溝断面図	38
第9図	A地域遺構実測図	折り込み
第10図	ピット実測図	40
第11図	ピット出土遺物（曲物・板・木碗）	42
第12図	ピット及び1～5号溝出土遺物	43
第13図	1・2号溝出土遺物	44

第14図	6号溝出土遺物（土師器・珠洲系土器）	45
第15図	6号溝出土遺物（常滑系土器・瓦質土器）	46
第16図	5・6号溝出土遺物（土師質土器・下駄・鐵画石）	47
第17図	B地域遺構実測図	48
第18図	井戸実測図	49
第19図	井戸鉢・井戸出土遺物	49
第20図	2号溝実測図	50
第21図	2号溝出土遺物（曲物）	50
第22図	土師器（広口瓶・蓋・高杯・器台・壺・底部）	53
第23図	土師器（甕）	54
第24図	土師器（胴部片）	55
第25図	須恵器（壺・甕）	56
第26図	中世陶磁器（青磁・天目）	58
第27図	中世陶質土器（珠洲系土器）	60
第28図	中世陶質土器（珠洲系土器）	62
第29図	中世陶質土器（珠洲系土器・常滑系土器）	64
第30図	土師質土器	65
第31図	錢貨	66
第32図	金属製品・土製品・木製品・石製品	67
第33図	木製品	68
第34図	土師器（蓋・壺・広口蓋・高杯）	70
第35図	土師器（器台・壺）	71
第36図	土師器（甕）	73
第37図	土師器（壺）	75
第38図	土師器（甕・底部）	77
第39図	土師器（甕）	79
第40図	中世陶質土器（珠洲系土器）	79
表1. ピット計測値一覧		86

燕市燒屋敷遺跡発掘調査報告

I 調査の経緯

1. 発掘調査に至る経過

近代道路網の建設の一環として「国土開発自動車道計画」が立案され、その1路線として昭和46年、新潟県—富山県—石川県—福井県—滋賀県に至る北陸高速自動車道の計画法線が発表された。新潟県における北陸高速自動車道は、新潟—長岡—上越—糸魚川を経て富山県に至るもので、新潟—長岡間は新潟平野の低湿地帯を通過する。新潟—長岡間における遺跡分布調査では7ヶ所の遺跡が道路法線内にかかることが確認され、昭和47年から発掘調査が進められてきた。

新潟平野における考古学的調査が行われてきたのは戦後で、昭和25年頃、真島 衛氏によって西蒲原郡の水田地帯について遺跡分布調査が行われた。焼屋敷遺跡は燕市関崎に所在する遺跡で、^(注1) 真島 衛氏が土師器、須恵器を採集したとされている。高速道路の建設に伴う遺跡分布調査は昭和43年から開始され、燕市周辺については山本 仁氏が担当した。その後、昭和46年、文化財保護室が開設され、上原甲子郎、青木 宏両調査員、伊藤正一によって再調査が行われた。昭和47年、文化財保護室は文化行政課となり、高速道路に関する遺跡分布調査は埋蔵文化財担当職員があたることになり、新潟—長岡間について詳細な分布調査を行った。昭和47年6月、関 雅之、本間信昭、戸根与八郎が現地調査を実施し、遺跡の内容、調査範囲の決定を行った。その後数回にわたって周辺の遺跡分布調査を実施し、昭和48年5月、金子拓男、本間信昭、駒形敏朗が現地調査と周辺遺跡の調査、聞き込み調査を行ったが、遺跡地であるという積極的な根拠は得られなかった。その後、課内において検討した結果、以前に遺物が採集されていること、周辺に中・近世頃と推定される塚が所在していること、法線中央部に近世墳墓が所在していること等から、発掘調査を実施することに決した。

昭和50年8月、小野栄一、本間信昭が燕市教育委員会を訪れ、焼屋敷遺跡の発掘調査実施について打合せと協力の要請を行い、地元各区長に調査協力を依頼した。その後、調査実施について燕市教育委員会と2回の打合せを行い、昭和50年9月10日～10月18日までの39日間にわたり発掘調査を実施した。

（本間信昭）

註1 真島 衛『西蒲原郡内遺跡地名表第1報』（孔版）昭和29年

2. 調査経過

北陸高速自動車道の法線決定に伴う遺跡分布調査の結果、焼屋敷遺跡の一部が道路法線にかかることが確認され、新潟県教育委員会は日本道路公団と協議を重ね、道路法線にかかる部分について発掘調査を実施し、記録化をはかることとなった。昭和50年9月、新潟県知事君 健男と日本道路公団東京第二建設局との間で発掘調査委託契約が締結された。発掘調査主体は新潟県教育委員会（代表 厚地 武）となり、発掘調査は県教育庁文化行政課埋蔵文化財担当職員があたり、昭和50年9月10日～10月18日までの39日間にわたって行われた。

調査日誌抄

昭和50年9月10日～9月13日 10日、調査計画の打合せを行い、器材の運搬を行う。市教育委員会と事業実施計画について打合せを行い、調査関係者に挨拶まわりをする。午後から調査区域の確認と調査方法について現地打合せを行い、グリッド設定のための草刈と併行して遺跡全景の写真撮影を行う。11日、草刈りを継続する。12～13日、グリッド設定の基本杭打ち及びグリッドの設定を行う。

9月16日～9月20日 16日、調査員、作業員が現場事務所に集まり、調査及び事務説明を行い発掘作業を開始する。発掘作業は82, 86, 90ラインから開始する。82F, 86F, 90Bグリッドで厚い砂の堆積が検出する。17日、74, 78, 82, 86, 90ラインの発掘を行う。18日、グリッドの増設作業を行う。19～20日、70, 74, 78ラインの発掘を行う。74, 78ラインで薄い泥炭層が確認される。

9月22日～9月27日 22日、54, 58, 62, 66, 70ラインの発掘を行う。62J, 66Jグリッドで厚い砂層が検出され、62Jの砂層下部に木の根、ツバキの種子等植物遺体が混入している。23日、42, 44, 46, 54ラインの発掘を行う。46Iで近・現代陶磁器が検出される。25日、42, 44, 46ラインの発掘を行う。26日、26, 28, 30ラインの発掘を行う。30K, 32Mで近・現代陶磁器が検出される。27日、用水路東側の26, 30, 32, 36ラインの発掘を行う。30Oで板廻いの井戸が検出される。

9月29日～10月4日 29日、用水路西側の10, 14, 18ラインの発掘を行う。10Gで近・現代陶磁器、18Gで中世陶質土器が検出される。30日、10, 14, 18, 22ラインの発掘を行う。18C, 18G, 22Cで近・現代陶磁器が検出される。グリッドの発掘と併行して調査区中央部に位置する墳墓の草刈りを行い、写真撮影をする。1日、16, 24, 30, 32, 34, 36ラインの発掘を行う。16E, 20E, 24E, 30Eで近・現代陶磁器が検出され、26C, 28E, 34Cで自然木が検出される。2日、6, 8, 12, 46ラインの発掘を行う。6C, 8Eで中世陶質土器が検出される。グリッドの発掘と併行して墳墓にグリッドを設定する。3日、6, 8, 50, 58, 62ラインの発掘と併行して墳墓、井戸の調査を行う。8Eで中世陶質土器が検出される。4日、墳墓、

井戸の調査を行う。墳墓で近・現代陶磁器が検出される。井戸の平面、測面実測を完了する。

10月6日～10月9日 6日、墳墓の調査を行う。墳墓7E, 7F, 8E, 8Fで骨蔵器、切石が検出される。墳墓の東西、南北の土層断面実測を行う。7日、墳墓の調査と併行して、6, 8, 12ラインの調査を行う。墳墓で検出された骨蔵器は以前に掘り返えされており、骨蔵器が割れて散乱している。出土状態の実測、写真撮影を行い墳墓の調査を完了する。8日、雨のため作業を中止する。9日、6J, 7I, 8J, 9I, 10Jグリッドの発掘を行う。土層断面の実測、写真撮影を行い全発掘作業を終了する。

10月13日～10月18日 13日、器材の整理点検を行い、遺物整理を開始する。14～15日、遺物の水洗、注記作業を行う。15日～18日、遺物の写真撮影、実測を行い、図面整理をし、器材の撤収を行い現場での全作業を終了する。

長期にわたる本発掘調査に対し、調査員・作業員の方々はもとより、地元との折衝に奔走して下さった燕市教育委員会、関根修司氏をはじめ関崎、又新、二階堂、小中川の各区長や各方面から多大なる御援助、御協力を賜わったことに対し、ここに深く感謝の意を表する次第である。

(本間信昭)

調査担当者 本間 信昭 (県教育庁文化行政課主事・日本考古学協会員)

調査員 関 雅之 (県教育庁文化行政課文化財主事・日本考古学協会員)

戸根与八郎 (県教育庁文化行政課学芸員)

駒形 敏朗 (県教育庁文化行政課学芸員)

家田順一郎 (県教育庁文化行政課嘱託)

和田 寿久 (県教育庁文化行政課嘱託)

高橋 陽子 (県教育庁文化行政課嘱託)

作業員 関崎、又新、二階堂、勘新、小中川の有志

協力員 燕市教育委員会

燕郷土史研究会

県立燕工業高等学校社会科クラブ

田子了祐・関根修司

事務局 江坂 勇 (県教育庁文化行政課管理係長)

小野 栄一 (県教育庁文化行政課主事)

II 遺 蹤

1. 立 地

焼屋敷遺跡は新潟平野のほぼ中央、新潟県燕市大字関崎小字五枚田、通称焼屋敷に所在し、関崎、又新両集落の中間に位置している。現況は水田、畑地、荒地、宅地、墓地となっており、発掘調査地点は標高5.5m前後の平坦な地域である。

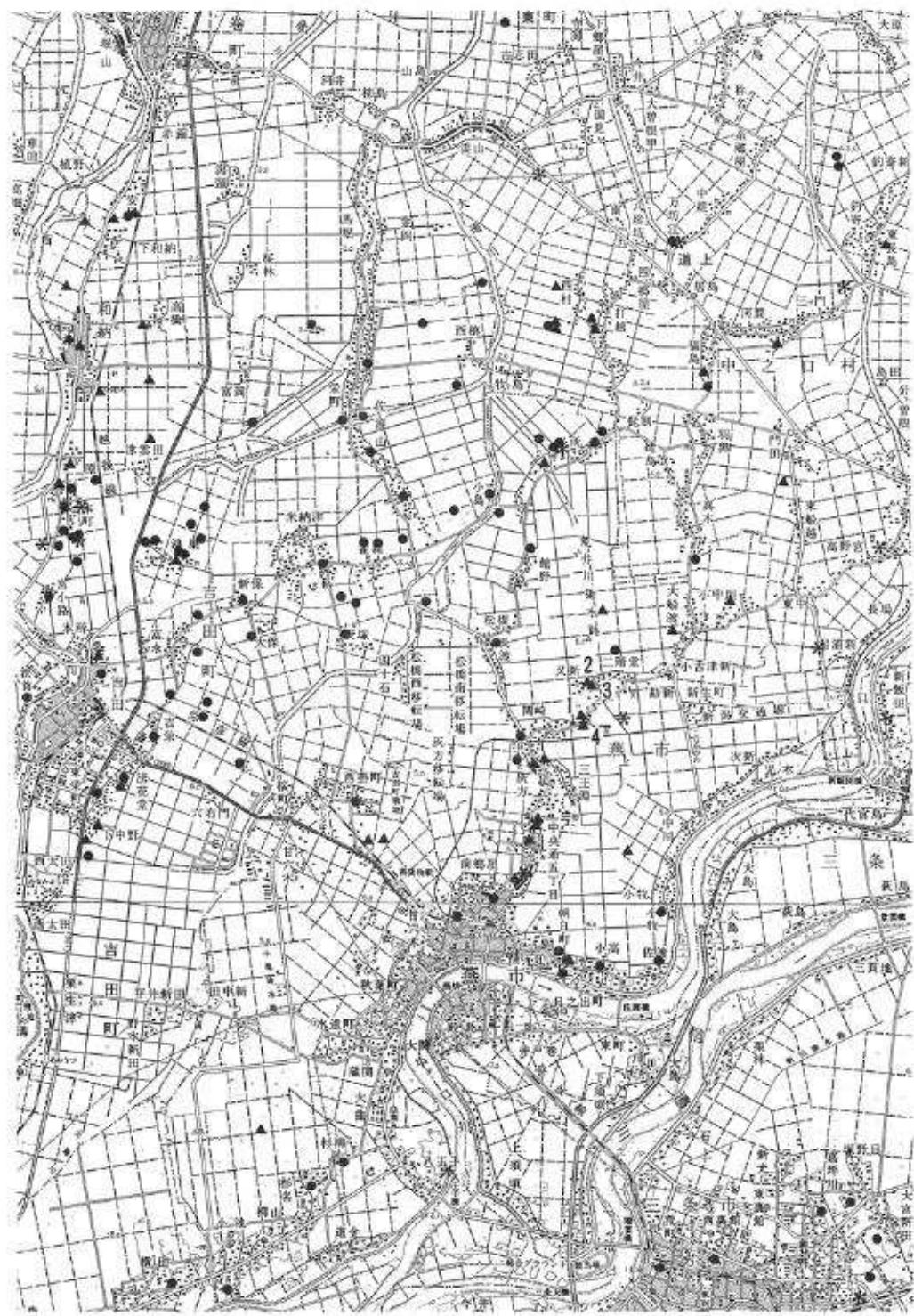
新潟平野は県内で最大、国内でも有数な平野であり、信濃川・阿賀野川およびその他の中小河川の沖積によって形成され、無数の自然堤防を発達させている。又、本来、潟湖⁽¹⁾埴充平野として発達したため大小無数の湖沼が散在していたが、現在は大部分が干拓され水田となっており、平坦ではあるが鶴潟の方向にやや傾斜している。燕市附近は中ノ口川と信濃川との分岐点であり、その他いくつかの河川も分流している。このような地理的環境であったためこの地域は古代から洪水の多発地帯であり、大きな洪水だけでも江戸時代86回、明治時代18回、大正時代3回を記録し、近世に至るまで水との戦いであった。江戸時代以前、中ノ口川は藤田・灰方・三王淵・小中川・高野宮・六部⁽²⁾を流れていたとされるが、自然堤防の発達からも信濃川、中ノ口川は何度となく河道を変えたものと思われる。

2. 歴 史 的 環 境

本遺跡附近には三遺跡が所在する。2は菖蒲塚で径約1.5m、高さ約0.5mの円形で、陶質土器が出土している。盛土部分が削られ今は塚上に墓石が建てられており、菖蒲御前の墓という伝説がある。3は下郷屋遺跡で荒井川排水路から西方の地区で南方にいくにつれ高くなる微高地で陶質土器が採集されている。菖蒲塚もこの遺跡内に含まれる。4は君之塚で径約2m、高さ約1mで耕地整理の際に全壊したが陶質土器が出土している。このように本遺跡周辺は中世の三遺跡が近接している。

遺跡の分布は第1図の如くであるが、土師器・須恵器を主に出土する平安時代の遺跡、陶質土器を主に出土する中世の遺跡、出土遺物のない塚・館跡・寺院跡等3つに分けることができる。遺跡の種別をみると遺物包含地が最も多く館跡・寺院跡がこれにつぐ。このようにこの地域には縄文時代・弥生時代の遺跡が全く発見されておらず、当時は河川による沖積が活発に行われ、生活を営むには不適当であったと思われる。又、遺跡は自然堤防上に集中しており、土師器・須恵器出土遺跡と陶質土器出土遺跡の分布はほとんど一致している。

前記のようにこの地域は洪水多発地帯であったため、中世末から治水事業が始まられ代表的なものは上杉景勝が御館の乱を経て、越後統一後行った直江工事であり、天正10年（1582）直



第1図 周辺の地形と遺跡の分布 (1/7.5万)

- 1. 烧屋敷遺跡
 - 2. 下郷屋遺跡
 - 3. 萩塚塚
 - 4. 君之塚
 - 土師器・須恵器出土遺跡
 - ▲ 陶質土器出土遺跡
 - * その他の遺跡
- (地図出典：国土地理院「弥彦」「三条」1:50,000原図 昭和49年発行)

江兼続によって行われた。このように治水対策を行いながら一方では新田開発も盛んに進められてきた。村落は行政の単位であったが同時に農業経営の単位でもあった。中世末から近世初期にかけて領主は先進的な土木技術を駆使し、河川の修復・新田開発を行い、水田が造られ新しい村落が形成された。地名をみてもわかるようにこの地域には新田に関係する地名が多い。これらの村落は新田開発に伴い開村したものと考えられる。第2図は正保2年(1645)の越後絵図に記載された村落名と現在の村落名が一致するものを地図におとしたものであるが、名称の一致にあやまりがなければこれらは正保2年にはすでに存在し、それ以外のものは正保2年以降成立の村落と考えられる。

一般に中世の農村は名田を単位に編成されており、在地の大部分を名田が占めていた。莊園即村落と一致しないが、現実の農村の中心は名主層であった。そして、大名主に服属していた小名主達も大名主から離れ独立し、地侍的な中小武士団と小規模な農業経営者の2階層への分化の時期でもあった。又、東日本各地に分布しているといわれる環濠屋敷は、中世の土豪が防備的⁽⁸³⁾目的のため濠を設けたが、近世以後は旧土豪・村役人・地主といった家格を表し中世を模したといわれている。

この地域には多數の館が分布している(第2図)。打越館は土塁・堀が残っており、東船越館は竹俣氏の持城とされている。新飯田館は神子田長門の館であり、長所館・原館・仙木館では堀が残存している。鴻ノ巣城は中越争乱の際に上杉勢の拠点となった城であり堀が残存する。又、三条城は三条・長尾・金丸各氏の居城であった。これらはほとんどが集落周辺に所在し、標高4~5mの微高地に立地する。館のほとんどが沖積平野にあり、そのほとんどが水流又は潟湖や低湿地に接する山麓地や自然堤防上を選んでいる。完全に平地に孤立する場合でも洪積台地、砂堆等の微高地に拠っている。これは平地集落の共通性であり自然堤防上の微高地に生活し、後背湿地にあたる部分の開発に従事していたことを物語る。これらの地理的・歴史的環境のもとで館群が形成され、御館の乱を経て新田開発に従事していったものであろう。又、寺院跡が多いことも開村に伴い伝播した宗教との関連があるものと思われる。

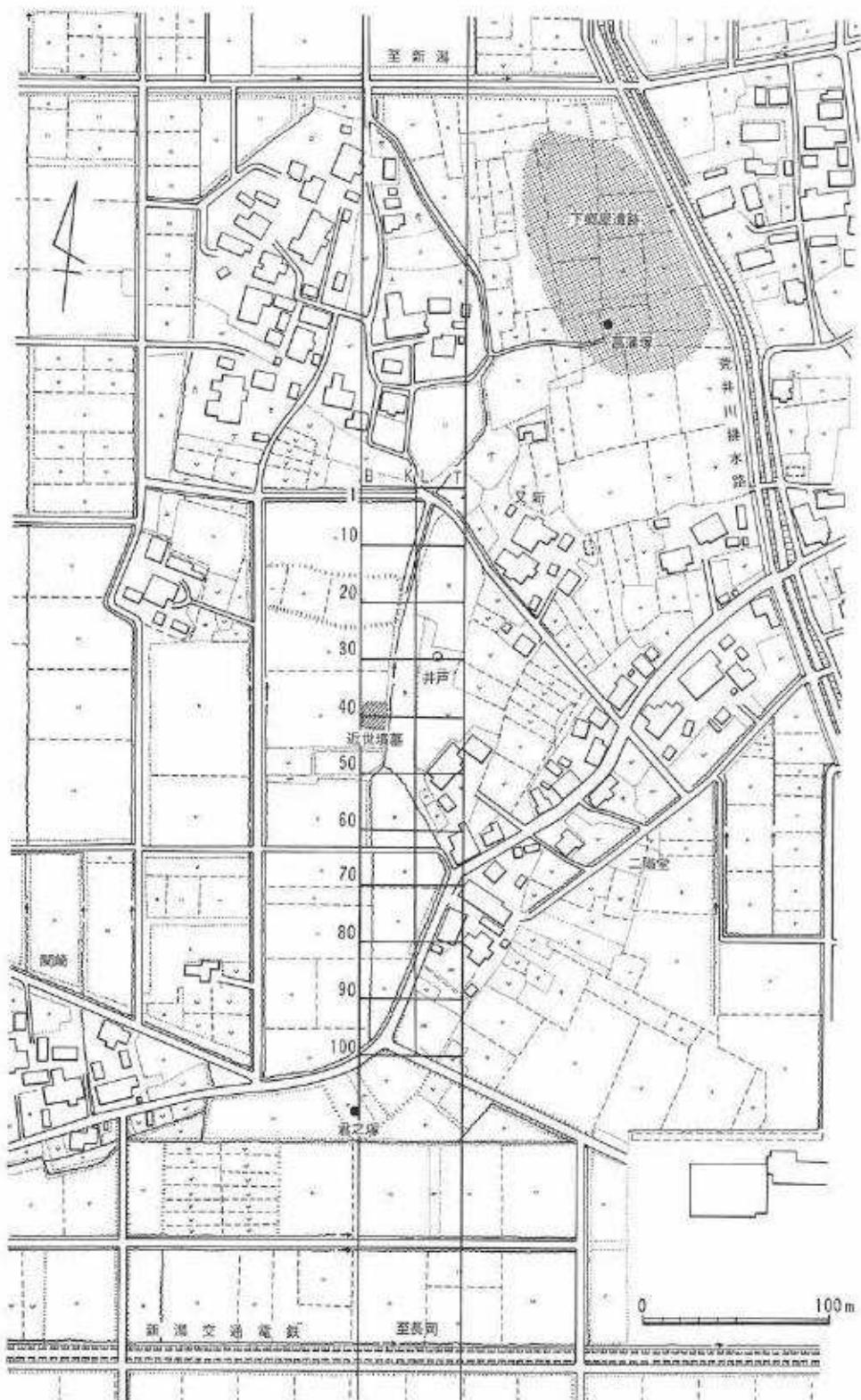
- 註1. 経済企画庁総合開発局『土地分類図付属資料』昭和48年
2. 青野寿郎・尾留川正平『日本地誌第9巻』昭和47年
3. 細川弘「越後平野北部における環濠屋敷」越佐研究第15集 昭和38年
「新発田藩の新田增加率に従えば、上杉景勝移封後(慶長3年)、寛文4年までの66年間に2万5千石の増加をみていくが、その主な増加地域は信濃川沿岸地域であって拝領高の2~3倍の増加ぶりを示し、それ以後は停滞している。」
4. 伊藤正一「蒲原平野の館および城址」越佐研究第19集 昭和34年
5. 田子了祐「信濃川河畔における淨土真宗の伝播と近世村落の成立」燕郷土史考第5集 昭和48年



第2図 越後絵図に表れた地名と館跡 (1/7.5万)

- 1. 打越館
- 2. 東船越館
- 3. 高野宮館
- 4. 新飯田館
- 5. 長所館
- 6. 野神屋敷
- 7. 佐渡山城
- 8. 米納津城
- 9. 原館
- 10. 弥五郎屋敷
- 11. 月の宮館
- 12. 本町城
- 13. 仙木館
- 14. 鴻ノ巣城
- 15. 杉名館
- 16. 八王寺館
- 17. 横田館
- 18. 三条城

(地図出典：国土地理院「弥彦」「三条」1:50,000原図 昭和49年発行)

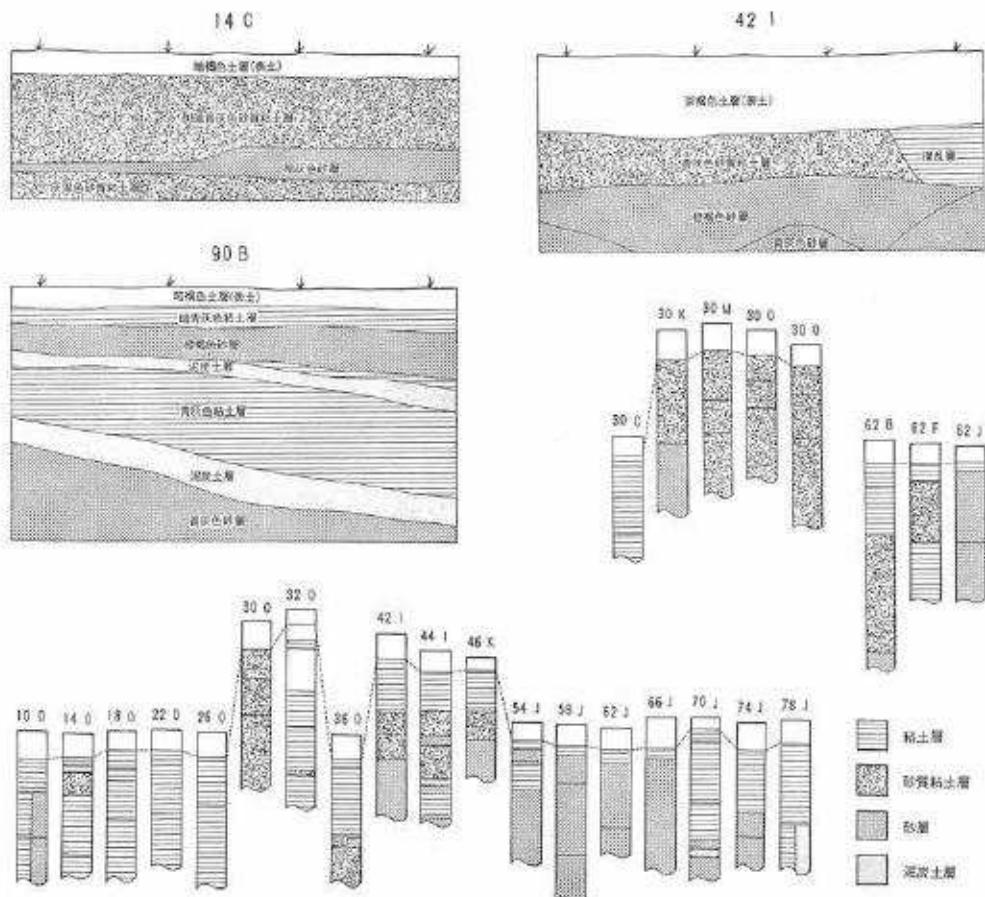


第3図 グリッド設定図

3. グリッドの設定

本遺跡は昭和29年以前に溝を掘った際、須恵器・土師器が出土したといわれ、又、昭和42年の分布調査の折、土師器片が採集された。しかし、発掘前の数回にわたる現地踏査を実施したが、遺物は採集されなかった。このため遺跡の範囲は漠然として発掘地点の選定が非常に困難であったが、聞き込み調査、遺跡カード、および以前の採集資料等から検討し、第3図に示した地点を発掘調査の対象地域に選定した。

グリッドは発掘調査の対象である道路予定法線内の幅60m、長さ300mについて、1区画を $3 \times 3\text{ m}$ として東西19グリッド、南北100グリッドを設定した。グリッドは西からB、C、D……T、北から1、2、3……100とし、グリッド名称は1 B・1 C・1 D……100 Tと呼称した。調査地区中央に位置している近世墳墓については別にグリッドを設定した。



第4図 土層断面図と土層柱状図

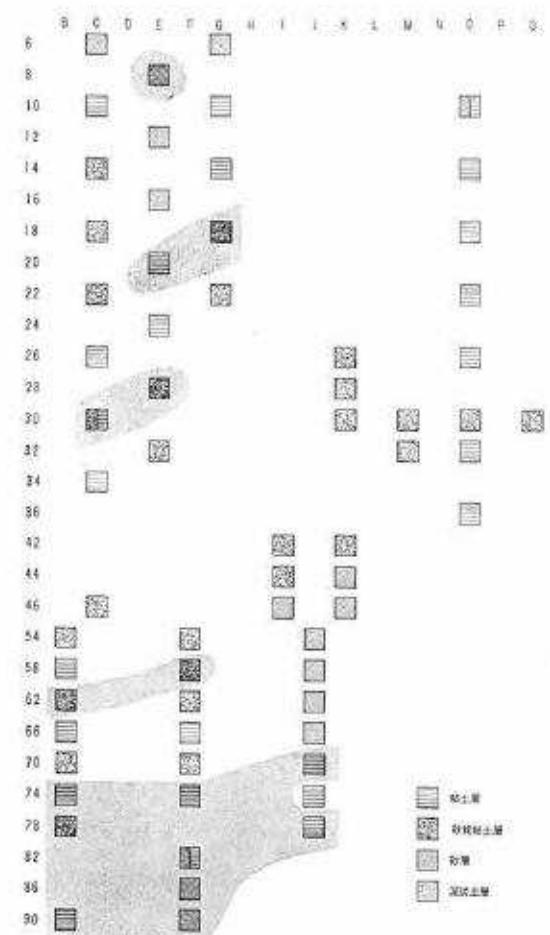
4. 層序

本遺跡の地目は多種にわたっており、攪乱部分が多かった。又、グリッドによって土層の堆積状況が異なっている。土層は粒子の大きさと色調をもとに、表土、粘土、砂質粘土、砂、泥炭土と5つに大別することができる。第4図は土層断面図と土層柱状図であるが、土層断面は自然堆積の水田面14C、90Bと畑面42Iを図示した。水田面の北寄りでは灰黒色粘土層が地表面下1m前後にあって基盤をなし、中央より南寄りでは青灰色粘土層ないしは青灰色砂層が基盤をなしている。さらに中央から南寄りでは地目にかかわらず、第3層は鉄分を含んだ砂層で土色は橙褐色を呈す。土層柱状図は発掘区域の土層を南北・東西方向の断面に示したもので、水田面と畑面の高低差、堆積状況の違いを表した。又、8Eの第5層からは陶質土器が出土しており、第5図はその出土層である第5層のレベルで土層をとらえ、平面図に表したもので泥炭土層の分布を加えたものである。北寄りでは粘土層と砂質粘土層が主体であり、南寄りでは砂質粘土層と砂層が主体である。泥炭土層は南寄りに広く分布する。遺物はゴミ捨場から近・現代の陶磁器を出土したにとどまり、遺物包含層としてはとらえることができなかつた。

以上のことから土層の堆積状況に関連性はなく粘土、砂質粘土、砂が交互にみられる。当地域は信濃川、中ノ口川の沖積平野であるために、^{#1}やや高目の砂土は漏水し、低湿な溝水地には鉄分がみられる。又、湿原植物が未分解のまま土層内に介在し、低位泥炭土壤が広く分布し、低湿地である潟湖噴充平野としての性格を表している。

(高橋陽子)

注1. 経済企画庁総合開発局『土地分類図付属資料』昭和48年



第5図 平面土層図

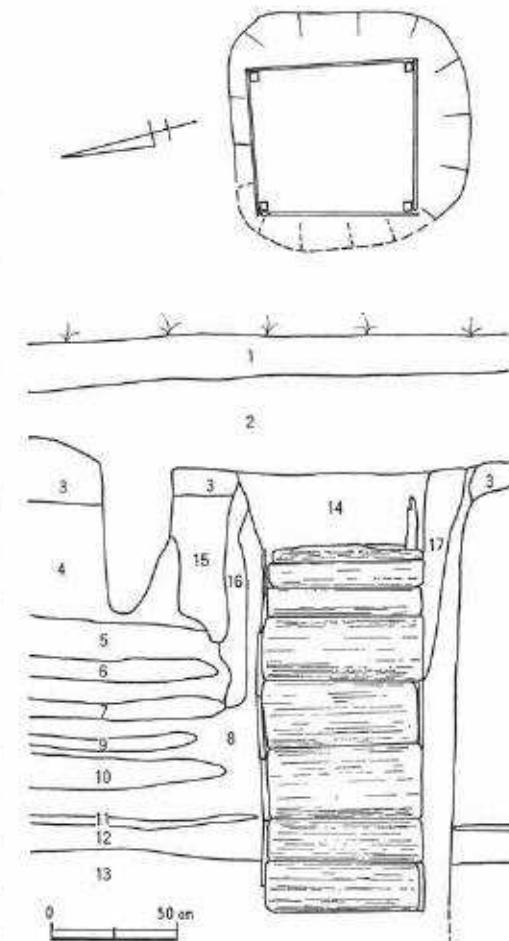
III 遺構

井戸址（第6図、図版第5図）井戸は30・31のO・Pグリッドにかかって検出されたもので、畠地下52cmの第3層からの掘り込みが確認され、第3層下10cmから170cmの間に井戸枠が組まれている。井戸枠と掘り込みの間には暗灰色粘土層及び暗灰色砂質粘土層が充満している。井戸址周辺の土層の堆積状態は第1層から第3層までは厚く、グリッド全体に広がり、第4層から第13層までは薄い粘土と砂質粘土が互層となっており、井戸枠に近接した部分は明確ではない。なお、井戸址の南側における土層堆積状態と掘り込みについては激しい湧水のため、実測が困難であった。

井戸枠は東側と西側が一辺62~68cm、南側と北側は一辺58~62cm不等角四辺形を呈し、枠内部の四隅には一辺3~4cmの角柱を用いて、枠板を角釘でとめている。杉材使用の枠板は四方に7~8枚ずつ残存し、最上段の板は腐朽して薄く厚さ0.2cm、下段の板は保存が良好で厚さ1cm前後で、その幅は狭いもので6cm、広いものは30cmをはかる。

枠板の組み方は西側の板の南端を柱から少し突出して、南側の板の西端がほぼ直角に合さるようにして順に四方を巡っている。一部の板には墨書きで「武」、「三」、「七」、「×」などと書かれ、枠板の順序を確認する数字や記号と考えられる。井戸枠の中には上部に褐色砂質粘土、その下は灰黑色土が充満するが、遺物は検出されていない。本遺構の南西5m離れた地点の第2層に相当する土層から近世後半の陶磁器が出土しており、井戸はこれらの遺物と近似した時期のものと推定される。

（和田寿久）



第6図 井戸 (1/30)

- | | | |
|---------------|------------|-----------|
| 1 暗褐色砂質粘土 | 2 褐色砂質粘土 | 3 黄褐色砂質粘土 |
| 4 青灰色・橙褐色砂質粘土 | 5 灰色砂質粘土 | 6 淡灰色砂質粘土 |
| 7 橙褐色砂質粘土 | 8 暗灰色粘土 | 9 淡灰色砂質粘土 |
| 10 淡褐色砂質粘土 | 11 暗灰色砂質粘土 | 12 暗灰色粘土 |
| 13 暗灰色砂質粘土 | 14 褐色砂質粘土 | 15 暗褐色土 |
| 16 暗灰色砂質粘土 | 17 暗灰色砂質粘土 | |

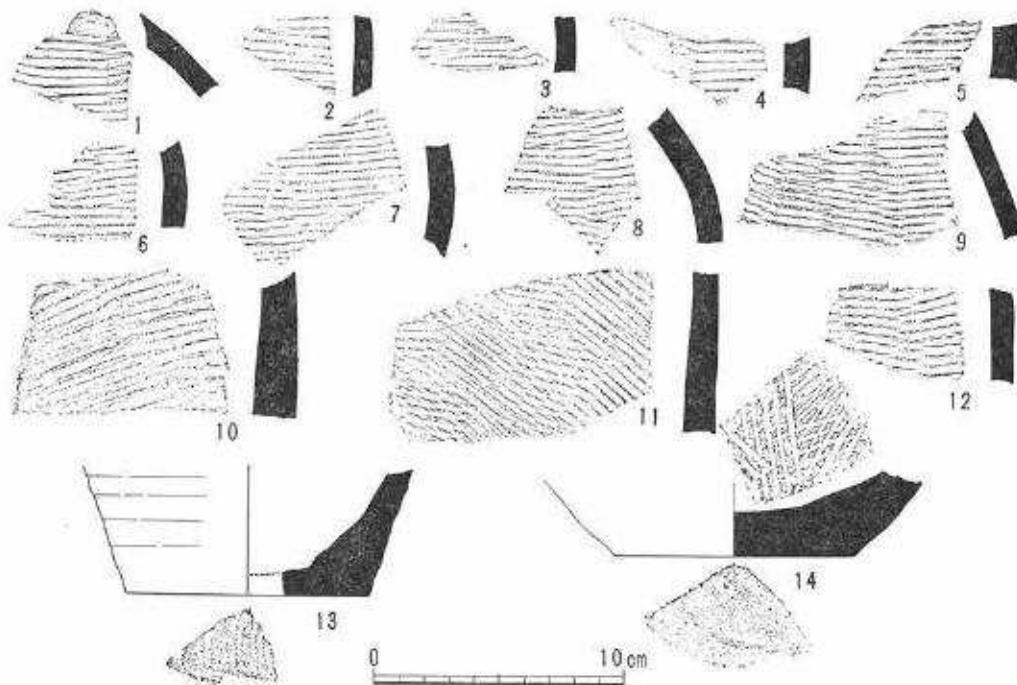
IV 出土遺物

本調査区域の近世墳墓を除く地点から出土した遺物は、中世陶質土器、近・現代の陶磁器など約190点で、他に石製品が2点検出された。中世陶質土器はすべてNo.18グリッド以北の西側水田部から検出され、近・現代陶磁器の大部分は32M及び46Iグリッドの深度0.5~1mのごみ捨て場と考えられるところから発見されたものである。

1. 中世陶質土器（第7図 図版第6図）

検出された陶質土器の中で、青灰色または黒灰色の色調を呈し、中世の珠渦旋系に酷似する一群をまとめてみた。細片を含めて20数片しかないが、壺形、壺形、鉢形の3種に器形区分される。

壺形土器（第7図1~12 図版第6図1~14）1~9は8Eグリッドの青灰色砂層の第5層からまとまって検出されたもので、各片とも胎土は精選された粘土に若干の細砂を含み、淡青灰色の色調を呈し、焼成はやや軟質で吸水性が大であり、同一個体であると考えられる。1は頸部から肩部にかけての破片であり、壺形土器と推定され、器面には横位の条線状叩目が施されている。1・8・9などは叩目適合部で稜を生じ、羽状を呈している。10は器外面に浅く左斜方



第7図 中世陶質土器(1/3)

向の条線状叩目が見られ、11は右斜方向の叩目を中心とした条線状叩目が面取り風に施され、12は羽状の条線状叩目が施されている。10～12の各片は黒灰色を呈し、胎土に細砂粒を含み、焼成は堅緻である。なお、12は付近を流れる荒井排水路の土手で表採された資料である。

壺形土器（第7図13 図版第6図15） 13は底径約10cm前後と推定される壺形土器片で、色調は黒灰色で、胎土に長石の白い斑点がみられる。外面にはロクロ整形痕があり、内面は凹凸の大きい。底部に見られる痕跡は、帶止糸切りによるものか敷物によるものかのいずれかであろう。

摺鉢形土器（第7図14 図版第6図16） 14は底径9.5cm前後の摺鉢底部で、内面は摺目の条線間融が広く、その断面はU字形を呈する。底部は回転糸切り技法で切りはなしている。色調は黄灰色を呈し、胎土は精選され、焼成は軟質である。

本調査で検出された中世陶質土器は量的にも少なく、小片のため土器の器体における位置及び断面の傾斜に若干の疑問が残る。14を除く1～13は石川県の珠洲焼に酷似した特徴を有するもので、珠洲焼系陶質土器と呼ばれる一群と考えられる。14は異なる系統のもので、中世に位置づけられるか、否か、資料の増加をまって検討したい。

2. 近・現代陶磁器（第8図 図版第7・8図）

近・現代の陶磁器類は殆ど日用雑器類と見られるもので、陶器、磁器、素焼き土器の3種に大別し、器形ごとに記述することとする。

陶器（第8図 図版第7図 図版第8図1～6）

皿（図版第7図2） 削り出し高台の皿形底部破片で、高台径4.7cmを測る。素地は灰褐色で、内面には半透明の淡黄緑色釉がかかり、重ね焼をした時の砂が3カ所に付着している。

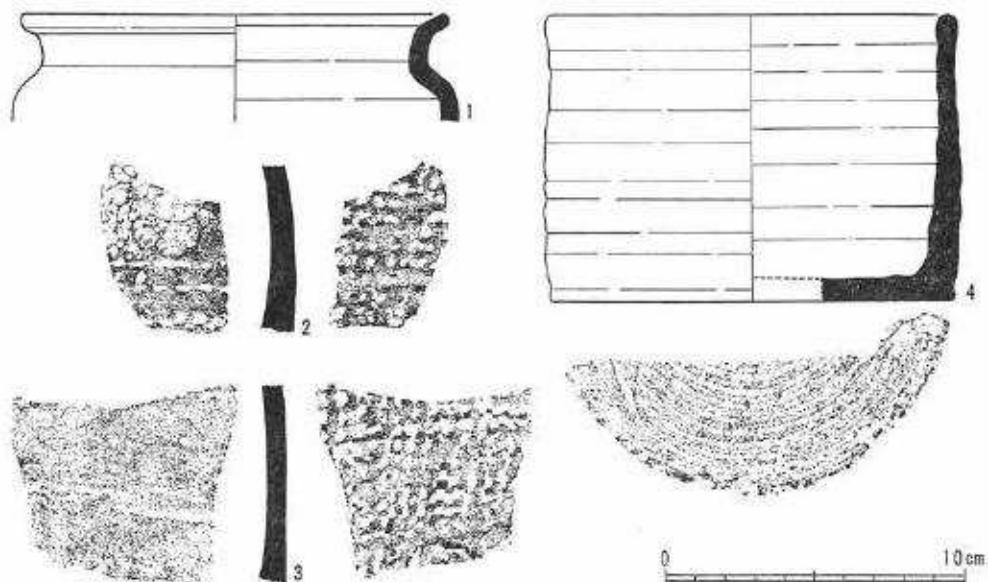
鉢（図版第7図3～7） 3は削り出し高台を有する破片で、高台径4.4cmをばかり、褐色釉の上に白灰色の斑が施釉され、唐津焼系の深鉢片と考えられる。内面には径5cmの蛇の目を有し、その中にはスヌ状のものが付着している。外面の底部には所々高台脇まで広がる露先（なだれ）が見られる。4は器高9.8cm、口径17cm、高台径9.3cmを測る。灰褐色の素地に黒色の釉が内面全体にかかり、外面は胴部に釉止まりが見られる。5～7は素地がいずれも赤褐色を呈し、胎土は精選されている。5は口縁部から胴部にかけての破片で、推定口径38cmを測る。内面は白色の刷毛目の上に黄褐色の釉が施され、外面は黒褐色の釉薬が溶けずに残っている。口縁部は大きく外反し、口唇部が垂直に立ち上がる。7も口縁部から胴部にかけての破片で、内面には黒褐色の釉の上に白色釉が波状に施され、外面は口頸部に釉止まりが見られる。6は底部破片で、削り出し高台の径は14cm前後をばかり、胴部に褐色釉がかかり、内面には白色釉が同心円状に施されている。

摺鉢（図版第7図8～13） 本遺跡から摺鉢は30片出土し、それを大別すると、口縁が8のよう

に口唇部の外面で段を有し、外反りのタイプと、10のように胴部から口唇部まではゆるやかな曲線的に立ちあがり、口唇部の断面が丸みをもっているものとがある。底部には9・13のように高台をもつものと12の平底の一群とがあり、11は底部周縁部に高さ2mm前後の高台風の高まりがみられる。平底を呈する12は回転糸切りの手法で底部を切りはなしている。摺目は口縁部を除き全面に施されており、摺目が8のように間隔のあいた細沈線のものと、9・11・12・13の如く粗い摺目のもの、10のように現代でも使用しているものと同様な摺目の3種が見られる。施釉については8・13の如く有釉のものと、9～12の如く無釉のものとがある。摺鉢は殆ど幕末から明治以降に県内で焼かれたものと考えられる。

甕(第8図1～3　版第8図1～4・6)　図版第8図1～3は内外面に格子状叩目を有する破片で、素地は暗赤茶色を呈し、外面には暗茶色、内面には灰褐色の釉がかかる。器面の色調、叩目は黒崎町大墓遺跡出土の骨蔵器に酷似し、九州の唐津焼系と推定される。4は底径16cm前後をはかり、色調、胎土から見て1～3と同種の底部と考えられる。6は口縁部から肩部にかけての破片で、口径約14cm、素地は暗褐色で内外面にうすく濃茶色の釉が施され、器形、色調等は大墓遺跡の骨蔵器に近似している。

その他(第8図4　図版第7図1　図版第8図5)　図版第7図1は口縁部から胴部にかかる破片で、灰白色の素地に淡青灰色の釉が内外面に施され、器面には貫入も見られる。内面にはロクロ痕が顕著に見られ、口唇部は蓋付のためか無釉である。油注し等に使われたものであろう。第8図4　図版第8図5は高さ9.5cm、口径13cmを測り、素地は淡褐色で、内外面に鉄釉がかかる。底部はヘラケズリ痕と推定され、胴部にはロクロ痕が残る。大墓遺跡出土の匣鉢と同種の



第8図　陶器　(1/2,5)

ものである。

磁器（図版第8図7～17）

猪口（図版第8図7） 口径8.1cm、器高5.8cm、底径6.1cmを測り、高台は胴部の延長を削ってつくられている。高台内はめがね底を呈し、墨書で文字らしいものが書かれている。染付は外面に草花絵文が見られ、口縁部内面に装飾文を配し、底部と胴部の境に横線があぐり、見込みの中央に印文が描かれている。

碗（図版第8図8～10） 8は器高5.3cm、口径10cm、高台径4.2cmを測り、外面には藍色で草花文が下絵付され、高台を含む底部に3筋の内周があぐり、高台内には印文が見られる。9は口縁が縁反状を呈し、器高5.9cm、口径11.3cm、高台径3.8cmを測り、高台は口径に比べ3分の1の大きさである。染付は明るい青色を呈し、外面には竹を配した草花文、口縁部内面には装飾文、見込み中央に印文が見られる。10は高台径3.5cmをはかる底部破片で、内外面に染付が施され、外面の潤目文様は伊万里焼の特徴の一つと考えられる。

皿（図版第8図12～15） 12は高台径5cmと小さく、内外面の釉には気泡による陥没が見られる。黒味がかった染付で草花文が見込部に描かれている。14は内面の中心部に五弁花の印文が見られ、15は内面に唐草文様の染付がめぐっている。各片とも染付は黒味のある色調を呈し、14、15の内面には蛇の目形の釉剥ぎ跡が認められ、近世後半の伊万里焼と推定される。

徳利（図版第8図16、17） 器高11cm、高台径3.6cmと一般の徳利としては小形で、御神酒徳利として使用されたものである。胴部には淡青色の呉須で花籠手の下絵付が施されている。17は現高23cm、高台径9cm、頸部は径3.6cmと細く、下脇の形体を呈する。器面全体に施釉され、胴部には径5.5cmの沢渕（おもだか）を描いた窓絵があり、古伊万里系統であろう。

その他（図版第8図11） 底部破片で高台径5.8cm、高台の厚さは1cmと厚い。内面は素地と同じ灰色、高台部は淡赤褐色を呈し、外面の高台を除く他の部分が施釉されている。^{火入れ}としで使われたものと考えられる。

素焼き土器（図版第8図18、19）

18は推定口径34cmで、口縁部から胴部にかけての破片で、色調は淡赤褐色を呈し、外面にはススが付着している。同形の破片が32Mグリッドで7点出土し、ほうろくと考えられる。19は小壺状に中が空洞になっており、器高4.1cm、最大径5.7cmを測り、色調は茶褐色を呈する。

本遺跡で出土した陶磁器類は量的にも少なく、ほとんどが旧屋敷内に近接する32M及び46Iグリッドの地表下0.5～1mのごみ捨て場から一括して発見されたものである。出土遺物の下限はガラス瓶を含む昭和頃までのものがあり、本節で取り上げたものは近世後半から明治にかけて製作された陶磁器である。摺鉢、素焼き土器は県内で、その他は九州地方で焼かれたものと考えられる。

3. 石製品

本遺跡から出土した石製品には石臼、砥石の各1点が見られる。

石臼（第9図 図版第8図21） 石臼の上臼部で、推定径27cm、厚さは上面のくぼみ部で6.5cm、周縁部で9.2cmをはかり、くぼみ面は中央に行くにしたがい高くなり、下面是緩やかに凹む。下面の目は、あらく磨滅しているが、1cm間隔の溝をもつ左まわしの石臼と考えられ、側面には挽手の穴が穿たれている。

砥石（図版第8図20） 1面にのみ使用痕を有し、使用痕を上にした時の現存の長さは10cm、最大幅は7cm、厚さは8.5cmを測る。 (和田寿久)

註1 上原甲子郎氏のご教示による。

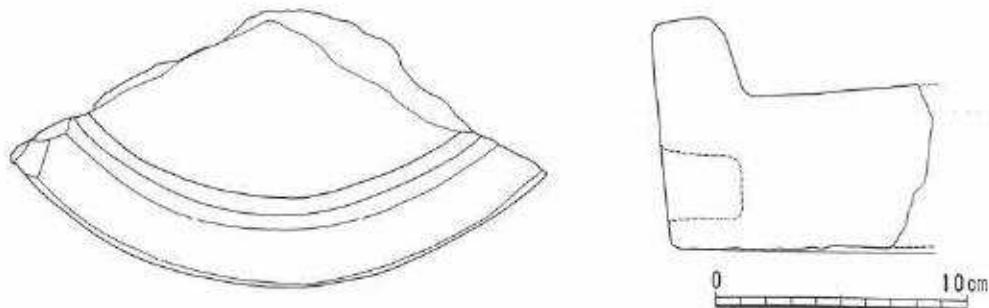
2 県立図書館石川秀雄氏のご教示による。

3 戸根与八郎「西蒲原郡黒崎町大墓遺跡調査報告」(『埋蔵文化財緊急調査報告書第1』新潟県教育委員会)昭和48年 P17第12図15、P19第13図16~19の骨蔵器の素地、胎土、焼成及び内外面の印目が酷似している。

4 根津美術館夷田直栄氏のご教示による。

5 註3参照。P15第11図6、P17第12図9、10の骨蔵器の素地、釉の色調及び口縁部から頸部にかけての器形が近似している。

6 註3参照。P15第11図1、4の匣体の素地、胎土、釉薬、器形が酷似している。



第9図 石臼 (1/3)

V 近世墳墓

1. 外部形態と土層（第10図）

本墳墓は調査区域のほぼ中央部38～43、A～Fグリッドに位置している（第3図）。墳墓の規模は裾部が東西14.3m、南北16m、墳頂部が東西9.3m、南北9.3m、高さは水田面から西側が1.2m、東側が0.9mを測る。形状は方形上墳状を呈し、長軸線がW—6—Nを示している。墳頂部は西側から東側に緩やかに傾斜して用水堤に接し、墳墓の周縁には松が植えられている。墳墓の調査についてはグリッドを独立させ、南から北に1・2・3……、西から東にA・B・C……とし、1A、2Aとグリッド名を呼称し、グリッドは $2 \times 2 m$ とした（第10図）。

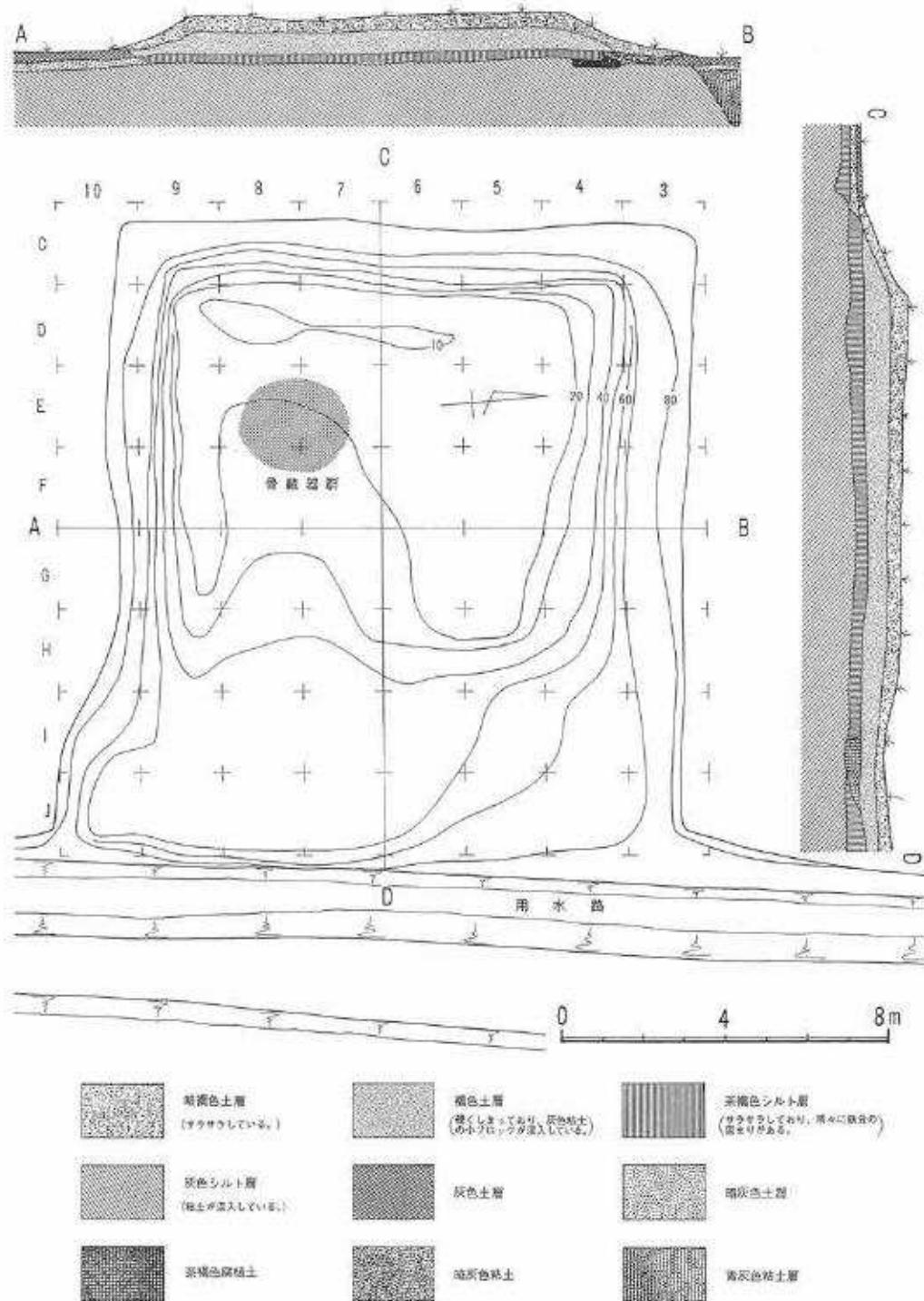
調査に入る直前までは墳頂部中央に墓標が立てられており、正面中央に「登坂墓」、右側面に「天保三辰年/十一月廿三日/登坂庄衛門」の文字が三行分ち書きで陰刻されていたが、高速道の用地買収が完了したため、燕市光暉寺に改葬した。墓標から用水堤まで石壇が敷設されていた。墓を管理していた上野喜八郎氏の話によれば、登坂家は墓の西側に居しており、当時は墓の前の用水がなく、墓標から東側に長い石壇が敷設されていたとのことである。上野氏が言われるようにこれだけ大規模な墳墓が附近になく、登坂家が旧家であったことを物語っている。

墳墓は今回の改葬の外、以前にも一部掘られており、墳頂部に部分的な凸凹がみられる。墳墓南側の水田土層は第1層が灰色土層で耕作土となっている。第2層は暗褐色土層、第3層は灰色シルト層で粘土が混入している。北側水田部は第1層が灰色土層、第2層が暗褐色土層となっており、第3層が青灰色粘土層となっている。西側水田部は第3層が茶褐色シルト層となっており、墳墓第3層と同一層になっている。墳墓は第1層がサラサラした暗褐色土層で、約30cmの厚さで墳墓全体を覆っている。第2層は灰褐色粘土の小ブロックを混入した褐色土層で、硬くしまり約60cmを測る。第3層はややサラサラし、鉄分を含み硬くしまった茶褐色シルト層で、約25～45cmの厚さを測る。第4層は粘土が混入した灰色シルト層となっている。

墳墓第2層は東側用水堤まで確認されるが、第3層は用水堤手前で溝状に切れており、東側墓域と考えられる。南北線、西側線は第2層、第3層の切れる部分が一致しており、これが墓域と考えられる。これで墳墓の計測を行うと東西11.8m、南北13mとなる。昭和47年に調査された黒崎町大墓遺跡は約 $7 \times 7 m$ と推定され、これより規模が大きい。

（本間信昭）

註1 戸根与八郎「西蒲原郡黒崎町大墓遺跡発掘調査報告」（『埋蔵文化財緊急調査報告書第1』新潟県教育委員会）昭和48年



2. 内部施設

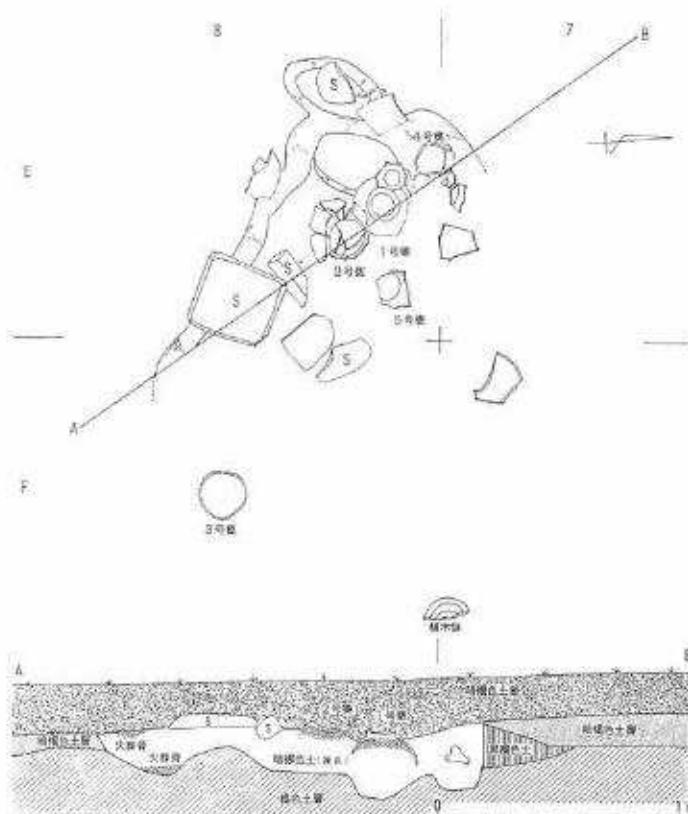
本墳墓は中央部に墓標があり、この部分については調査前に改葬した。墓標下には甕に入った多量の火葬骨が埋納されていたと言われるが、光昭寺に持ち込まれた時はボリ袋に入れられていたとの事で、確かなことはわからない。本調査で検出された骨蔵器群は7E・F、8E・Fグリッドで、改葬した位置とは異なった地点にあたる。

骨蔵器は墳頂下約20~60cmの間で検出され、第2層暗褐色土を掘り込んでいる。しかし、早い時点では掘り返されており、骨蔵器が検出されている部分は攪乱されている。骨蔵器は割れ、散乱し、甕の底部が火葬骨が入ったまま逆さになって検出され、埋葬時の位置を留めていたものは3号甕、4号甕で、3号甕は胴上半が欠陥していた。1号甕は底部に火葬骨を埋納したまま逆さになっており、胴上半は約1m四方に散乱している。2号甕は逆さになり、押しつぶされた状態で検出されている。

3号甕は離れた位置で検出され、埋納時の姿を呈しているが胴上半が散乱している。4号甕は立てられていてが甕直上まで攪乱しており、蓋はのせられていなかった。5号甕は割れ、散乱していた。これら甕の他、蓋、鉢が検出されているが甕と組合っていたものはない。また、これらの焼物といっしょに凝灰岩質の切石が検出されているが、施設等は確認されなかった。

骨蔵器の検出されている範囲は、東西2m、南北1.5mの範囲に限ぎられている。

(本間信昭)



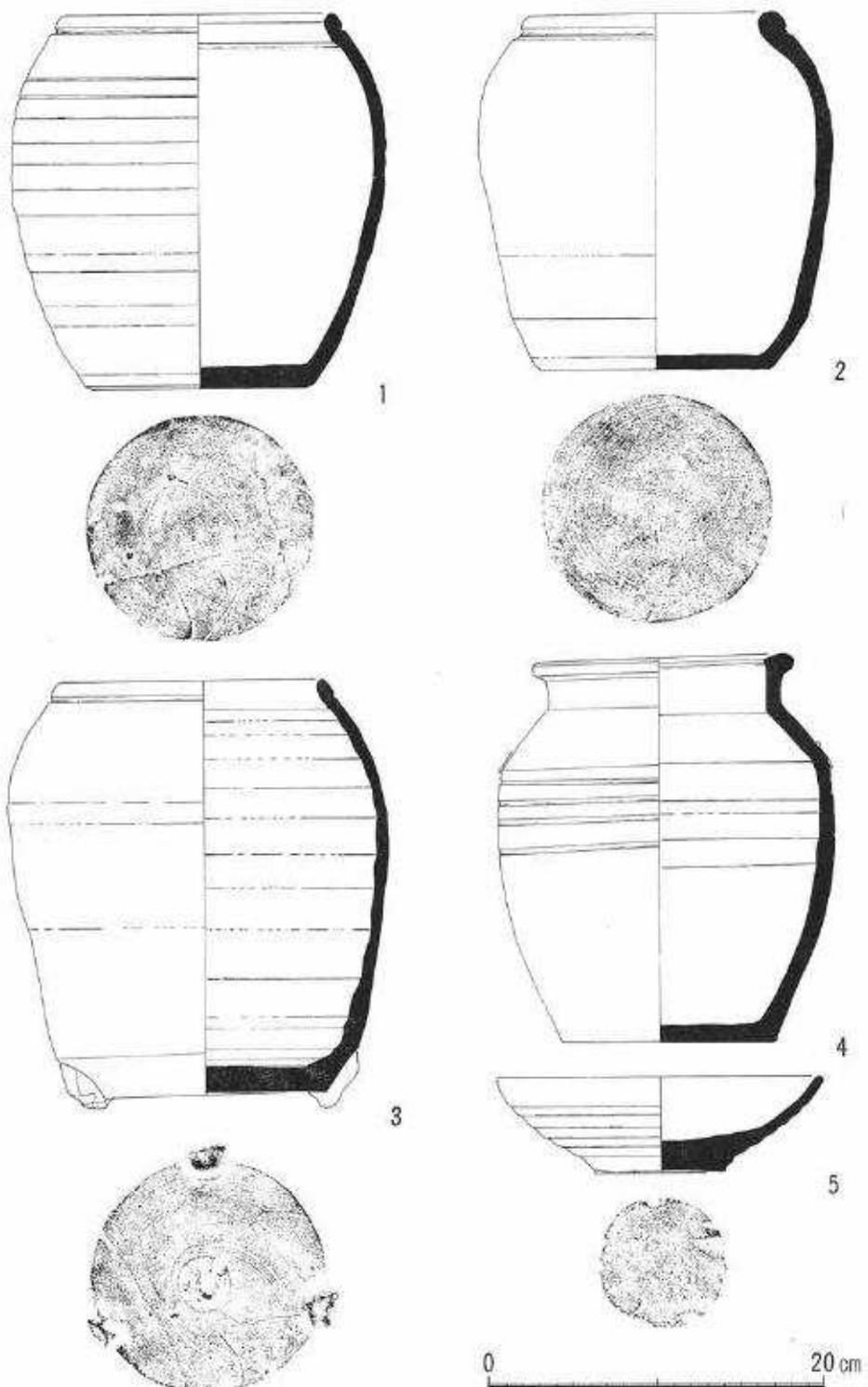
第11図 骨蔵器出土状態

3. 出土遺物

本墳墓から検出された遺物は骨蔵器甕、鉢、攢鉢、植木鉢、蓋その他の陶磁器で、以前に掘り返えされているため骨蔵器は割れ、散乱した状態で検出された（第11図、図版第10図）。埋納時の位置を保持していると判断されたものは、3号甕、4号甕の2個で、これらも胴上半は割れて周囲に散乱していた。

骨蔵器甕（第12図1～4・第13図1、図版第12図1～4・図版第13図1）　骨蔵器甕は5個検出され、うち3個は素焼の陶器で2個が施釉陶器である。

1は2号甕で逆さになっており、押しつぶされたような状態で検出された。甕は褐色を呈する素焼の陶器で、口径16.5cm、底径13.8cm、高さ21.6cmを測る。口辺部は丸く、胴上半から内傾し、1条の沈線を有する。胴部やや張りぎみで緩やかな曲線となり、外面にロクロ痕が明瞭に残っている。内面は回転による横ナデで、平滑になっている。底部近くは窓で削られ、底部は糸切底となっている。2は3号甕で、きちんと立てられており埋納時の位置を保っていると判断されたが、胴上半が割れ散乱している。甕は褐色を呈する素焼の陶器で、口径16.4cm、底径14cm、高さ20.7cmを測る。口辺部は丸く内傾し、1条の沈線を有する。肩部が張り、長胴形を呈し、胴部にはロクロ痕が残り、内面は横ナデ整形されている。底部は糸切底となっている。3は4号甕で、きちんと立てられており埋納時の位置を保っていると判断されたが、甕は割れていた。甕は暗褐色を呈する素焼の陶器で、口径15.5cm、底径14.2cm、高さ25.3cmを測る。口辺部は丸く、1条の沈線を有し器全体が薄い。胴部がわずかに張り、長胴形を呈する。胴下部は窓削りされ、底部が厚く糸切底になっている。底部には3個の方形の脚が貼附されている。4は6号甕で、割れて散乱していた。口径16.7cm、底径18.8cm、高さ22.5cmを測る。頸部が直立し、口辺部上面がわずかに山脈を呈し、両端が突き出している。肩部が張り、胴部が緩やかな曲線を描き、肩に2個の円形粘土板を貼附し、胴上位に4条の平行沈線文を有する。頸部、胴下部、底部内面に格子状印目文が残っている。外面には淡灰色の釉が施され、内面には黒褐色の釉が施されている。胎土が赤褐色を呈し、きめがわりと細かいがザラザラした感じをもっており、器形、釉薬等から唐津系のものと推定される。第13図3は第1号甕で、底部が逆になり胴上半が割れて散乱していた。口径27cm、底径13cm、高さ30cmを測り、頸部が直立して口辺部が外に突き出し、口辺上面が内傾する。胴部は肩が張り、胴部が緩やかな曲線を描いて底部に至る。底部は厚い削り出し高台となっている。甕は内外面全体に黒褐色の釉薬を薄くかけ、外面は胴下半まで白色釉をかけ、2面に黒褐色釉薬で松絵を描いている。胴下半は白刷毛目の塗り上げ手法で平行線、波状文を描いている。内面は頸部まで白色釉がかけられている。
この甕は佐賀県武雄古唐津系陶器で松絵水甕と称されているものである。

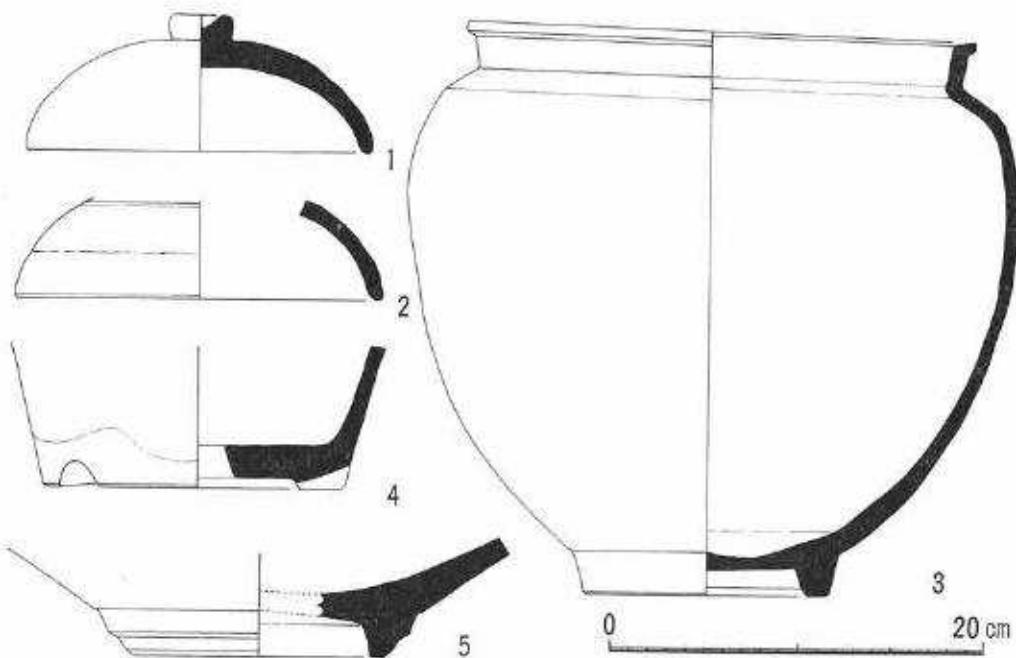


第12図 骨藏器 豆・鉢

鉢（第12図5 第13図5 図版第12図5 図版第13図2・5） 鉢は3個検出され、1個が素焼陶器、2個が施釉陶器である。第12図5は褐色を呈する素焼の陶器で、口径19.3cm、底径7.8cm、高さ5.5cmを測る。底部は糸切の平底で、口辺部は底部から直斜状に大きく開き、外面にロクロ痕を明瞭に残し、内面はきれいに横ナデされている。第13図5は底径13cmを測る。内外面は削り整形され、内面には白色釉薬がかけられ、白刷毛目塗り上げ手法で同心円と波状文を描いている。外面は削り整形のみで、高台は削り出し段がついている。図版第13図2は底径9cmで、内外面削り整形され、内面は淡緑色の釉薬がかけられ、白刷毛目の塗り上げ手法で同心円と波状文を描いている。外面は削り整形のみで、高台は削り出しとなっている。

摺鉢（図版第13図4・5・7・8） 摺鉢は4点検出された。4・5は大きく開き、口辺部がカギ形屈曲し、口唇部が直立する。内面口辺部下には全面に摺目が施され、4は内面の全体と外面胴上半に黒褐色釉薬が施され、5は内外面全体に黒褐色釉が施されている。7は底部で、内外面全体に黒茶褐色釉薬が施され、削り出しの高台を有する。8は平底の摺鉢で、内外面に暗茶褐色の釉薬が施されている。

骨蔵器蓋（第13図1・2 図版第12図6 図版第13図15） 骨蔵器の蓋は2個検出され、いずれも褐色を呈する素焼陶器である。1は口径18.7cm、高さ6.8cm、摘径3.7cmを測る。天井部から丸い曲線をもって口辺部に至り、中央が凹む摘が貼附されている。胎土は素焼骨蔵器甕と同質で、整形、焼成も同様である。2は口径19.5cmで、天井部が削り整形され、口辺部外面と内面が横ナデ整形されている。胎土、整形、焼成は1と同様になっている。



第13図 骨蔵器甕・蓋・植木鉢・鉢

植木鉢（第13図4 図版第13図8・10・13） 9・10は胴部が直立し、口辺部が外側に突き出している。地に暗青色の厚い釉薬を施し、口辺部が白色の海鼠釉となっている。13は底径15.5cmで、底部に1個の水抜き孔を有する。底部は削り出し高台で3個の水抜き溝を有する。外面には底部近くまで黒褐色の釉薬がかけられている。

壺（図版第13図11） 11は陶器壺で、削り出しの高台から緩やかな曲線をもって立ち上る。胎土は茶褐色を呈し、若干きめが荒い。外面には淡緑色の線が描かれ、内外面に淡灰色の灰釉が全面にかけられている。胎土・釉薬等から唐津系のものに類似している。

磁器碗・皿（図版第13図12・14） 12は磁器碗で、藍色の染付絵が描かれている。13は陶器小皿で、内面に藍染付がなされ、蛇の目となっている。

本遺跡から検出された陶磁器は以上の如くである。これらは素焼陶器、施釉陶器、磁器に分類され、用途的には骨蔵器と供膳的器物に分けられる。骨蔵器は素焼陶器と施釉陶器があり、素焼陶器には甕、蓋、鉢、施釉陶器には甕、鉢、擂鉢がある。素焼骨蔵器甕は鉢、蓋とセットになっていたものと考えられ、成形、胎土、焼成が類似している。施釉骨蔵器甕は施釉鉢、擂鉢とセットをなすものと考えられるが、甕2個に対して鉢が2個、擂鉢が3個検出されており、どれがセットをなしていたものか不明である。植木鉢は骨片の附着もなく骨蔵器に使用されていたものかどうか断定できない。しかし、大墓遺跡では骨蔵器として使用されている器物に火消し壺、匣鉢形のもの等があることや、底部を穿穴している例があることなどから、植木鉢が骨蔵器に使用されていた可能性も考えられる。供膳のための器としては壺、磁器碗、皿等があり、他にも酒杯、徳久利片等が検出されている。

（本問信昭）

- 註1. 永武或「古唐津の系譜」（『陶器講座第3巻』日本Ⅲ江戸前期）昭和47年
2. 戸根与八郎「西蒲原郡黒崎町大堀遺跡調査報告」（『埋蔵文化財緊急調査報告書第1』新潟県教育委員会）昭和48年

VI 総括

1. 新潟県における近世火葬墳墓

新潟県における火葬墓の調査が行なわれたようになったのは昭和30年代からのことで、偶然の発見からの調査で、調査された火葬墓のほとんどが古代から中世にかけてのものである。古代のものでは真野町大願寺遺跡、両津市羽吉遺跡がある。前者は土師器甕、後者は須恵器横瓶に火葬骨を納め埋葬されたものである。中世のものでは中条町韋駄天山遺跡、笛神村華報寺遺跡、小千谷市岡林遺跡、十日町市小黒沢遺跡、柿崎町金谷遺跡、上越市善光寺浜遺跡、栗島浦村観音堂遺跡、真野町真輪寺遺跡など8例がある。これらは火葬骨を甕に納め埋葬したもので、骨蔵器は珠洲系陶質甕・古瀬戸瓶子等が用いられており、片口、摺鉢、鉢などが蓋として組み合さっている。また華報寺伝高阿廟、真輪寺遺跡では石匂いの施設があったといわれ、華報寺遺跡からは骨蔵器に2個体以上の火葬骨と正安元年(1299年)の銘文のある経筒の納められたものが検出されている。このように古代から中世にかけての火葬墓の調査が進められ、埋葬についてある程度明らかになってきた。しかし近世墳墓については所有者が明確であるために調査の機会が得られず、民俗学的調査が中心となって進められてきた。このような中で、昭和47年に行われた大墓遺跡の発掘調査は、近世墳墓について新見地を与えた。

大墓遺跡は西蒲原郡黒崎町大字木場に所在する。規模は $5.7 \times 5 m$ 、高さ70cmの方形土壇状を呈する墳墓である。上層部からは近世骨蔵器群、下層には中世と推定される51個の火葬骨埋納穴群が検出された。近世の埋葬形態は1.骨蔵器に葺石を伴うもの、2.骨蔵器が単独に埋納されたものに分けられ、埋納の形態としては1.蓋石を有するもの、2.蓋を伴うもの、3.蓋を伴わないもの、4.底部もしくは胴部穿穴のあるもの、5.入子になっているものの5タイプに分類されている。骨蔵器には各地の陶器が用いられ、器形、器種が変化に富んでおり、胴部に穿穴したと考えられるものが検出されている。また、蓋として用いられた器物には蓋、鉢、摺鉢、石があり、鉢、摺鉢は底部が穿穴されている。これら陶器は施釉陶器が用いられており、火消壺形の骨蔵器1点が素焼陶器である。埋葬の形態としては葺石を有したり、骨蔵器、蓋に穿穴したりしているところから、旧態の埋葬形態を残している。また、骨蔵器に2個体の火葬骨を有するものがあるところから、両墓制的可能性をもつていて考えられている。

以上が大墓遺跡の概要である。本墳墓の規模は $11.8 \times 13m$ 、高さ約1mで、面積が大墓遺跡の約3倍で、墓域も明確である。墓域が明確であることは墳墓の周囲が水田と畑地の地目の差異からのものである。いずれにしても、これだけの規模を有するものは、両墳墓の周辺ではなく、両家が村落の中で大家であったことを示している。本墳墓の所有者である登坂家は江戸時

代から明治、大正にかけて質屋等を経営しており、庄屋であった清野家より大きな宅地、財力を有していたとのことである。^(註1) 埋葬形態では、1.骨蔵器を単独に埋納したもの、2.多く検出された板状切石から推定される。石匂いの施設に埋納されたと考えられるものの2形態に分類されるが、本調査において掘り返えされていたためこの2の形態は明確ではなかったが、改葬した中央部墓標下には、石匂いの中に骨蔵器が埋納されていたとのことで、近世でこのような施設を有するものは、武家の墳墓等に多くみられ、一般民衆のものまでは行われていなかつたものと思われ、^(註2) 墓標下に施設を伴うものはきわめてまれな例と考えられる。埋納形態では骨蔵器がいずれも蓋を有していたと考えられ、骨蔵器は使用目的、すなわち骨蔵器としての目的を持って焼かれたものと、生活容器を2次的に使用したものがある。前者は素焼骨蔵器であり、後者は施釉骨蔵器である。また本墳墓で検出されている骨蔵器に穿穴の痕跡はないが、摺鉢、鉢を蓋としている点で旧態の姿をとどめているにすぎない。これは蓋に鉢、摺鉢を用いているという点で大墓遺跡と一致しているが、底部、胴部等に穿穴されていないという点では旧態の姿を留めておらず、骨蔵器としての目的をもって焼かれた容器が用いられてきていることから、現代的な埋葬形態に変化する過渡期としてとらえられる。

これら骨蔵器は一時期に埋葬されたものではないことはあたりまえのことである。登坂家は光熙寺過去帳に正徳4年(1714年)から記載されているが、それ以前については光熙寺が火災にあっているためわからない。過去帳に記載されているもののうち正徳4年(1714年)～明治33年(1900年)までの186年間に33人の葬儀が行われている。しかし、検出されている骨蔵器は本調査で5個、改葬したものを含めても10個に満たない。改葬した墓標が天保3年(1832年)であり、これから明治33年までは20人の葬儀が行われている。墓標が天保3年に建てられているところから、この墳墓の上限は天保3年頃と考えられる。この墓標下の埋納施設がどのようなものであったかはわからないが、改葬時の話からは1個の壺とボリ袋に入る量の焼骨ということである。天保3年3人、弘化年間に2人の葬儀が行われており、墓標下に埋葬されたものは多くて5人位ではなかつたかと推定され、本調査で検出された骨蔵器はこれ以後の短期間に埋葬されたものと推定される。しかし、他の人の埋葬場所についての疑問が残り、大墓遺跡の両墓制が考えられるところから、本墳墓が宅地に近接していること、検出された個体が少ないと等から、埋葬墓として使用された時期と、拝墓として使用され、別に埋葬した時期があったとも考えられるが、推定の域を出ることができず、今後の研究を待ちたい。

(本文信昭)

註1 椎名仙草「佐渡出土の土師質骨蔵器」貝塚85・86合併号 昭和34年

2 椎名仙草「横堀の骨蔵器」貝塚81号 昭和31年

3 斎藤正治「韋馱天山」蒲原 昭和46年

4 中川成夫・岡本勇『越後・華嚴寺中世墓址群の調査』立教大学文学部史学科調査報告4 昭和34年

5 文化財保護委員会編「宝鏡印塔形骨蔵器」(『埋蔵文化財要覧3』) 昭和38年

- 6 中川成夫「十日町市小黒沢発見の正平在銘碑について」越佐研究第20集 昭和38年
- 7 室岡博・寺村光晴「越後国柿崎町金谷の墳墓」歴史考古 7 昭和37年
- 8 平野田三「中世墳墓の一様式」上越考古第2号 昭和39年
- 9 本間嘉晴・計良勝「栗島の考古」(『栗島』新潟県文化財調査年報第11) 昭和47年
- 10 新潟県教育委員会「新潟県考古遺跡要覧」(佐渡編) 昭和34年
- 11 川上貞雄「正安元年在銘経筒の出土」水原郷土誌料第5集 昭和48年
- 12 戸銀与八郎「西蒲原郡黒崎町大墓遺跡調査報告」(『埋蔵文化財緊急調査報告書第1』新潟県教育委員会) 昭和48年
- 13 上野喜八郎氏の話による。
- 14 近世の埋葬には土葬と火葬が行われており、より土葬の例が多い。火葬の場合、骨蔵器を墓壇の穴に埋納している例が多く、区画等の施設を有する例は中世墳墓に多い。しかし、武家の墓所調査では石室に棺を安置している。また燕、黒崎町附近の近世墓では、骨蔵器を埋納した上に墓標を立てており、口の部分が露呈しているものもあり、追葬できるようになっている例もある。
『仏教考古学講座』第7巻墳墓 昭和50年
河越逸行『掘り出された江戸時代』昭和50年

2. 出土陶器について

本墳墓から検出した陶磁器は素焼陶器、施釉陶器、磁器に分けられる。素焼陶器は甕、蓋、鉢の3器種で、いずれも成形、胎土、焼成が酷似しており、同じ窯場か同系統の窯場で焼かれたものと考えられるが、どこで焼かれたものかわからない。施釉陶器は甕、鉢、摺鉢、植木鉢、塗、皿などの器種があり、いずれも日常雑器である。図版第12図4の甕に類似するものは、黒崎町大墓遺跡で骨蔵器として検出されており、九州の焼き物と推定される。図版第13図1の甕は佐賀県武雄古唐津南部系の松絵水甕と呼ばれているもので、白刷毛目の塗り上げで描いた波状文と鉄釉で描いた松絵が特徴となっている。武雄古唐津は慶長初期に開窯され、松絵の水甕は寛永末年頃から明治時代頃まで製作されたといわれる。同じ武雄古唐津と推定されるものに図版第13図3の大鉢がある。白刷毛目の塗り上げの波状文が描かれている。この手法は弓野窯、小田志山窯、庭木山窯などにみられ、類似するものが大墓遺跡でも検出されている。図版第13図2の鉢は技術的には武雄古唐津に類似しているが、胎土が暗黄褐色を呈し、淡緑色の釉薬が全体にかけられている。植木鉢は海鼠釉がかけられており、海鼠釉は朝鮮唐津と呼ばれる佐賀県鬼子嶽帆柱窯、藤ノ川内窯、皿屋窯等で天正～寛永年間、佐賀県大河原窯、長崎県泣早窯等で慶長年間に焼かれている。しかし、現在ではこの手法が東北地方等各地で見られる。塗は灰釉がかけられており、胎土等から唐津系のものと推察される。これらの他に黄瀬戸系の壺片、薩摩系の壺片等が検出されている。

このように、本墳墓から検出された陶器は九州産のものが多く、他に東海地方のものもみられる。新潟県には九州産の陶磁器が大量に搬入されており、他に四国、東海地方の焼物が続いている。しかし、新潟県では近世になって佐渡、北蒲原、西蒲原、上越地方等に急速に窯業が

盛んになり、江戸時代後半から明治にかけて窯場地帯を形成するが搬入物である九州、東海地方のものに打ち勝つまでには至っていない。これは海運の変遷による影響が大きく、西廻り航路が16世紀に始まり、年貢米の運搬が大坂商人の手で行われるのが17~18世紀頃である。これにあって越後商人が和船を使って年貢米の運搬のほとんどを手中に握るのが19世紀の頃である。19世紀には信濃川、阿賀野川を使い内陸奥深くまで物資の輸送を行っており、県外産の産物が内陸奥深くまで大量に運び込まれている。このことから、九州、四国、東海地方の陶磁器が大量に新潟県に搬入されるのは19世紀頃と考えられる。また、出土陶器で窯場が明確である武雄古唐津の松絵水甕白刷毛目塗り上げ鉢は寛永末年頃からの焼成で、それ以前には逆のぼらず、墓標が天保3年(1832年)である。これらの陶器が初期のものであるとするなら墓標が建てられるまで約200年の空白があるが、これらの陶器は明治まで焼かれており、海上運輸の面から墓標の建てられる前後のものとしてとらえるのが妥当と考えられ、江戸時代後期のものと推定される。

(本間信昭)

註1 戸根与八郎「西蒲原郡堀崎町大墓遺跡発掘調査報告」(『埋蔵文化財緊急調査報告第1』新潟県教育委員会 昭和48年)

2 『武雄古唐津系陶芸技法調査記録』佐賀県教育委員会 昭和49年

永井成「古唐津の系譜」(『陶器講座第3巻』日本Ⅲ 江戸前期) 昭和49年

3 畠村吉右衛門「日本の民窯」陶磁大系27 昭和47年

4 加藤唐九郎編「原色陶器大辞典」昭和47年

永井成「陶器講座第3巻」日本Ⅲ 江戸前期 昭和49年

3. ま　と　め

本遺跡は過去において土師器が採集されており、附近には塚、中世陶質土器の出土地があり、法線内に近世墳墓が所在していることなどから本調査区を決定した。しかし、本調査において中世陶質土器が少量検出されたにすぎず、古代・中世の遺跡確認までには至らなかったが、近世墳墓から良好な資料を得たことによって、一応の成果を上げることができた。

本調査で検出された中世陶質土器は石川県珠洲焼に酷似しており、珠洲焼そのものかその系統をひくものと考えられ、室町時代頃のものと推定される。しかし、これらはまとまっておらず、移動している可能性が大きい。附近にある下郷屋遺跡の内容が明確でなく、これに関連しているものか判断ができないが、周辺の工事で中世陶質土器が発見されているところから下郷屋遺跡に関連している可能性もある。また、墳墓以外の地域、特に調査区南側地区では砂の堆積が多く、河川または洪水等による流路があった可能性が考えられる。近世の陶磁器は主として調査区北側地域で検出され、これをとりまく閑崎、又新が近世成立の集落であるところからこれらの集落から破棄されたものと解される。

近世墳墓は全国的に調査例が少なく、調査されているものには将軍、藩主、歴史上著名な人

物等のものが多い。新潟県においては新発田藩主の墓、大墓遺跡の2例があるのみで、民俗学的な調査が行われてきたに過ぎない。本墳墓と同様の性格をもつ大墓遺跡との比較において、骨蔵器は大墓遺跡で検出されていない素焼の骨蔵器が検出されており、本墳墓の特徴的なものとなっている。他の施釉骨蔵器は大墓遺跡のものと類似している。埋葬形態では大墓遺跡がより中世的な様相が強く残っているのに比して、本墳墓骨蔵器に穿穴がみられないことや骨蔵器専用の容器が用いられているところから、大墓遺跡より若干年代を新しくするものと解せられる。したがって、大墓遺跡が江戸時代後期とされているところから、本墳墓は江戸時代末期前後頃のものと考えられる。

現在、陶磁器の研究が急速に進められ、各地で窯場の調査も行われてきているが、近世に入って急に窯場の数が増大し、同系統のものが広範囲に分布していくところから、遺跡で検出される陶磁器に明確な年代と窯場をとらえることが困難であり、今後の研究を待つところが多い。また、近世墳墓においても一般的のものについては所有者が明確であり、道義的に調査が困難で、偶然の機会をとらえて行われているにすぎず、今後資料の増加を待つしかない。新潟県における近世墓は土葬が主体となっており、火葬墓の多くは新潟平野に所在しているところから、地域性を強く持っているものと考えられるが、宗派、階層、時代等が問題になるものと考えられ、今後調査例の増加を待って、本墳墓の再検討が必要となる。

（本問信昭）

南蒲原郡中之島村杉之森遺跡発掘調査報告

I 調査の経緯

1. 発掘調査に至る経過

中之島村は新潟県のはば中央部に位置し、信濃川と刈谷田川にはさまれた洲島地域で、新潟平野南部の肥沃な稲倉地帯となっている。村の東側は東山丘陵から流出して蛇行をしながら北流する刈谷田川をはさんで見附市・柴村に、西側は中世以来の生活物資及び年貢米の重要運搬路であった信濃川をはさんで与板町に、南側は長岡市に接している。

杉之森遺跡は江戸時代に刈谷田川の河港として栄えた今町の南西方1.5kmにあって、遺跡の中心部は現集落の住宅地内にある。本遺跡は中村孝三郎・高橋盛雄両氏によって発見され、採集資料の一部は長岡市立科学博物館・高橋盛雄氏等が保管している。しかし、本遺跡についての詳細な文献はなく、昭和32年刊行の『中之島村郷土史』(前)に「単孔甌の底部、完形器台が出土している」と記載されている。また、昭和44年8月の長岡科学博物館考古研究室編の「越後先史時代編年表」では本遺跡の遺物を2分類され、『杉の森』^(註1)が弥生時代後期に、『杉之森』^(註2)が古墳時代に位置づけられているが資料の提示はなされていない。この他に『新潟県遺跡目録』^(註3)、『農業振興地域指定市町村内遺跡目録』^(註4)、『全国遺跡地図(新潟県)』^(註5)に弥生式土器・土師器・須恵器が出土していると記載されているにすぎない。

昭和46年に北陸高速自動車道建設工事の法線(長岡~黒埼間)が発表されると、当時の文化財保護室では計画路線上を踏査した。その結果、遺跡の一部が法線内にかかることが判明した。その後、協議を重ね法線にかかる部分については、発掘調査を実施して記録を残すことになった。昭和47年以来発掘調査実施までの間、県教育庁文化行政課の埋蔵文化財担当職員は数回にわたって、分布調査・聞き込み調査を実施し、発掘調査範囲を決定した。このような経過をたどる一方、北陸高速自動車道建設工事は着々と進み、昭和50年度に入ると土盛工事は長岡~中之島間、燕地区の2ヶ所を残すのみになった。

発掘調査は日本道路公団が委託者、新潟県知事が受託者となって、昭和50年10月13日から中之島村教育委員会ならびに地元有志の協力を得て実施するはこびとなつた。

(戸根与八郎)

註1 中村孝三郎『先史時代と長岡の遺跡』(長岡市立科学博物館研究調査報告第8冊) 昭和41年

註2 新潟県教育委員会『新潟県遺跡目録』(新潟県文化財年報第6) 昭和42年

註3 新潟県教育委員会『農業振興地域指定市町村内遺跡目録』昭和46年

註4 文化財保護委員会『全国遺跡地図(新潟県)』昭和43年

2. 発掘調査の経過

杉之森遺跡の発掘調査は、新潟県教育委員会（教育長 厚地 武）が発掘主体者となり、県教育庁文化行政課理文化財担当職員を中心に、県内考古学研究者・地元文化財関係者を調査員に依頼し協力を得た。また、地元の有志の方々には作業員として多大なる協力を得た。このようにして本遺跡の発掘調査は、昭和50年10月13日～12月5日まで約54日間にわたって行うことになった。

調査日誌抄

10月13日は発掘調査用具・器材の輸送ならびに調査事務所の設営作業を行う。14・15両日は本線143.40km地点のセンター杭を基点として北側へ180m、南側へ180m、幅45mにグリッド設定の基本杭を打つ作業を行うと共に、遺跡及び周辺地域の写真撮影、調査対象地域内の略測図の作成を行う。調査対象地域内には、既存の水路・用水があるために調査可能グリッドは全体的に少ない。発掘調査に際しては、調査対象地域が水田のため遺物・遺構がどんなあり方で存在するのか全く不明であった。このため、遺構・遺物包含層の確認が第一の課題であった。そこで、調査対象地域内のD・H・L・Pラインを3グリッド間隔で試掘し、遺構・遺物の確認をし、遺構の存在などにより周辺グリッドの拡張及び全面発掘に切り替えて行くことを調査の基本的態度とした。

10月16日には発掘の諸準備が全て完了したので、午前9時に調査員・作業員が調査事務所に集合し、調査の概要・調査の方法及び庶務的事項の説明を行ない、実質的発掘作業に着手した。発掘は南側の120ラインから北側へ順次進んで行くことにした。10月28日までに、ほぼ全域の試掘グリッドによる状況把握が完了したので、今後の調査方法・拡張地域の検討をした。これまでの段階では、84～92、108～112ラインでピット・溝状遺構が検出され、土師器（甕・器台）、中世陶磁器（甕・措鉢・青磁）、錢貨などが層序に関係なく混在して出土している。また、27～70ラインでは遺物の出土及び遺構の検出もなくなり、中心よりはずれるものと判断された。このように、遺物・遺構の集中地域は調査対象地域の南側約半分である。更に、遺構・遺物のあり方から、84～92ラインと108～112ラインに2分された。前者をA地域、後者をB地域と呼称することにした。

10月28日～11月28日までは、A地域、B地域をベルトコンベヤー6台を使って全面発掘することにした。まず、ピット・溝が確認されていたA地域の東側から溝の方向、ピットの相互関係などを追求する。しかし、ピットは、建物跡としてはまとまりがなく、何か他の目的を持ったものと考えられた。P₁からは木挽が、P₂からは曲物・木挽が、6号溝では下駄・中世陶質土器（珠洲系土器・常滑系土器）・土師質土器などが出土している。またP₁₆は深さ1.68mに達し、その規模から素掘の井戸と考えられた。この頃から天候が悪化し、グリッド内は降雨のた

め満水となり、排水に追われながらの作業になった。B地域でも確認されていたピット・溝の方向・相互関係を考慮して、東側・南側を全面的に拡張する。108Eでは曲物を井戸枠とした井戸、溝が検出された。ピット内部からは土師器片、中世陶質土器片・青磁片などが出土しているが、A地域と同様にまとまりがない。本地域の遺構確認範囲は、A地域に比して狭く、南側は114ラインを、東側はIラインを境にして泥炭層の発達が見られ、遺物も少なくなる。

11月29日から12月3日までは、A・B両地域の平面実測を縮尺1/60で行う。また、写真撮影及び補足調査やだめおしを行うと共に水路・道路等の補修作業を行う。4日からは調査用具・資材の整理、遺物の梱包作業、図面などの記録類の整理を行う。5日には器材などの撤収を行ない、多大なる成果をおさめて発掘調査は終了した。

約54日間にわたる本遺跡の発掘調査に対して、中之島村教育委員会関係者ならびに地元有志の方々から種々のご援助と協力を賜わり、予期以上の成果をあげて終了することができたのは、関係者各位のご理解と協力に負うところが大であった。ここに厚く感謝の意を表する次第である。

なお、本遺跡の発掘調査は下記の人員構成で実施した。

(戸根与八郎)

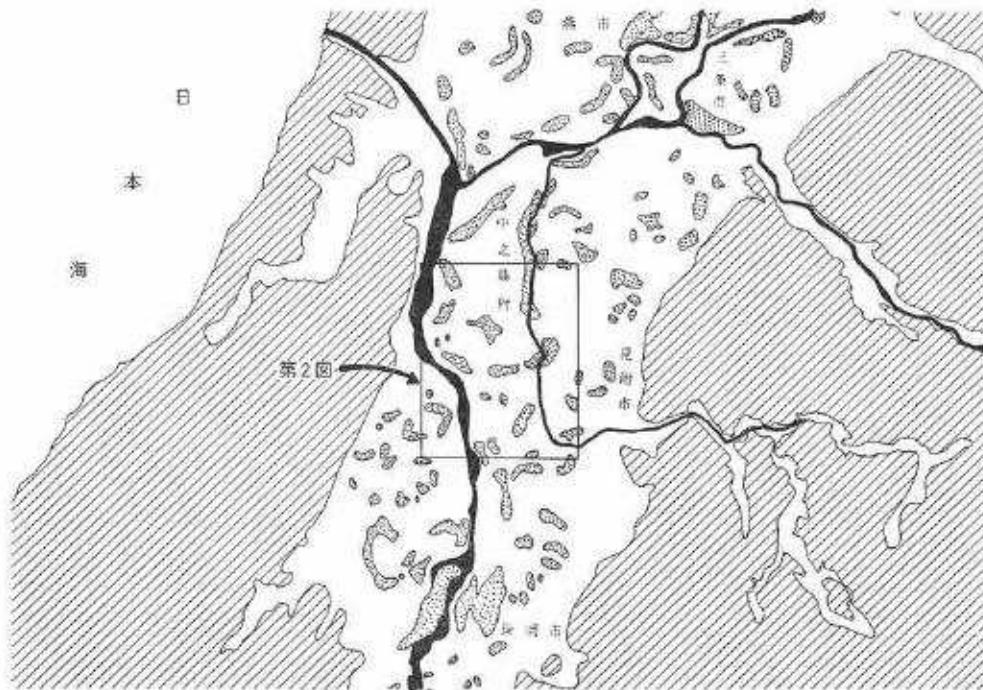
調査担当者	戸根与八郎	(県教育庁文化行政課学芸員)
調査員	閔 雅之	(県教育庁文化行政課文化財主事・日本考古学協会員)
	金子 拓男	(県教育庁文化行政課文化財主事・日本考古学協会員)
	本間 信昭	(県教育庁文化行政課主事・日本考古学協会員)
	駒形 敏朗	(県教育庁文化行政課学芸員)
	家田順一郎	(県教育庁文化行政課嘱託)
	和田 寿久	(県教育庁文化行政課嘱託)
	中島 栄一	(市立新潟工業高等学校教諭・日本考古学協会員)
作業員	杉之森・高畑・横山・五百刈・中条・中之島・柏島・六所・中西・野口・大保の有志	
協力員	中之島村役場	
	中之島村教育委員会	
事務局	江坂 勇	(県教育庁文化行政課管理係長)
	小野 栄一	(県教育庁文化行政課主事)
	高橋 陽子	(県教育庁文化行政課嘱託)

II 遺跡

1. 遺跡の立地と周辺の遺跡

本遺跡は新潟平野の南部、南蒲原郡中之島村大字杉之森字裏田に所在し、信濃川の右岸の微高地上に立地している(第2図)。中之島村は大河津分水の分歧点の上流に位置し、海拔約15mをはかる沖積平野中に存在している。かつては中小の潟湖を多数有していたが、今日では全て乾田化されている。村の東側の境界は刈谷田川で、近代に至るまで洪水をくり返し、見附・中之島をはじめとする下流の集落を苦しめてきた。この沖積平野の表層の地質は砂・泥・礫を主体とする氾濫原性の堆積物である。

中之島村は南北にわずかに傾斜する平坦地で、全面積42haのうち、集落の立地する微高地は6haにすぎず、他は低湿地である。「中之島村郷土史」では近世末期の文書をもとに、各集落の成立年代を掲げているが、それによれば、村の南半部の集落が概して古く、養老6年とされる五百刈をはじめ8・9世紀の年代が4ヶ所あり、杉之森は神亀4年(727)とされている。



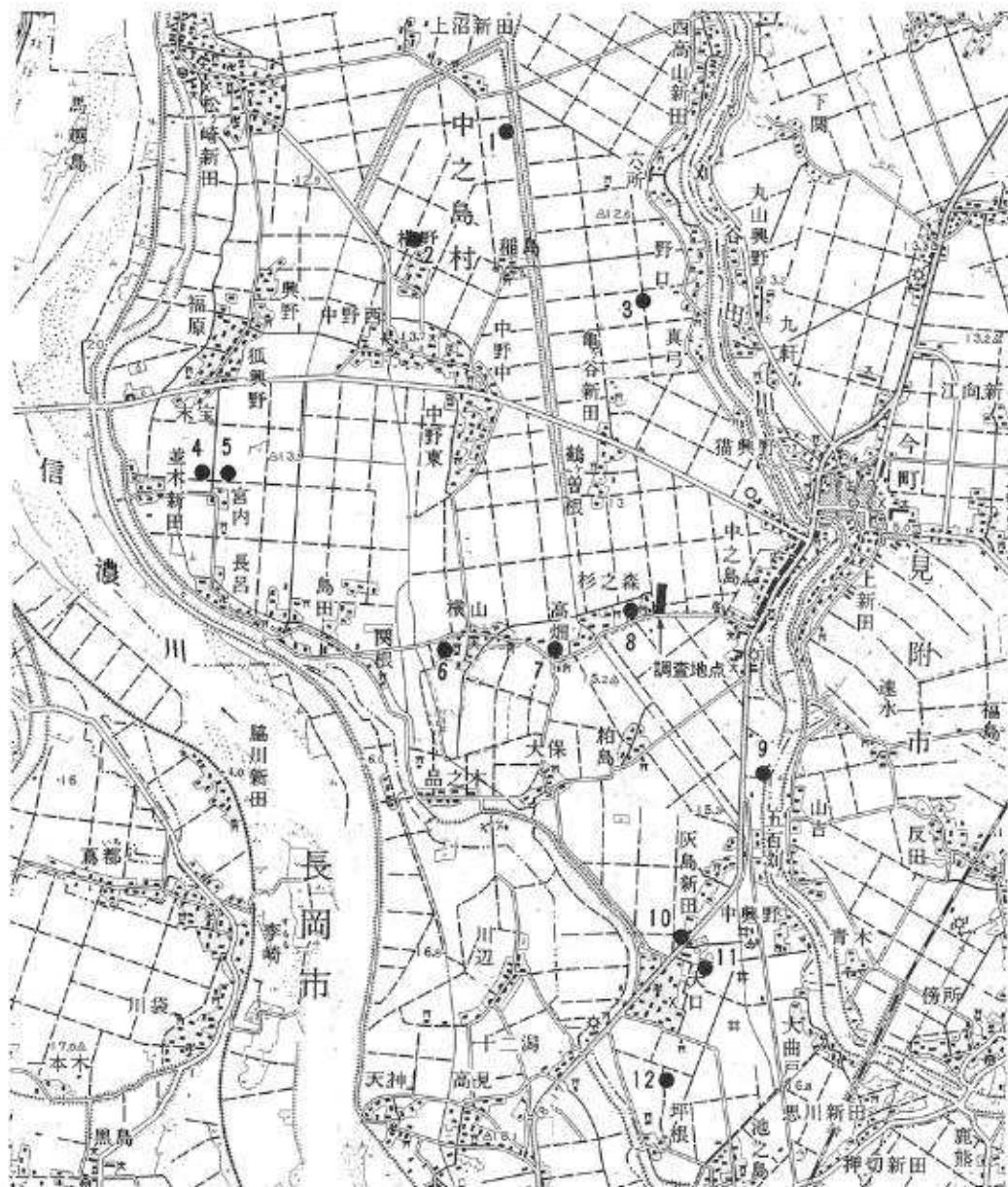
第1図 中之島村周辺の地形 (1:30万、土地分類図15—経済企画庁—昭和48年による)



これにくらべて北部の大字のほとんどが新田名で、近世以降の開発を暗示している。

『新潟県遺跡地図』に登録されている中之島村の遺跡は6遺跡あるが、すべて村の南半部に所在する。このたびの調査に伴う分布調査ではこの他に6遺跡を確認した。

第2図1は昭和初年の水路工事で桶を出土したという地点で、俗説に寺院跡といわれている。



(国土地理院「三条」1:50,000原図
昭和49年発行)

第2図 中之島村遺跡分布図 (1:5万、三条)

- 1 観音寺 2 カジマシキ 3 野口 4 古宮 5 宮内館 6 横山 7 高塚
8 杉之森(根岸) 9 藤十郎 10 居掛 11 大口 12 平根

2は昭和33年頃、鉢溝が出土したといわれ、城跡という俗説もある。3は昭和初年にカマス一杯ほどの古銭を出土したことがあり、その内容は「日本出土銭貨一覧」^(註3)に示されている。4は鞍掛神社の旧地といわれ、陶質土器を出土している。5は宇館屋敷で、付近の地名も併せて館跡と推定されている。6は陶質土器を出土している。高畠から杉之森にかけては一帯に土師器が散布し、一連の遺跡と考えられる。9でも土師質の土器が採集されているが少量の細片である。10~12は土師器・須恵器の出土地として周知の遺跡である。

以上のように中之島村内の出土遺物は土師器が最も古く、遺跡の大半は村の南半部に片寄っているが、これは聚落成立の年代とされるものの傾向にはほぼ一致するといえよう。

(家田順一郎)

註1 中之島村公民館 「中之島村郷土史」(前・後) 昭和32年

註2 新潟県教育委員会 「新潟県遺跡地図」昭和50年

註3 「日本出土銭貨一覧」『日本考古学辞典』東京堂 昭和37年



第3図 調査地域旧土地更正図(明治28年)



第4図 グリッド設定図

2. グリッドの設定

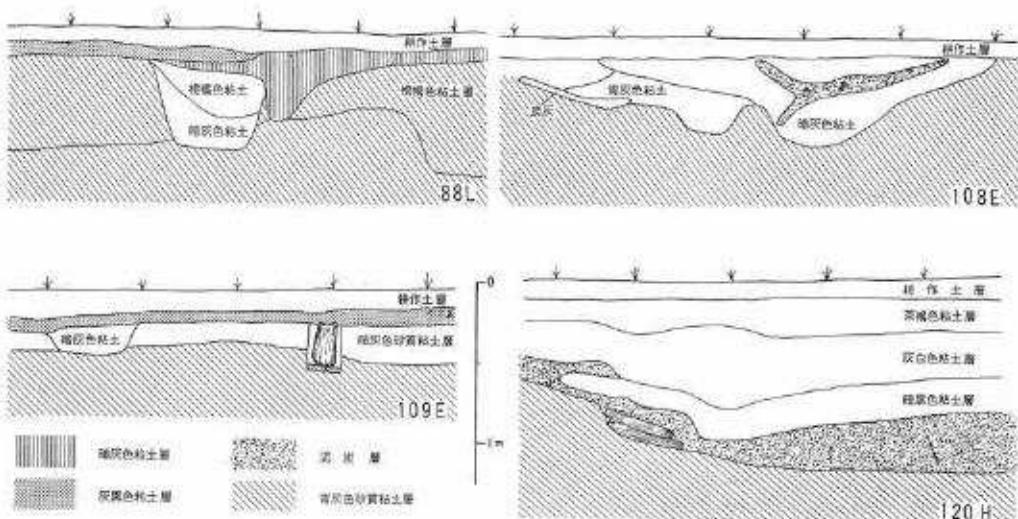
発掘調査対象地となった道路法線内は、過去数回にわたる現地踏査にもかかわらず、水田地帯のため遺跡の範囲・遺物の包含状況及び遺跡の中心などは必ずしも明確ではなかった。グリッドの設定は現地踏査の結果や旧地形図などをもとにして、第4図の如く全長360m、幅45mの範囲に設定した。グリッドは $3 \times 3\text{ m}$ を一区画として東西15グリッド、南北120グリッド、総計1800グリッドを数え、西から東へアルファベットを、北から南へ数字を付し、数字とアルファベットの組み合せをもってグリッドの名称とした。

(戸根与八郎)

3. 土層堆積と遺物の出土状況(第5図)

本遺跡の土層堆積状況は各グリッドでかなり異なって複雑な様相を呈しているが、基本的には水平堆積をしている。水田部の堆積状況は、Ⓐ耕作土直下に泥炭層が発達している地域、Ⓑ耕作土直下に炭化物を含む暗灰色粘土ないし灰黒色粘土が堆積している地域、Ⓒ耕作土直下に青灰色粘土ないし灰色粘土が堆積している地域の3タイプに大別される。

Ⓐタイプは114ラインのD～J、108～112ラインのL～Pに見られる。116Dでは泥炭層が耕作土直下に約25cmの厚さで堆積しているのに対して、120Hでは耕作土下70cmで約30～40cmの厚さを有して堆積し、その差は約50cmを測る。耕作土と泥炭層の間には茶褐色粘土(鉄分の沈殿物あり)、灰白色粘土、暗黒色粘土がそれぞれ20～30cmの厚さで堆積している。また、東側の72Lでも粘土が砂質粘土となり、約1mの厚さで堆積している。このように泥炭層は南側・東



第5図 土層断面図(88L, 108E, 109E, 120H)

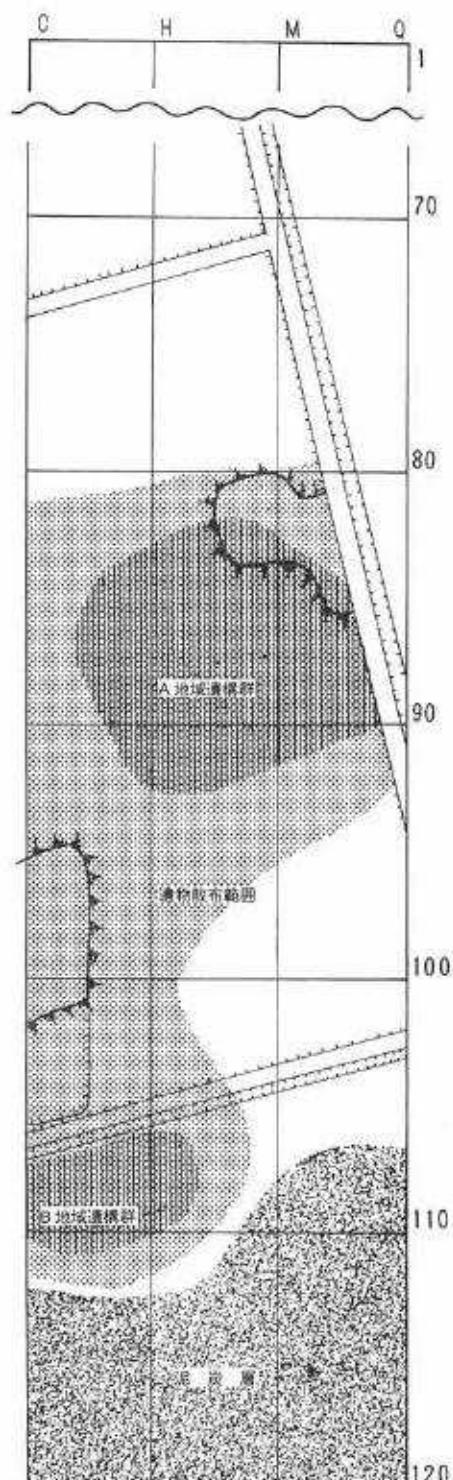
側へ行くに従って、徐々に深度を増して行く傾向があり、沼湖の存在が考えられる。遺物は散発的に破片となって、耕作土や泥炭層上面から出土している。

B) タイプは82~93ラインのE~P、108~111ラインのC~Iに見られる。88Lでは第2層の暗灰色粘土に灰黑色粘土がかぶさる様になっているが、炭化物の量によるものと考えられ、本来は同一層と考えられる。なお、暗灰色粘土の落ち込みはP₉₀の断面の一部で、ピット内部の充満土との区別は調査時点の観察では不明確であったが、明らかに底面の平らな落ち込みを切っている。遺物は本タイプの地域から出土量の90%が出土しているが、そのほとんどが破片となって単発に出土し、更に層位的にも関係がなく、土師器・須恵器・中世陶質器が混在して第2層から出土している。第2層以下からは遺物が全く出土しておらず、第2層が遺物包含層とも言えるが、正常な包含状態は示していない。しかし東側畠地の83Nの暗灰色粘土と水田部の暗灰色粘土との差は約25~30cmを測り、畠地が高くなっている。

このことから、水田部の第2層は基盤整備事業などによって上面が削平されたものと考えられるが、何時の時期の包含層か不明である。

C) タイプは1~80ラインのD~P、98~104ラインのL~Pで見られる。耕作土直下は青灰色粘土や橙褐色粘土となり、その下層は青灰色砂質粘土や灰色砂層、橙褐色粘土となる。遺物は耕作土から中世陶質土器片が数点しか出土していない。ピットや溝などの遺構も検出されず、中心地からはずれたものと考えられる。

(戸根与八郎)



第6図 遺物・遺構分布模式図

II 遺構と伴出遺物

1. A 地域の遺構と遺物

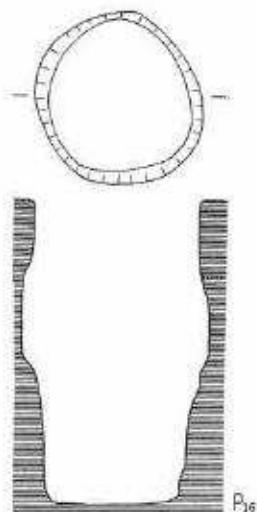
遺構

A 地域では井戸を含む 54 個のビットと 7 本の溝が検出された。

ビット群 (第 7 · 9 · 10 図、図版第 17 図～図版第 20 図)

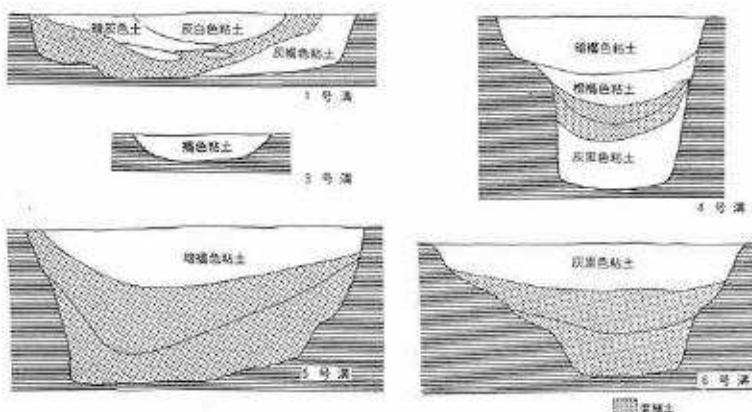
A 地域で検出された 54 個のビットは、第 9 図のように大きさが一定せず、位置に規則性を見出すこともできないために、相互の関係を明らかにすることはできず、また一部を除いては、個々の性格を把握することもできなかった。それぞれのデータは表 1 に示したとおりであるが、このうち半数の 27 個は径・深さが 15 ～ 45 cm の範囲にあり、一つのグループを形成すると考えられる。これらは何れも第 2 層からほぼ垂直に掘り込まれている。内部の土は灰黒色の粘土で木炭や灰を含むものが多く、遺物を包含しているものが 3 個あった。形状は橢円形に近いもの 5 個を除き、ほぼ円形と認められた。このグループのビットは柱または杭の跡と推定するのが妥当と思われるが、第 9 図に見るよう分布が散漫で、建物その他の施設の跡としてとらえることはできなかった。

次にデータ上のまとまりがみられるのは、径・深さが 55 ～ 105 cm の範囲にある一群で、15 個のビットがこのグループに含まれる。第 2 層から垂直に掘り込まれてビット底面が第 4 層の砂質



第 7 図 P₁₆ 実測図(1/40)

シルト層に達している。内部の土は灰黒色粘土で下部に灰を多く含み、底面に厚さ 2 cm ほどの腐植土がみられる。このグループに入るビットは P₂ · P₅ · P₆ · P₁₄ · P₁₅ · P₁₇ · P₂₁ · P₂₄ · P₂₅ · P₃₀ · P₃₇ · P₄₁ · P₄₃ · P₄₅ · P₅₂ の 15 個である。



第 8 図 A 地域 溝断面図 (1·3·5···1/20, 4·6···1/40)



第9図 A 地域遺構実測図

P₁は井戸と考えられる遺構で、底部に曲物の井筒を用いている。掘方は曲物をはめ込むために底部をせまくしたものらしい。側壁は曲物の上端で段状になっており、その北側の部分に楕形の漆器が乗っていた。また底面からは曲物の底板・皿形漆器・枕の破片などが出土した。

P₂₁は底面に2枚の杉板が敷かれたもので、他に遺物は認められなかつたが、井戸の一例と考えられる。またP₂₄・P₂₅では底面のほぼ中央に入頭大の礫が検出された。底面はどちらもほぼ水平で、礫の位置を考えると偶然に落ち込んだ可能性は少なく、意図的に投入されたとみる方が妥当ではないかと考えられる。井戸に関する呪術的儀礼の一つの表現であろうか。他の11個は規模において上記の4個のピットと同様なので、井戸の類に含めることもできると思われるが、他に積極的な根拠はない。

以上の2グループに含まれないもののうちに特異なものが2個ある。一つはP₁で径245cmを測り、ほとんど垂直に120cm掘り込まれているもので、本遺跡中最大のピットである。土師器・陶質土器の破片・楕形漆器を出土している。内部の土は腐植土や色調の異なるブロック状の粘土・灰などが不規則に堆積し、ゴミ捨て穴のような印象を受けるものであった。もう一つはP₁₆で、第2層の暗褐色粘土層を掘り込んだもので、深度は本遺跡中最も深い。遺物は検出されなかつたが、明らかに井戸跡と認められる遺構である。

溝（第8・9図、図版第17図・18図・21図）

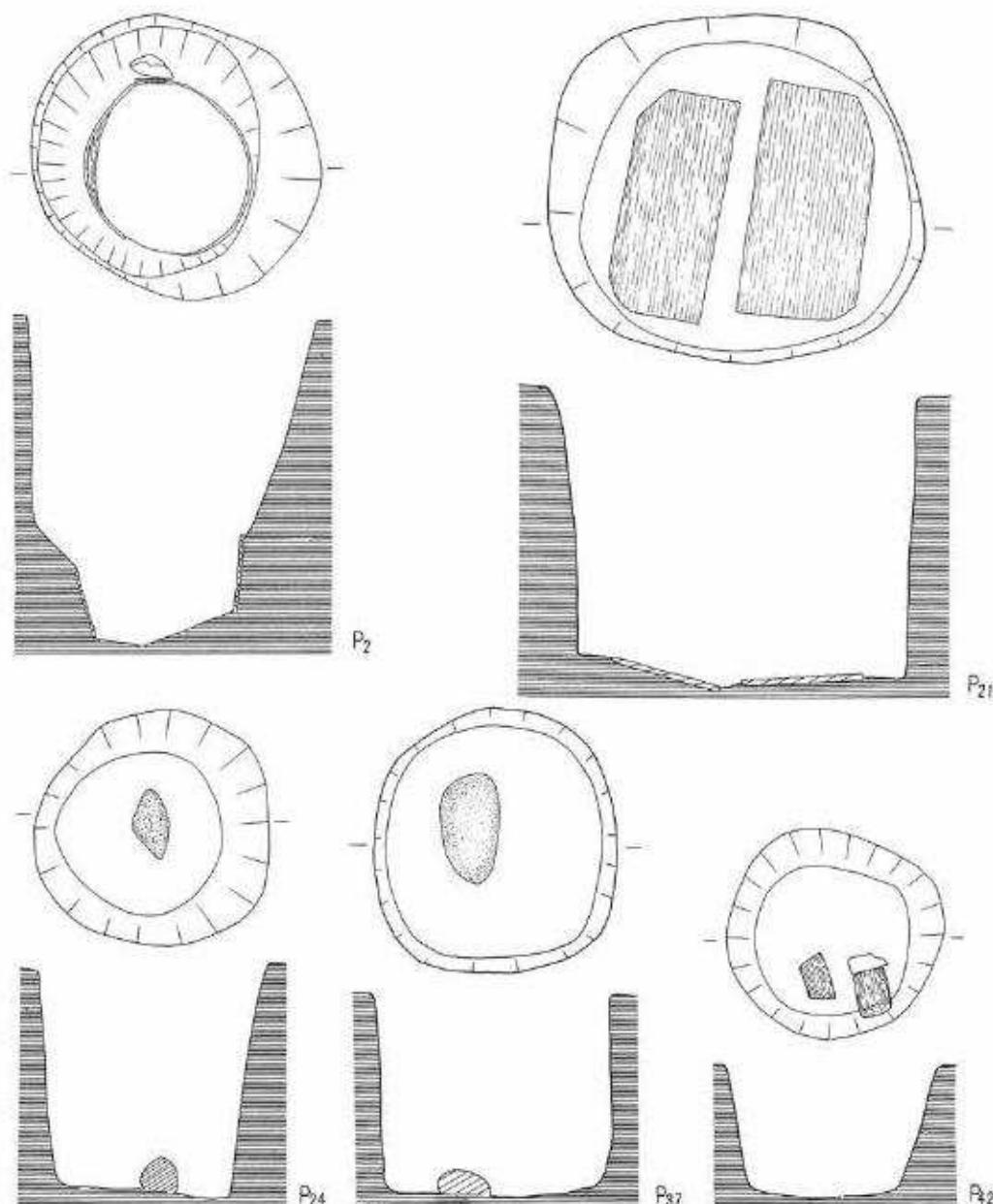
ピット群と共に検出された7本の溝状の遺構は、第9図にみるとおり全貌を把握することができなかつたので、その性格を見出すことが難しい。2・3・7号は10cm以下の深さのもので幅も40cm以下である。内部は褐色粘土の単層で腐植土は含まれていない。1・4・5・6号は第8図に示したように3～5層のレンズ状堆積で底部には何れも腐植土を堆積しており、溝として用いられたことを示している。4号と6号は一応連絡した形を呈しているが、連結部分が最も浅くなっている理由が理解できない。また4・6号共に、側壁の上部に段を持っていることが一つの特徴である。この2本の溝と1号溝とで、西側に「コ」の字形の区画が出来るが、1号の深さが20cm弱にすぎず、70～90cmの深さの4・6号と組み合わせることには疑問がある。

遺物

ピット内出土遺物（第11図・第12図1～6、図版第27図） 54個発見されたピットの内、遺物が出土したのは8個にすぎず、おもに土師器、珠洲系土器、漆器、木器などがピット底面および充満土内から出土している。

P₁（第11図4・第12図1～3、図版第27図1～11） 土師器、珠洲系土器、漆器が出土した。土師器（図版第27図1～6）は壺形土器と高杯ないし器台形土器の脚部片で、1・3～6の器面には柳目痕がみられる。2は高杯または器台の脚部片である。珠洲系土器は第12図1～3の推鉢と図版第27図7の鉢形土器とがあり、胎土に砂礫紋を含み、色調は黝黑色を呈し、焼成は堅密なものが多い。1は口縁に近い破片で、幅2.4cmで9条の掘目が、2は幅1.5cmで5条の掘目と波状

文が描かれている。3は底部に近い破片で、幅3.2cmの中に11条の横目を有し、左から右へと施している。2の色調は青灰色を呈し、器面はよく使用されたらしく、摩滅している。3の胎土には粗い砂礫粒が含まれている。第11図4は楕円形の素器で、木地の上に黒漆をじかに塗布し、底部内面と体部外面には鳥（鶴？）を図案化した文様を朱漆で描いている。また、底面には文字か文様が不明の朱書がみられ、もし文字とすれば「可」に近いものと思われる。漆器は削り出し成形でつくられ、体部は内縛気味に立ちあがっている。



第10図 ピット実測図 (1/20)

P₂ (第11図1・5・6、図版第27図12~16) 第11図5は内外面に黒色の漆が塗布された木製椀で、底部内面に2条の直線を朱書している。第11図6は内面に朱、外面に黒色の漆を塗った木製皿で、5、6ともに高台は削り出したものである。第11図1は柾目を利用した小形の曲物の蓋ないし底板で、周側面は斜めに切り落され、側板を止めた木釘等の痕跡は認められない。図版第27図14は曲物の側板片である。16は現存体長約27cm、最大径約10cmを測る杭で、下端は金属工具で削り落されて、多面体をしている。

P₂₁ (第11図2・3、図版第27図17・18) 2枚の板がピット内の底面の植物炭化物層の上に組み合わされて出土した。板は底面に納まるように角を金属工具で削り落して形を整えている。板の表裏面には摩滅痕などの痕跡は見られない。17はピットの西側、18は東側に位置していた。

P₂₄ (第12図4、図版第27図19~21) 土師器と珠洲系土器が出土した。土師器 (図版第27図19~21) はすべて變形土器の破片と思われる。第12図4の珠洲系土器は内面に幅2.7cmで8条の柾目を施した擂鉢形土器で、胎土に砂礫粒を含み、色調は黝黑色を呈している。

P₄₃ (第12図5、図版第27図22~26) 土師器と常滑系土器が出土した。土師器 (図版第27図22~26) は小破片のため、器形の判定は困難である。第12図5は平底の底部から直斜状に聞く常滑系の鉢形土器で、ロクロ成形で仕上げられ、器面に横ナデ痕がみられる。底面には2方向の条線痕がみられるが、静止糸切痕か、成形時の敷物痕かは不明である。底部外面には1条の沈線があげてある。色調は黒灰色を呈し、胎土に石英粒を含み、焼成は堅緻である。また、ピット底面から「永楽通宝」が1枚出土している。

P₃₀ (第12図6、図版第27図27~29) 土師器が3点出土している。第12図6は外反する口縁部片で、口唇部が内側に折りまげられている。器形は不明である。胎土は水流し粘土を用い、きめが細かく、色調は暗灰色をしている。

P₃₂ (図版第27図30~32) 變形土器と思われる土師器が3点出土している。

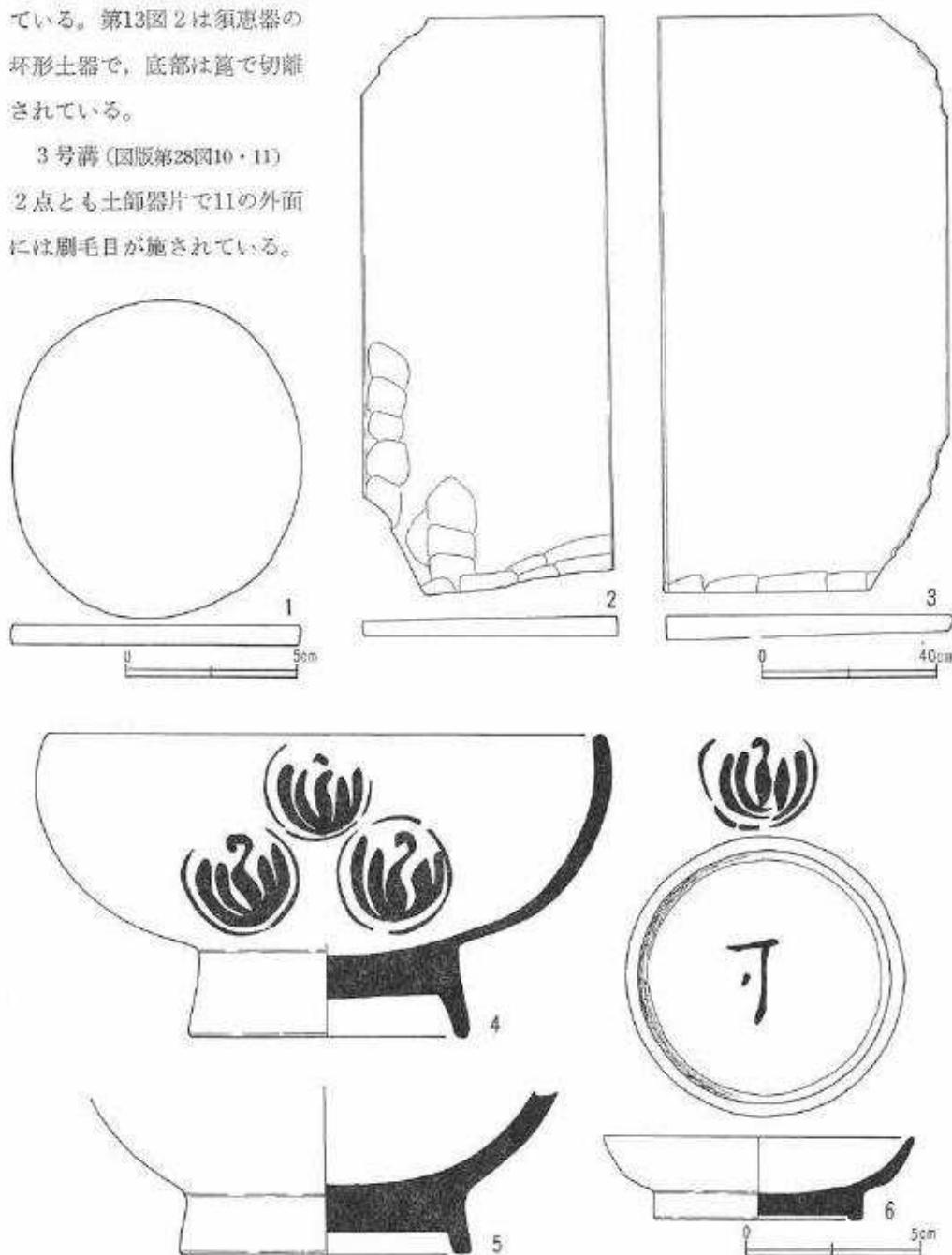
溝内出土遺物 (第12図7~15、第13図~第16図、図版第28図~図版第30図1~14) A地域で発見された1号から6号溝のすべてから遺物が出土している。特に6号溝からは多時代にわたる種々の遺物が出土し、その量も一番多い。

1号溝 (第12図7~10・第13図1、図版第28図1~6) 1号溝からは土師器・珠洲系土器・常滑系土器が出土している。第13図1は土師器の手捏土器で、揚底風の底部から口縁が内彎気味に立ちあがり、口縁部の内外面は横ナデ整形され、体部内面には成形時の指痕がみられる。色調は黄褐色を呈し、胎土には細砂粒を含み、焼成は良好である。第12図7・8は土師器の變形土器で、口縁は外方へ開き、内外面に横ナデ痕がみられる。8の胴部外面は刷毛目で調整されている。第12図9の珠洲系土器は、条線状叩目が右下りに施された壺ないし變形土器の胴部片で、黝黑色を呈している。第12図10は常滑系土器の擂鉢形土器で、器面が剥落しているため、上端に数条の柾目が見られる程度である。底部はゆるい回転糸切で切離され、周端部は笠で調整

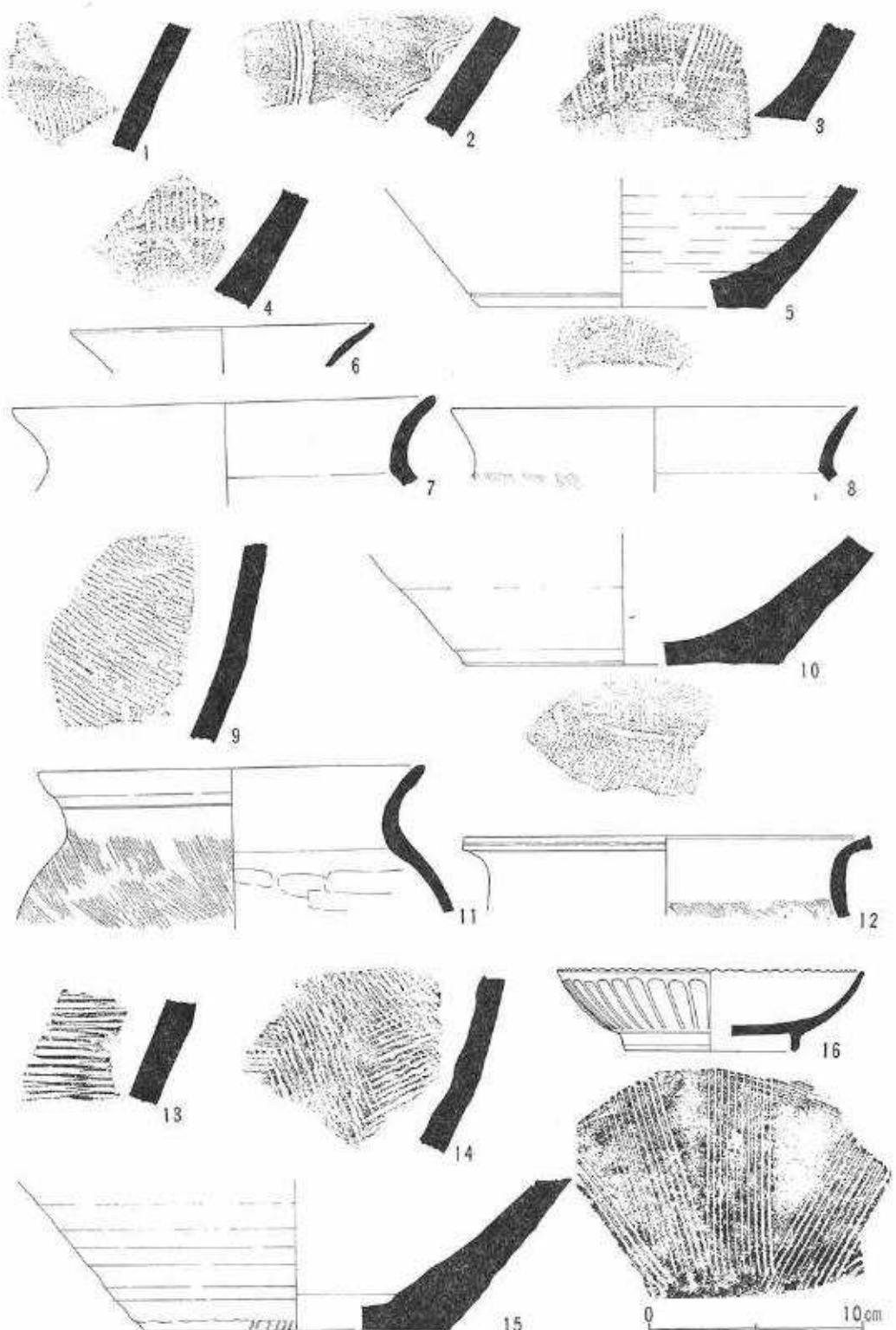
されて糸切痕を磨消している。この土器は内外面の色調が灰色から黒色に変化していることなどから2次的に火を受けたものと考えられる。

2号溝（第13図2、図版第28図7～9） 図版第28図7・8は土師器の變形土器の胴部片で、外面には刷毛目が施されているが、器面は荒れている。胎土には粗砂が混入され、茶褐色を呈している。第13図2は須恵器の環形土器で、底部は窓で切離されている。

3号溝（図版第28図10・11）
2点とも土師器片で11の外面
には刷毛目が施されている。



第11図 ピット出土遺物（曲物・盤・木椀）

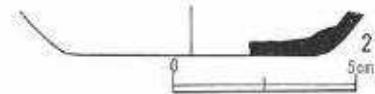
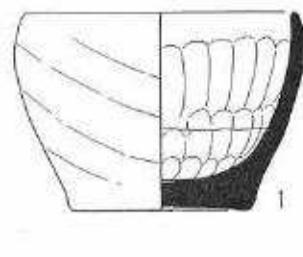


第12図 ピット及び1～5号溝出土遺物

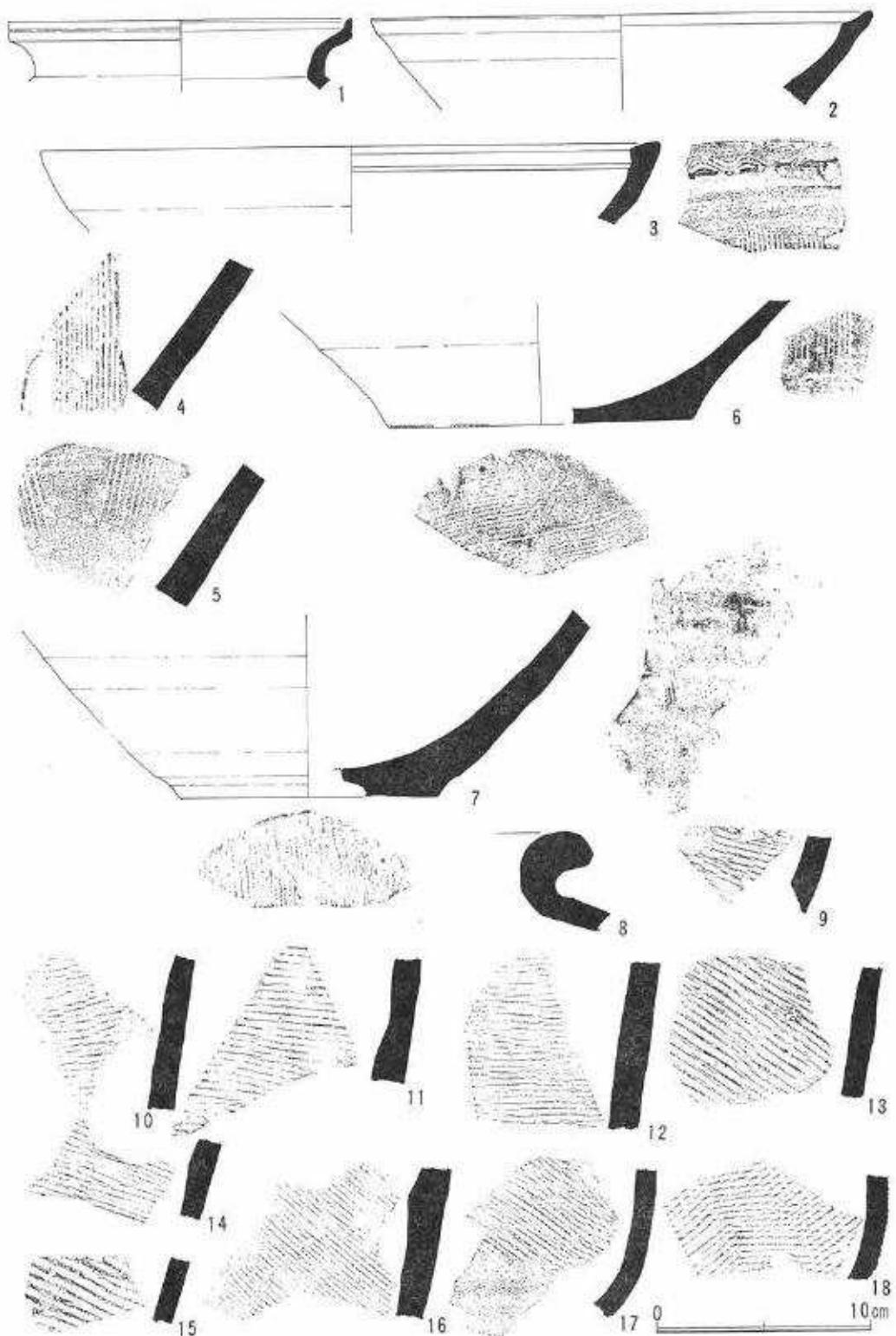
4号溝（第12図11・12、図版28図12～18） 土師器の壺形土器が7点出土している。胎土には砂礫粒が混入され、茶褐色を呈するものが多い。第12図11は頸部が直立ぎみに立ち上り、徐々に口縁が外反する壺形土器である。口縁部の外面は横ナデ調整され、胴部外面には櫛目整形痕が、内面には箒削り痕がみられる。12は口縁が頸部から強く外反するもので、口唇部は外削ぎ状を呈し、内面に段を有している。内面の胴上半部には斜位の櫛目調整痕がみられる。色調は暗褐色を呈し、焼成は堅緻である。

5号溝（第12図13～16・第16図1、図版第29図19～23） 5号溝からは珠洲系土器・常滑系土器・染付の磁器・土師質土器が出土している。第12図13・14は黒色を呈する珠洲系の壺ないし壺形土器の胴部片で外面に条線状印目が施されている。13の印目は平行に、14の印目は羽状に施され、14の内面にはおさえの痕跡がみられる。15は常滑系の擂鉢形土器で、溝の底面から出土した。平底の底部から直斜状に開く体部に続き、底面は箒で調整されている。体部外面にはロクロ痕がみられる。内面の櫛目は3cm幅で10条を1単位として右から左にかけて底部から口縁部に向って搔き上げられている。また、上端には横方向の櫛目が施されている。底部外周面には長さ4mm、幅0.5mmの刻目が部分的にみられる。胎土には石英粒が混入され、きめが細かく灰色を呈し、器面の色調は茶褐色を呈しているが、2次的に火を受けたためか黒色に変化している。第12図16は草花文様が描かれた染付の磁器で、溝の壁近くから出土した。形態は底部から体部が内翻気味に立ち上り、口縁部が小波状を呈する皿形土器で、高台は削り出しである。体部外面には錦手状の文様が施されている。素地にはきめの細かい石英粒等を含み、灰色を呈している。内外面には透明釉が施されている。第16図1は土師質土器で口縁がゆるく外へ開き、体部から底部にかけてヘラで研摩されている。内面にはススが付着している。

6号溝（第14図～第16図2～6、図版第29図・図版第30図1～14） 6号溝からは土師器・珠洲系および常滑系の陶質土器・土師質土器・瓦質土器・下駄・戯画石など多種多様の遺物が出土している。第14図1は土師器の壺形土器で、口縁部は直立する頸部から外反し、口唇部は直立している。口縁部には横ナデ調整痕がみられる。胎土には細砂粒を含み、色調は黄褐色を呈している。第14図2～18は珠洲系土器で、胎土に砂礫粒を含み、色調は黒色を呈し、焼成堅緻なものが多い。2～7は擂鉢形土器で、内面に施された櫛目は浅く「V」字状を呈している。2は口唇部が内削ぎされ、内面に段を有している。下端には櫛目の一部がみられる。3は口縁部がやや内翻する擂鉢で、内削ぎの口唇部内面には5条の櫛波状文が施されている。口唇直下に成形の痕跡が稜線となってみられる。櫛目幅は約4cmで18条を1単位としている。6・7

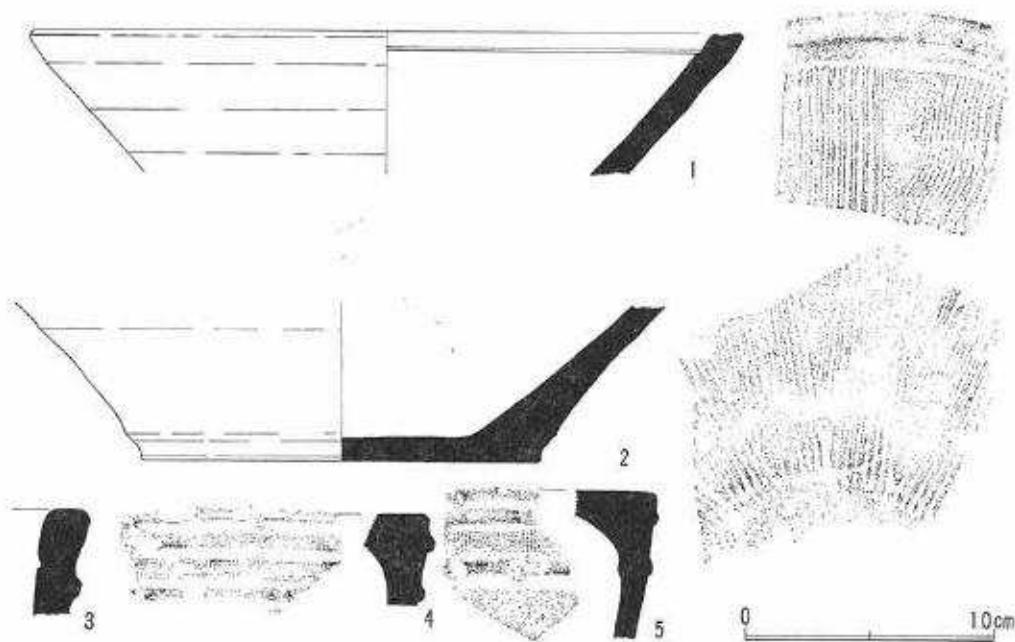


第13図 1・2号溝出土遺物



第14図 6号墓出土遺物（土師器・珠洲系土器）

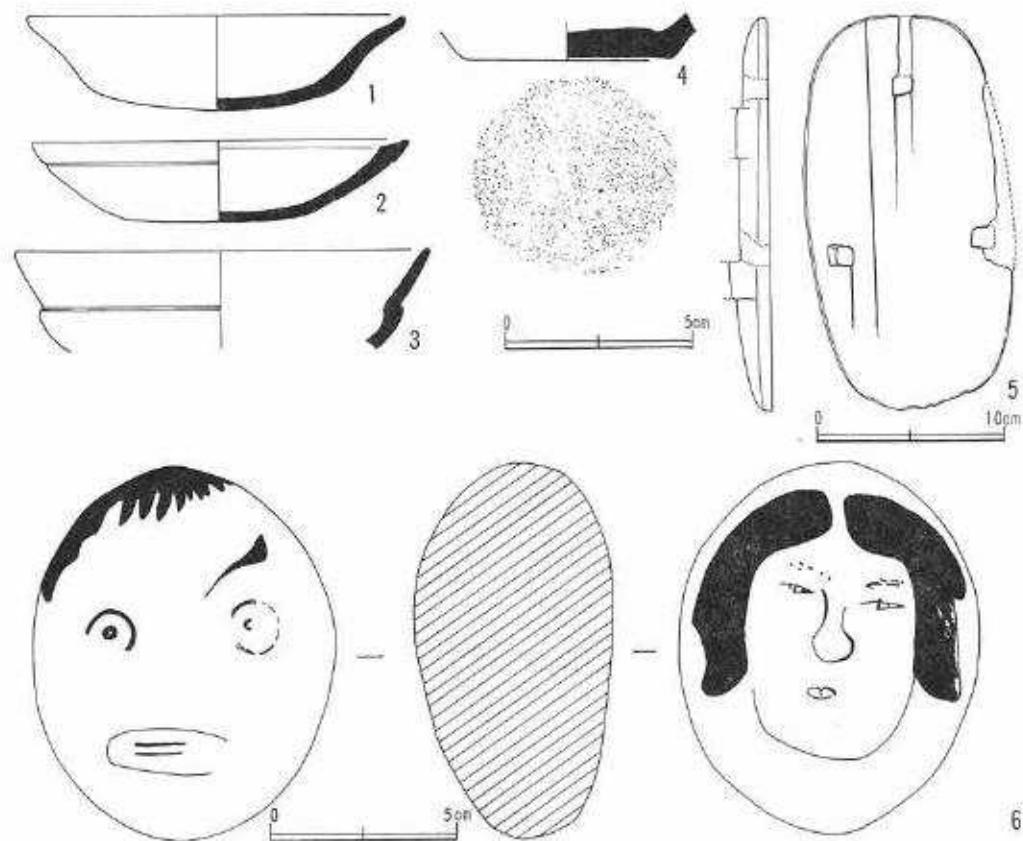
は体部で集約された曲線が底部でわずかに反転するもので、静止糸切で切離されている。6の底面周端部は窓で調整されて糸切痕が摩消されている。7は糸切痕が底部周端にまでおよんでいる。6の擗目は幅1.7cmで7条を1単位としている。また7には4条の擗目がみられる。第14図8は瓈形土器の口縁部片で玉縁状を呈している。口縁を外方へ折りまげて断面が「コ」の字状をしている。第14図9～18は壺もしくは瓈形土器の胴部片で、外面に条線状叩目、13～17は右下りの叩目、18は条線状叩目を羽状に施している。10・11・14・16の内面には円形のおさえ痕がみられる。なお、17は底部に近いものと考えられる。第15図1～3 図版第30図1～14は常滑系土器で、胎土に石英粒を含み、色調が白灰色あるいは茶褐色を呈するものが一般的である。第15図1・2は乳白色を呈する横鉢形土器で、1は口唇中央部がくぼむ平口縁で、口縁直下の内面に浅い1条の沈線がめぐらされている。内面には幅3.2cmで8条の擗目を1単位として施している。拓影の右側の擗目は、底部から施した擗目が体上部で途切れ、そこから新たな擗目を施している。2は底部から直斜状に開く横鉢形土器で、擗目は幅3.4cmで10条を1単位として右から左へ施している。しかし底部内面には擗目が施されていない。第15図3は平口縁の瓈形土器片で、内面に1条の沈線を有し、外面にはロクロ痕がみられる。図版第30図1は頸部が直立し、口縁部が外方に開く瓈形土器で、外面には緑色の釉がかかっている。2は瓈形土器の頸部片で、色調は白灰色を呈している。3～14は破片の曲線等から大形の瓈形土器の胴部片と考えられ、3～7は内外面の色調が茶褐色を呈している。8は外面が赤褐色、内面が白



第15図 6号溝出土遺物(常滑系土器・瓦質土器)

灰色を呈し、9～14は内外面ともに白灰色を呈している。外面に釉が施されているものは3～6・8である。第16図2～4は土師質土器である。2は緩やかな丸底から口縁が外向するもので、体部上半には稜線を有している。口唇部は内削ぎ状を呈し、内外面ともに箒で研摩整形されている。スヌの付着はみられない。3は体部に段を有し、口縁部が外向するもので、内外面ともに箒で研摩整形され、胎土には水漉し粘土が用いられている。内外面にはスヌが付着している。4は回転糸切痕を有する平底片で、内外面にはスヌが付着している。第15図4・5は瓦質土器の火鉢形土器で、口縁部は内側に折りまげられ、断面が逆「L」字状を呈している。口辺部には2本の凸帯が削り出され、凸帯間に連続角形文が押印されている。胎土はきめが細かく、白桃色を呈し、器面の色調は黒色である。第16図5は台長21cm、幅10.5cm、現存厚1.6cmを測る露卯下駄で、歯が欠落している。歯は台から削り出された連歯で、後歯が若干斜に削り出されている。眼は方形を呈し、前の眼は後の眼の中軸線上にある。後の眼は歯を避けるように斜に穿たれている。第16図6は川原石の両面に人面を墨で描いた戲画石で、男子と女子の顔を写実的に描いている。

(駒形故郷)

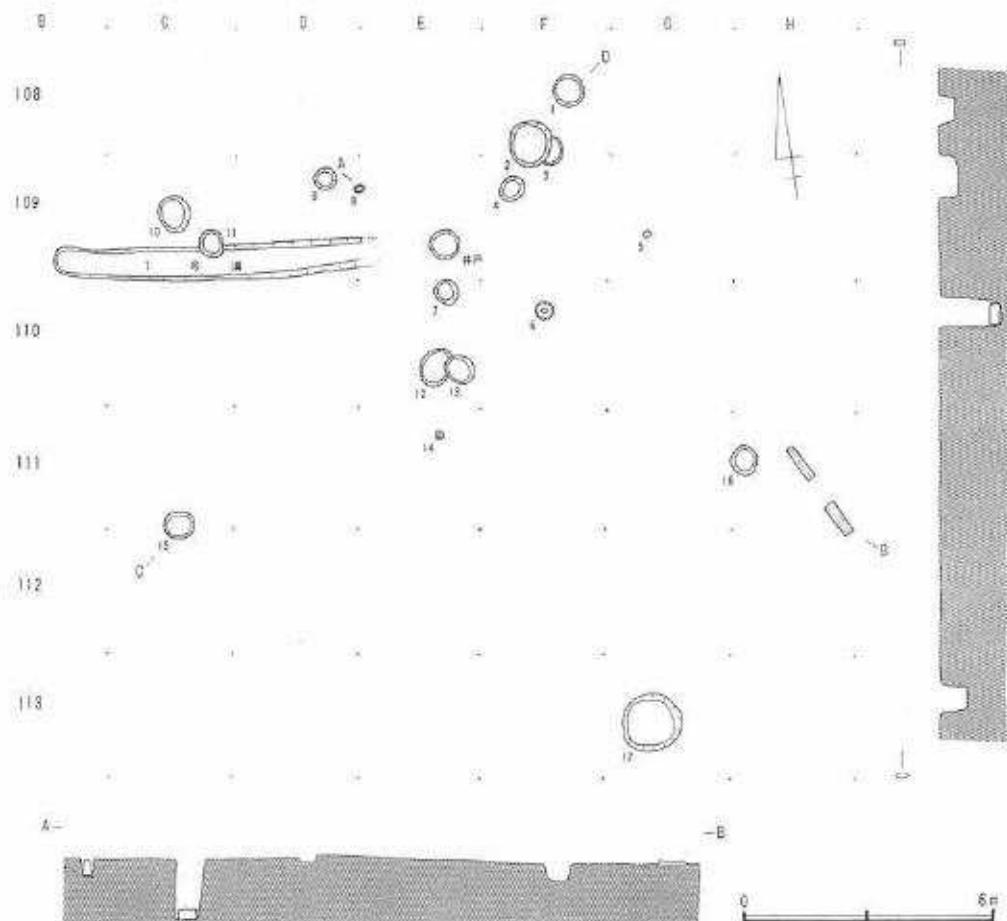


第16図 5・6号溝出土遺物（土師質土器・下駄・戲画石）

2. B 地域の遺構と遺物

B 地域で確認された遺構は17個のピットと1基の井戸、それに2本の溝である。

ピット群（第17図、図版第22図・図版第23図） ピットは現地表面下15~20cmで検出されたが、分布状況から建物跡としてはまとまらない。第2層からほぼ垂直に掘り込まれ、形態は梢円形を呈するものが主で、大きさは60ないし80cmを測るものが多い。また、P₈・P₁₄のように円形を呈するもの、P₁₁・P₁₅のように方形のもの、P₈のように2段になっているものもある。深度は一定しておらず、大略、30~60cm以内に納まるものが多い。ピットの充満土は木炭片を含んだ灰黒色粘土で、底面には厚さ2~3cm弱の植物質の腐蝕層が薄くみられた。P₁・P₇・P₁₀・P₁₅・P₁₆の内部からは2~3片の土師器・青磁・珠洲系土器片が出土した。またP₈では底面に厚さ4cmの安山岩質の根石が2枚並行に並べられ、その上に不規則な多面体の柱根が残存していた（第5図109E断面）。



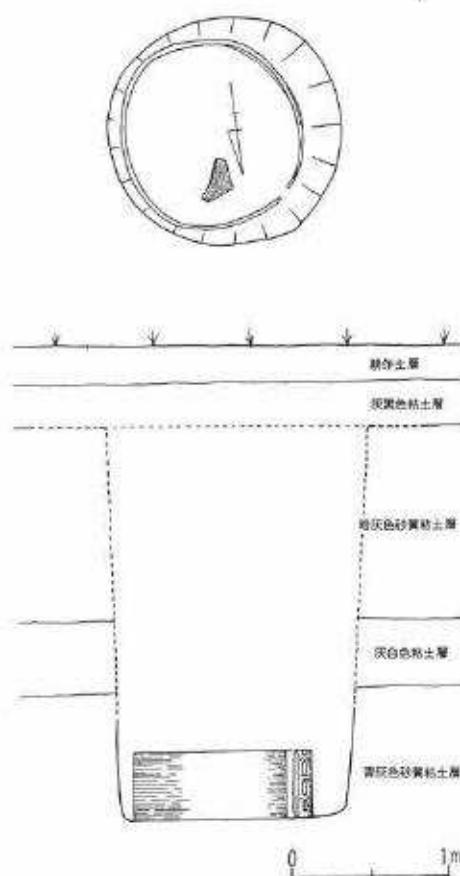
第17図 B 地域 遺構 実測図

出土遺物(図版第30図15~21) 15はP₁出土の珠洲系土器の壺形土器片で、外面には平行条線叩目が羽状に施されている。内面には成形の際の横ナデ痕が見られる。黒褐色を呈し、胎土には砂礫粒を含み、焼成は堅緻である。16・17はP₇、18・19はP₁₀、20はP₁₅、21はP₁₆出土の土師器片である。細片のため器形は明らかではないが、おそらく壺形土器であろう。器面は摩滅して円滑になり、整形痕などは全く見られない。いずれも黄褐色ないし赤褐色を呈し、胎土に細砂礫紋が混入され、焼成は堅緻である。

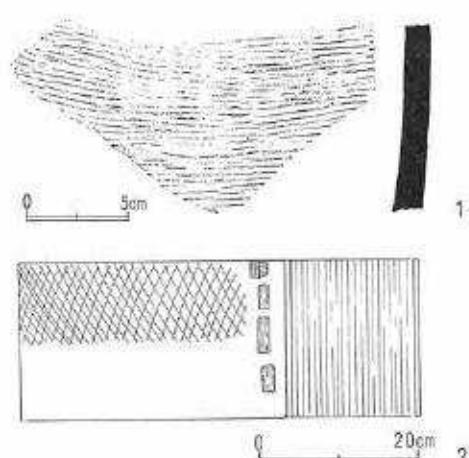
井戸(第18図、図版第24図) 井戸は第3層の暗灰色砂質粘土層からほぼ垂直に掘り込み、5層の青灰色砂質粘土層に底面を有し、曲物を井戸枠として埋置したものである。口径は約1.60mを測る円形で、深さは2.40mを測り底面は平坦となっている。井戸枠は直径50cm、高さ20cm、厚さ0.9cmを測り、やや北東部に偏して最下段しか検出されなかった。井戸内部の充満土は上面から井戸枠上部まで黒灰色の灰及び木炭片が暗灰黑色粘土に混入されて底部に達する。底部では約20cmの厚さで、多量のワラの炭化物・小枝・樹皮類が埋積していた。内部底面からは、珠洲系土器(甕)の肩部片が1点出土した。なお、曲物を井戸枠として何重にも積み重ねたものか、曲物上に桶状の枠をかぶせたものかいずれかであろうが、それを積極的に示す資料は一片も検出されなかった。

出土遺物(第19図1・2、図版第30図25・26)

1は珠洲系土器(甕)の胴部片である。器面には平行叩目が羽状気味に、内面には押圧痕の上に横走するカキ目が鋭く施されている。胎土には砂礫紋を含み、黒褐色を呈し、焼成は堅緻である。2は曲物側板を井戸枠として利



第18図 井戸実測図



第19図 井戸枠・井戸出土遺物

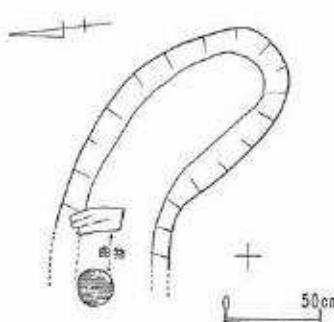
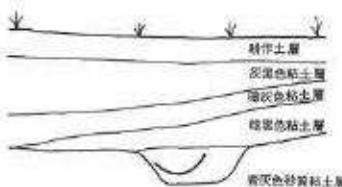
用したもので、外径56cm、内径54.2cm、厚さ0.9cm、高さ20cmを測る。曲物側板は幅1.2cmの桜皮で縦列にとじられ、重なりあう部分の端部は幅1.8~2.3cmの範囲でうすく削っている。内面には板を折り曲げる際、容易にするための刻線が幅1.0~1.2cm間隔で縦方向に全面入っている。また、外面の上半約9~10cmの範囲には幅1.3~1.5cm、約35度の傾斜で格子状に刻線が入れられている。なお、とじ孔・木取の痕跡は見られない。

1号溝（第17図、図版第23図上）

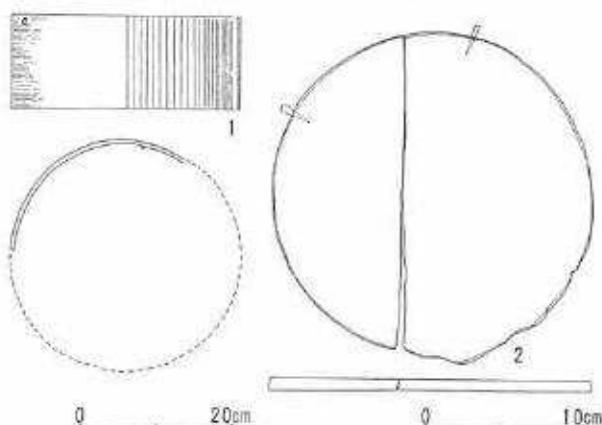
ピット群と同一レベルで確認されたものである。確認現長7.4m、幅75~90cm、深さ23~25cmを測る溝で東西に走っている。第3層の暗灰色砂質粘土層から掘り込み、断面は緩やかな「U」字状を呈し、底面は平坦である。充溝土は炭化物を含む暗灰色粘土で、内部からは器面が著しく摩滅した土器片が3点（図版第30図22~24）出土した。

2号溝（第20図、図版第25図） 地表面下60cmの暗灰色砂質粘土を切って構築されたもので、第1号溝の底面との差は約25cmを測る。東西方向に走るものと考えられるが、西端は南に屈曲して丸味をおびて立ち上っている。確認現長1.4m、幅60cm、深さ20cmを測り、断面は第1号溝とは異なりレンズ状を呈している。充溝土は灰黑色粘土で、溝底部からは曲物側板と蓋ないしは底板と考えられる円板が1枚出土した。

出土遺物（第21図1・2、図版第30図27・28） 1は曲物側板片で推定直径約29.5cm、厚さ0.25cm、高さ12.5cmを測り、径3.5mmのとじ孔が1個みられる。内面には幅約0.8mm間隔で縦位に刻線が入れられている。2は直径20.5cm、厚さ0.8cmを測る正円形の板で、周側面には2本の木釘が残存している。木釘は現長2.1cmを測り、上端断面は丸くなっている。（戸根与八郎）



第20図 2号溝実測図



第21図 2号溝出土遺物（曲物）

IV 遺物

本遺跡の発掘調査で出土した遺物は土師器・須恵器・舶載磁器・陶質土器・土師質土器などの土器類と錢貨、金属製品・土製品・石製品である。土器類の大半は破片となって単発に出土し、器形全体を知ることのできるものは極めて少ない。遺物の出土量は平箱で約9箱で、その主体は中世陶質土器である。土器類の記述にあたっては土器を時期別に大別し、器形で細分することとした。なお、器形の推定が困難な胴部片は一括し、その断面は垂直にした。

1. 土師器（第22図～第23図、図版第31図～図版第32図）

土師器の大半は口縁部形態で示さなければならなかったように細片が多く、器形全体を推定し得るものはほとんどない。器形から広口盤形土器・蓋形土器・高杯形土器・器台形土器・壺形土器・甕形土器などに分けられる。胎土には細砂や粗砂が混入され橙褐色から黒褐色まで種々である。器面は長年に亘って水に漬っていたためか非常に荒れており、器面整形など不明なものが大部分を占めている。

広口盤形土器（第22図1・2、図版第31図1・2）1は口縁部が緩やかに外反し、底部が丸底になるものである。口縁部の器内は厚く、内面の頸部屈曲部には稜線を有している。口縁部から頸部にかけては横ナデ調整が、体部には刷毛目が斜位に浅く施されている。2は1に比して口縁が「ク」の字状に強く外向する小形の手捏土器で、頸部屈曲部の内外面に稜線を有している。口縁部が横ナデ、体部は籠状工具で研摩整形されている。

蓋形土器（第22図3、図版第31図22）笠形を呈す蓋形土器のつまみで、径3.5cmを測る。頂部が若干上方に盛り上り、つまみと体部の接合部で強くくびれ、籠で調整されている。

高杯形土器（第22図4～6、13、図版第31図3～5、12）4～6は杯部で4は口縁部が内彎気味に立ち上る杯状のものである。5・6は杯部下半に稜線を有するもので、口縁部が大きく外反する杯部片である。5・6には化粧粘土が塗られ、籠で研摩整形されている。13は脚部で外面は化粧粘土を塗った後に、籠で縦位に研摩整形され、内面には刷毛目痕が残っている。脚部には円形の孔が4孔穿たれている。13の胎土には細砂が混入され暗褐色を呈し、焼成は堅緻である。

器台形土器（第22図7～13、図版第31図6～12）7～10は脚部から器受部への屈曲が比較的急で、脚部の開きが少ないものである。9には円形の孔が3孔穿たれている。11～12は脚部から器受部への屈曲が緩やかで、脚部が直線的に開くものと考えられる。

なお、14・15は脚部の裾であるが高杯形土器のものか器台形土器のものか不明である。

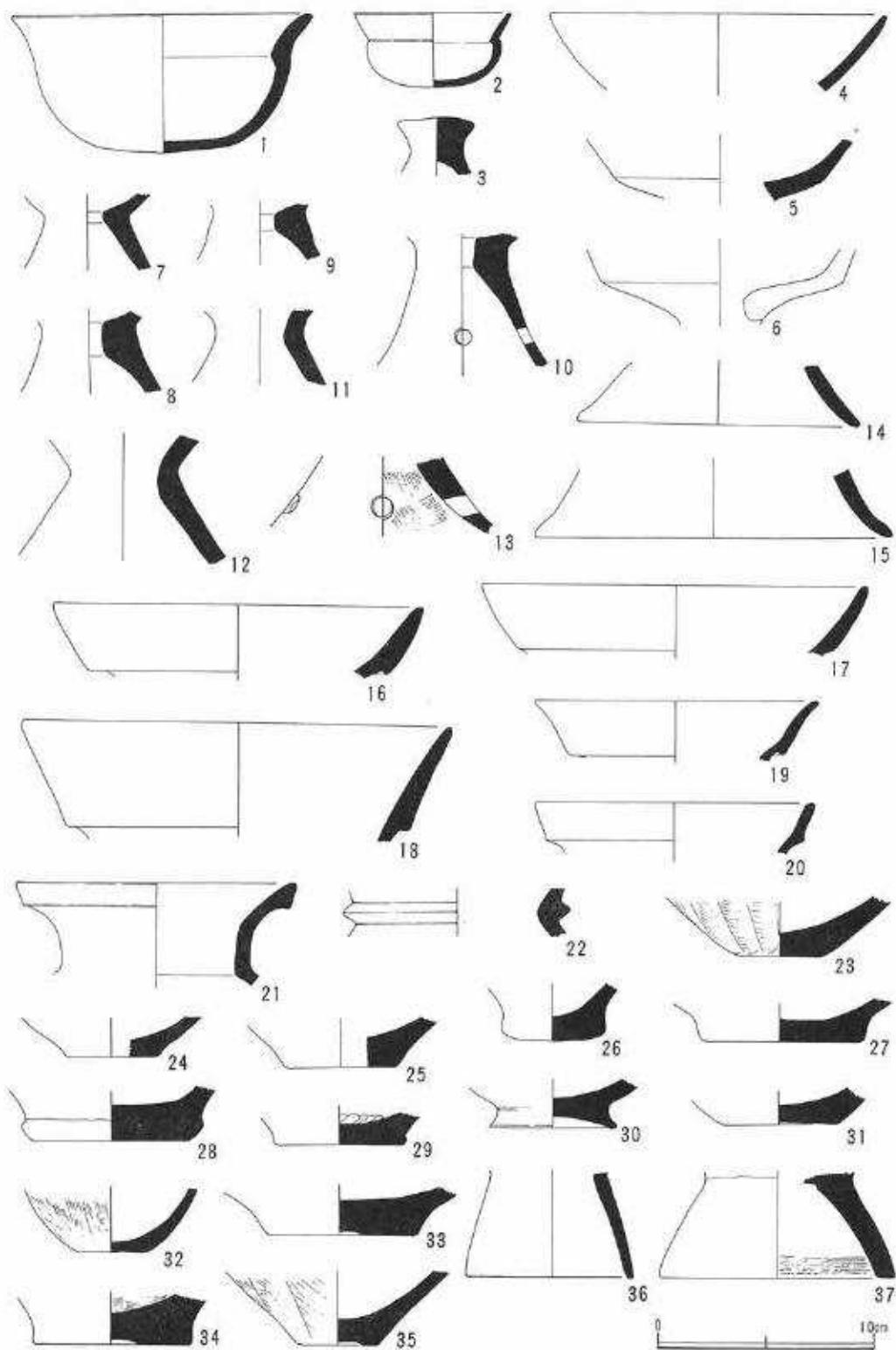
壺形土器（第22図16～22、図版第31図15～21）複合口縁を有する一群で、16・17は口縁部が内彎気味に立ち上るものである。胎土には細砂が混入され暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。器面に

は化粧粘土が塗られ、籠で整形されている。18は幅の広い口縁部を持ち、口縁が大きくラップ状に開いて外反する大形土器である。頸部との境には顕著な折り返しの段を有し、口縁部の内外面ともに横ナデで整形されている。胎土に粗砂を含み暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。19・20は比較的口径の小さい土器で、19は口縁部下辺が肥厚して複合口縁状にしたものである。20は緩やかに外反した口縁部外面の一部が肥厚して稜線を形成し、一定幅の口縁外周帶を作り出したもので、内外面に丹が塗られている。胎土には精選された粘土が用いられ、暗褐色を呈し焼成は堅緻である。21は頸部が直立し口縁部が外反するもので、口唇部に粘土を貼りつけて複合口縁状にしたものである。頸部と胴部を別に作って接合したもので、比較的肩の張る土器と考えられる。胎土には細砂が混入され、暗褐色を呈し焼成は堅緻である。22は頸部に凸帯がめぐるものである。胎土に粗砂を含み橙褐色を呈し、焼成は軟質である。

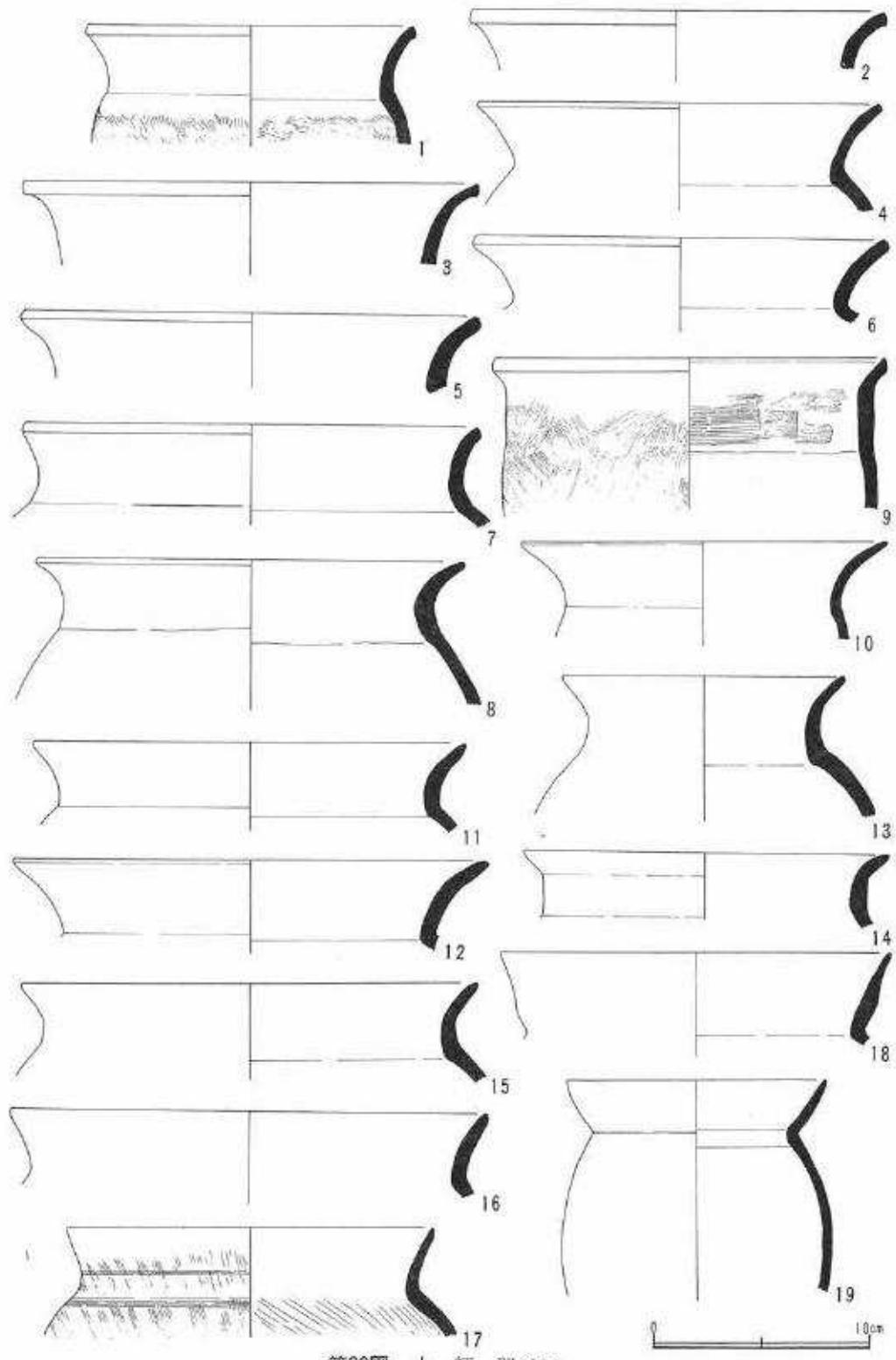
瓔形土器（第23図1～19、図版第32図1～19）口縁部の形態から外削ぎ状を呈するものと単純口縁を呈するものとに分けられ、前者をA類、後者をB類とする。

A類（第23図1～9、図版第32図1～9）1・2は口縁部が緩やかに外反するもので、口唇部が外削ぎとなり折り返しの段を外面に有している。1の頸部の屈曲は緩やかで屈曲部の内外面に稜を有し、口縁部には横ナデが、胴部の内外面には斜位の刷毛目が施されている。3は折り返しの段を有し、内面口唇端に稜を有す土器で口縁部の反りは2と大差がない。4～8は頸部が「く」の字状に屈曲するもので、口唇部が外削ぎとなり折り返しの段や内面に稜を有さない一群である。7の口縁部は緩やかに外反し、断面はB類の13に近似し胴部・頸部・口縁部が別々に作られたものである。9は長胴の瓔形土器で口唇部内面に稜を有している。口縁部は横ナデが、胴部内外面には刷毛目が施されている。胎土に細砂が混入され暗褐色を呈している。

B類（第23図10～19、図版第32図10～19）10は口縁部が外反して開き、最大径を口縁に有するものと考えられる。全体的に器内は薄く仕上げられている。11～13は頸部から口縁部が直立気味に立ち上り、次第に外反する一群である。13の断面を見ると頸部では器肉が厚く、口唇部に向って厚さを減じて行く傾向がある。3点ともに内面に稜を有している。14～15は頸部が垂直に立ち上り、段を有して口縁部が外方へ屈曲するものである。16は頸部が「く」の字状に折れ、口縁部が短かく直線的に外反するものである。17は肩の張った胴部に直立した口縁が付されたもので、胴部の内外面は刷毛目で整形されているが、外面は刷毛目整形後に横ナデ調整されている。18は頸部が「く」の字状に折れ口縁が外向するもので、口唇は薄く尖っている。19は口縁部が内輪気味に立ち上る小形の長胴甕である。頸部はしまり、緩やかな曲線を描いて胴部に至るものである。口縁部から頸部にかけては横ナデ整形痕がかすかに見られ、内面には稜線を有している。胎土には細砂・粗砂が混入され、焼成は18を除いて一般的に堅緻である。



第22図 土師器(広口盤・蓋・高环・器台・壺・底部)



第23図 土師器(窯)

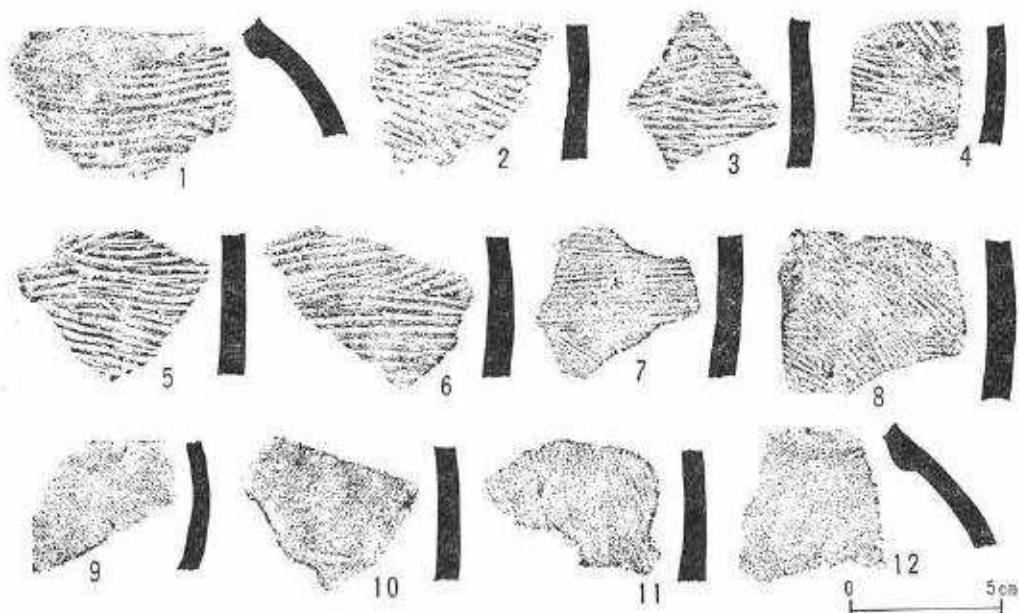
胸部・底部（第22図23～37・第24図、図版第31図23～33、図版第32図20～33）

胸部（第24図1～12、図版第32図20～33） 壺もしくは壺形土器の破片で、外面には刷毛目ないし櫛目状の整形痕が施されている。内面には刷毛目ないし櫛目状の整形痕が施されたもの（6・7・8・10）、横ナデのもの（1・2・3・10）、横ナデと縦位の箝削が見られるもの（4・5・9）がある。9・10は底部に近い破片で、器面にはススが付着している。

底部（第22図23～37、図版第31図23～33） 底部は平底、掲底、それに台付壺形土器の台部片に大別されるが、丹を塗ったものは一点もない。23～29は平底の一群である。底部から直線的に胸部下半へ立ち上るもの（23）、胸部からの曲線が底部近くでわずかに反転して、いわゆる腰高の形態をとるもの（27）、底部の部分が著しく外へ張り出すもの（28）などがある。底部近くまで窓で研摩整形されたものが多い。23は箝削で底部を作り出したものである。29の内面にはしづり痕が見られる。30～32は掲底の一群である。33～35は底面に指頭で突いた様な凹を有する一群で掲底風を呈している。35は23と同じように箝削で荒く作り出されている。23・24・25・35にはススが付着している。胸部片・底部片ともに胎土に細砂・粗砂が混入され、焼成は一般的に堅緻であり、色調は暗褐色・黄褐色・黒褐色などを呈している。

36・37は台付壺形土器の台部片で、37の台端部は窓で水平に削られている。外面には斜位の刷毛目が部分的に、内面には縦位の刷毛目が施されている。なお、36は器面が荒れているため、器面整形具などについては一切不明である。

（戸根与八郎）



第24図 土 爾 器（胸部片）

2. 須恵器（第25図、図版第33図）

本遺跡で出土した須恵器の総数は12片を数え、全体の形態を観えるものは1点もない。器形から壺形土器、壺形土器（短頸壺・横瓶）、甕形土器の3種に大別さるが、全体量も少なくセットとしては把握されない。土器の記述は写真図版を中心に進めることとする。

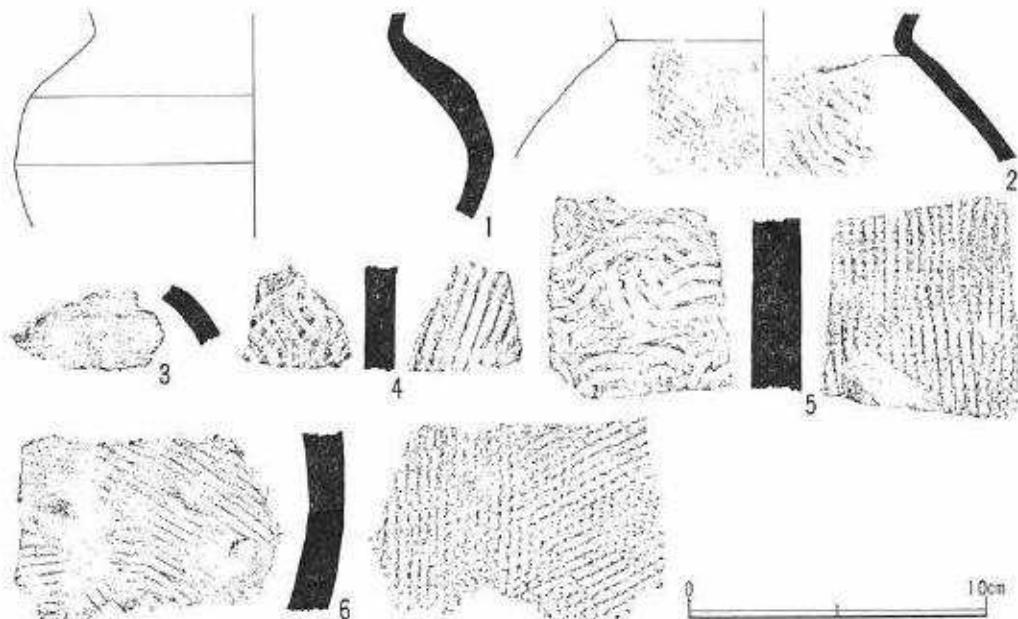
壺形土器（図版第33図1～3）1・2は口縁部片、3は体部から底部にかける破片である。壺の底部はヘラによって切離され、2次的な成形はなされていない。

壺形土器（図版第33図4～7、第25図1～3）4は頸部から胴上半にかけるもので、口縁が短かく直立する短頸壺であろう。胴上半はヘラで削られて成形され、器面には焼脹れが見られる。5・6は肩部から胴部にかける破片で、外面には自然釉がみられる。

7は横瓶の口縁から胴部にかけるもので、口縁と胴部が別に作られて接合されたものである。外面には斜格子の叩目が、内面には同心円叩目が施されている。胎土には細砂礫粒を含み、淡青灰色を呈し、焼成はやや軟質である。

甕形土器（図版第33図8～12、第25図4～6）8～12は胴部片で無文の11を除いて外面には木目状平行叩目文、格子目状叩目文等が施されている。内面には同心円状の叩目が施され、8～10の場合も6と同じように数段重なり、いわゆる青海波状を呈している。12には太目の木目状平行叩目文が施され、成形の際の叩目が顕著に見られる（第25図6）。各片の色調は青灰色ないし灰白色を呈し、胎土に砂礫粒を含み、焼成は堅緻である。

（戸根与八郎）



第25図 須 恵 器（壺・甕）

3. 中世陶磁器

本遺跡で出土した中世陶磁器は約800片を数え、舶載青磁と陶質土器に大別される。このうち陶質土器は古瀬戸の他、石川県の能登半島北端で生産された珠洲焼に胎土、焼成、器形が極めて近似しているものと、胎土に石英粒を含み、色調が白灰色ないし茶褐色を呈し常滑焼に類似した一群がある。北陸地方にあっては、常滑焼に類似した製品を焼いた越前古窯・加賀古窯・権兵衛沢窯跡・狼沢窯跡などがある。このため本遺跡でもこれら各地の製品が混在している可能性もある。また、珠洲焼に類似した一群の土器も今後の在地窯の調査、研究によって分離される可能性もある。しかしながら、現段階において個々の判別はむずかしいため、ここでは珠洲焼の系統を引くものを「珠洲系土器」、常滑焼の系統を引くものを「常滑系土器」という名称を用いて一括記述することにした。

舶載磁器（第26図1～4・7、図版第34図1～25） 青磁と認められる破片は約40片出土しているが、その大部分が細片であって器形全体を知ることのできる資料は一点もない。出土状態は極めて散漫で、接着することのできた資料は一点だけである。さらに器形・色調・胎土などを比較してみると、これらの内に同一個体と認められるものがほとんどないことも一つの特徴である。器形から分類すると最も多いのは碗形土器と考えられ、出土量の約半数を占めている。図版第34図1～16が碗形土器であり、このうち1～3は第26図3の器形を示し、色調は黄緑色を呈している。この他にわずかに緑色を残し灰色に近い色調で貫入のあるものが1点ある。4～16は第26図1・2に類するものである。色調は黄緑色のものが多いが、10のように緑褐色ないし褐色で、ガラス質の厚いものも含まれている。

図版第34図18～21は浅鉢形土器と考えられる。18は体部が直線的に立ち上り、口縁がやや肥厚する。内面には文様が施されているが明確ではない。19～21は体部がやや内彎ぎみに立ち上り、口縁が外反する。20の口縁は先端が最も厚く垂平に削がれている。内面には幅1cmほどの範囲で放射状の文様が刻まれている。22は瓶形土器の口頸部であろう。23・24は碗形土器の底部で、23には貫入が見られる。18以下の色は何れも黄緑色である。他に淡青色の蓋形土器の破片と思われる破片が1点あるが、判然としない。

このように、本遺跡出土の青磁には粉青色のいわゆる砧青磁ではなく、竈泉窯の製品としても時代が新しくなり、元・明代ころのものであろう。

第26図7は青白磁と考えられ、底径4.5cmを測る削り高台片である。素地には細砂粒が混入され、暗褐色を呈している。高台内面および裏付を除いた内外面には青白色の釉薬が施されている。見込みの中央部には「大」の字が押印され、それをとり囲むように緩やかな曲線で見込みを車輪状に5区分している。いわゆる梅花状に文様を施したものである。胎土・色調などから俗に下手影青と称するもので、青磁と同時代頃のものと考えられる。

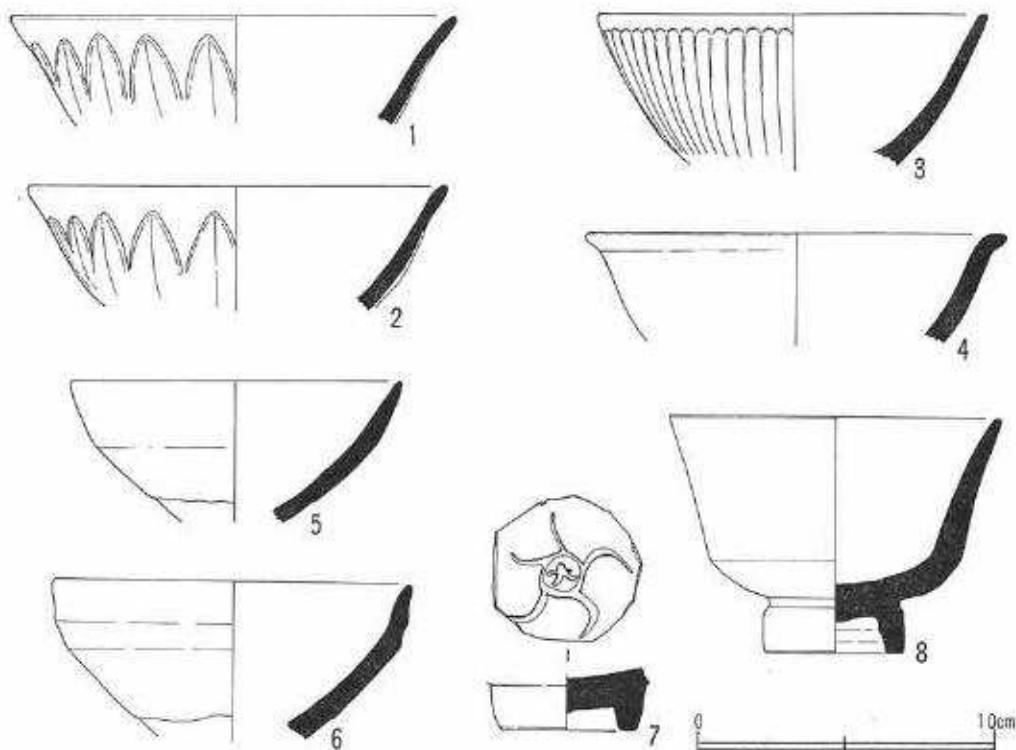
古瀬戸（第26図5・6、図版第34図27・28）古瀬戸片は総計5片出土し、器形を推定し得たものは碗形土器2点のみである。天目茶碗と呼ばれているもので、茶褐色の鉄釉が施され、素地には石英の微砂粒が混入され、灰白色ないし暗灰色を呈している。

5は口径11cmを測り、口縁部が内巻き味に立ち上るものである。釉調は口唇部が茶褐色を呈しているのに対して、体部へ行くに従って茶褐色と黒色が混じり合い黒色が強くなる。

6は口径16cmを測り、口辺部に稜を有し口縁部が直立氣味に立ち上るものである。釉調は5と同一であるが、内面の口唇部からは黒色の釉が懸垂状にたれ、釉溜が見られる。

この他に第26図8に示した茶碗が1点出土している。8は口径13cm、器高7.9cm、底径4.8cmを測る茶碗である。体部はゆるやかに外反し、口縁部は薄く作り出されている。高台脇から腰にかけては削り成形され、腰部に稜を有している。高台は削り出し高台で、兜巾が顕著に見られ、いわゆる三ヶ月高台を呈している。体部と高台が接する部分は棒状工具で強く凹線を1条めぐらすことによって付高台的な効果を表わしたものと考えられる。素地には細砂粒が混入され、暗灰色を呈している。高台内面および疊付を除いた内外面には半光沢の灰白色の釉薬が施され、体部には貫入が見られる。

（戸根与八郎）



第26図 中世陶磁器（青磁・天目）

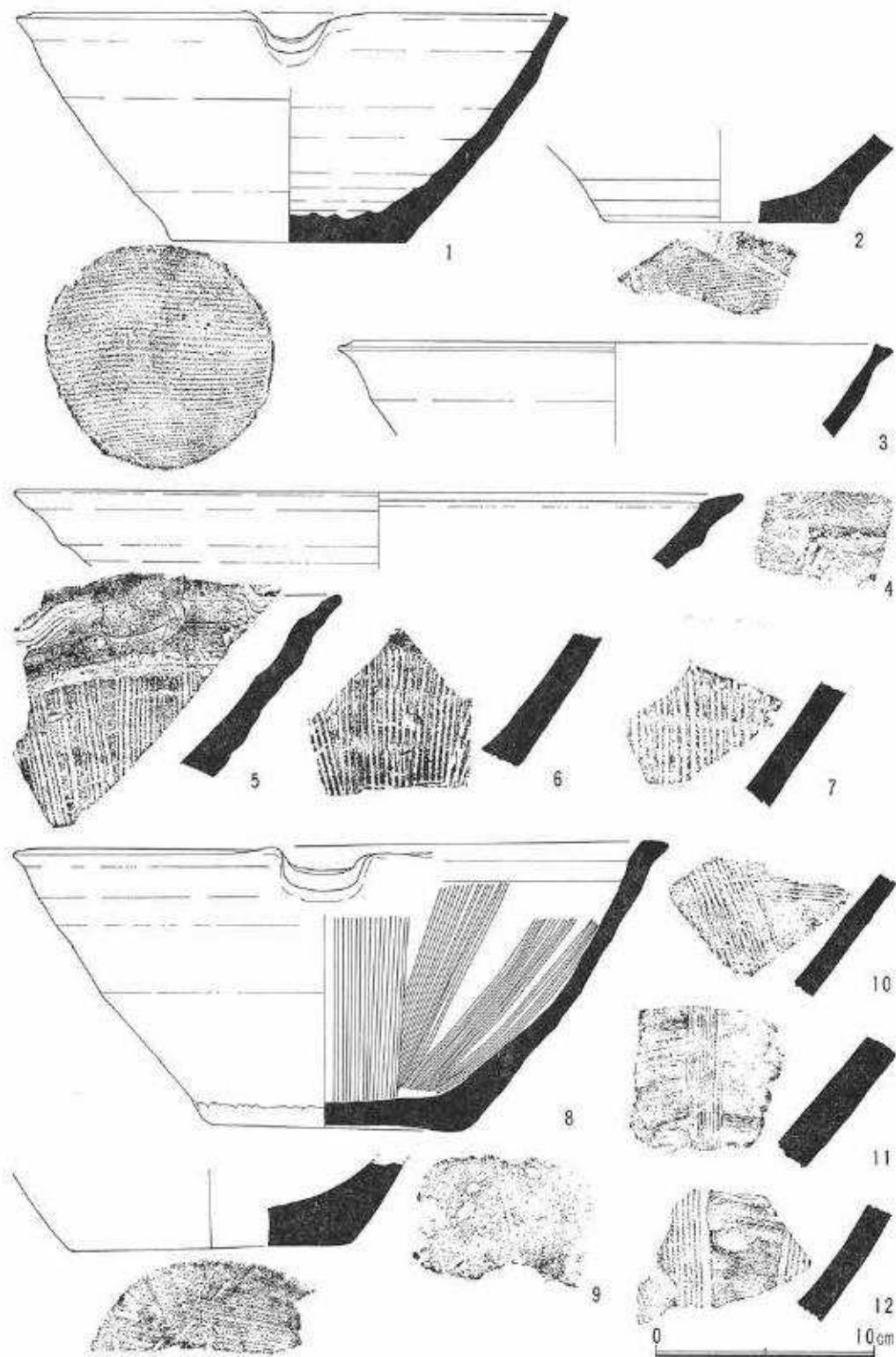
株洲系土器（第27図～第29図1～15、図版第35図・図版第36図1～19） 本遺跡から出土した株洲系土器は鉢形土器・擂鉢形土器・壺形土器・甕形土器の4種で、総数は約120片を数える。色調は黒褐色を呈し、胎土に砂礫粒を含み、焼成堅緻のものが多い。

鉢形土器（第27図1～3、図版第35図1） 1は口径25.4cm、底径10.6cm、器高10.4cmを測る片口の鉢で、第28図3の大甕の上に第27図8の擂鉢と共に押しつぶされた状態で水田面下約30cmの深さから出土した（図版第26図下）。さらに周辺部からは曲物の側板と蓋ないしは底板が出土している。口縁部は口唇中央部が若干凹み、外削ぎ状を呈し、平底の底部からやや内彎ぎみに立ち上っている。成形はロクロ成形で、外面に横ナデ整形痕が見られ、底部は静止糸切で切離されている。片口は口縁部を外方へ折りまげて作り出している。色調は黒味をおびた灰色を呈している。2は底面に静止糸切痕が見られ、底面周端部は箇で再調整されて静止糸切痕を摩消している。3は1と同様に口唇部が外削ぎ状を呈し、口縁部直下の器肉は薄い。

擂鉢形土器（第27図4～12、図版第35図2～14） 擂鉢形土器は口唇部内面に横描波状文が施され、内面の擂目単位間隔が密なものと口唇部内面に横描波状文がなく、内面の擂目単位間隔が疎で空白部を有するものとがあり、前者をA類、後者をB類とする。

A類（第27図4～7、図版第35図2～6） 内削ぎ状の口唇部内面に横描波状文が施され、擂目の単位間隔が密で底部から口縁に向って搔き上げた一群である。4は口径約33.4cmを測り、口唇部内面には9条を1単位とした横描波状文が施されている。5は焼成時の歪みが著しいもので、口縁部を外方へ折りまげて片口としている。口唇部内面の波状文は6条を1単位としている。また、擂目は幅2.3cmで9条を1単位として密に施されている。6の内面には幅3.2cmで11条の擂目が見られる。7および図版第35図5・6は単位幅不明の擂目が内面全体に施されている。

B類（第27図8～12、図版第35図7～14） 体部内面に施された擂目の単位間隔がA類に比して疎であり、口唇内面に横描波状文が施されていない一群である。8は焼成時の歪みが著しく、口縁は長径34cm、短径30cmの梢円形を呈し、最大高13.1cm、最低高12.6cm、底径11.5cmを測る片口の擂鉢形土器である。底部は揚底風で、体部はやや内彎ぎみに立ち上って口縁部へ続き、口縁部は平口縁を呈している。底面は箇で再調整されて切離痕を消している。成形はロクロ成形で、外面に横ナデ痕がみられ、口縁部を外方へ折りまげて片口をつくり出している。内面の擂目はロクロ成形後に施され、幅3.2cmの中に17条の擂目を1単位として、左から右へ、16単位の擂目を底部から搔き上げている。底部内面には体部と同一軌跡の擂目の他に、底部内面独自の擂目が数方向から施されているが、「米」の字状には施されていない。9の底面周端部には再調整のナデが加えられて摩消した静止糸切痕がみられる。内面には3条の擂目が断続的に施されている。胎土には1～2mmの大粒の砂礫が混入されている。11・12は8と同様に擂目の単位間隔が疎で整然と施されている。11の単位は幅1.6cmで13条、12は幅2.1cmで9条の擂目が施されている。なお、10は幅3cmで13条の擂目を1単位として、体部内面に一般的な縱方向の擂



第27圖 中世陶質土器(殊淵系土器)

の他に、横方向からも施されている。本土器が椎鉢形土器A・B類いずれのグループに入るかについては疑問があるが、内面に空白部があり、描目も整然として施されていることからB類の範疇に含めた。10~12の胎土はきめの粗い粘土を用いている。

壺形土器（第28図1） 明らかに壺形土器と判断されるものは図示した1点である。頸部は直立して、口縁が外方に折りまげられて縁帶をつくり出している。口径は約20.5cmを測り、内外面に横ナデ整形痕がみられる。色調は青灰色を呈している。

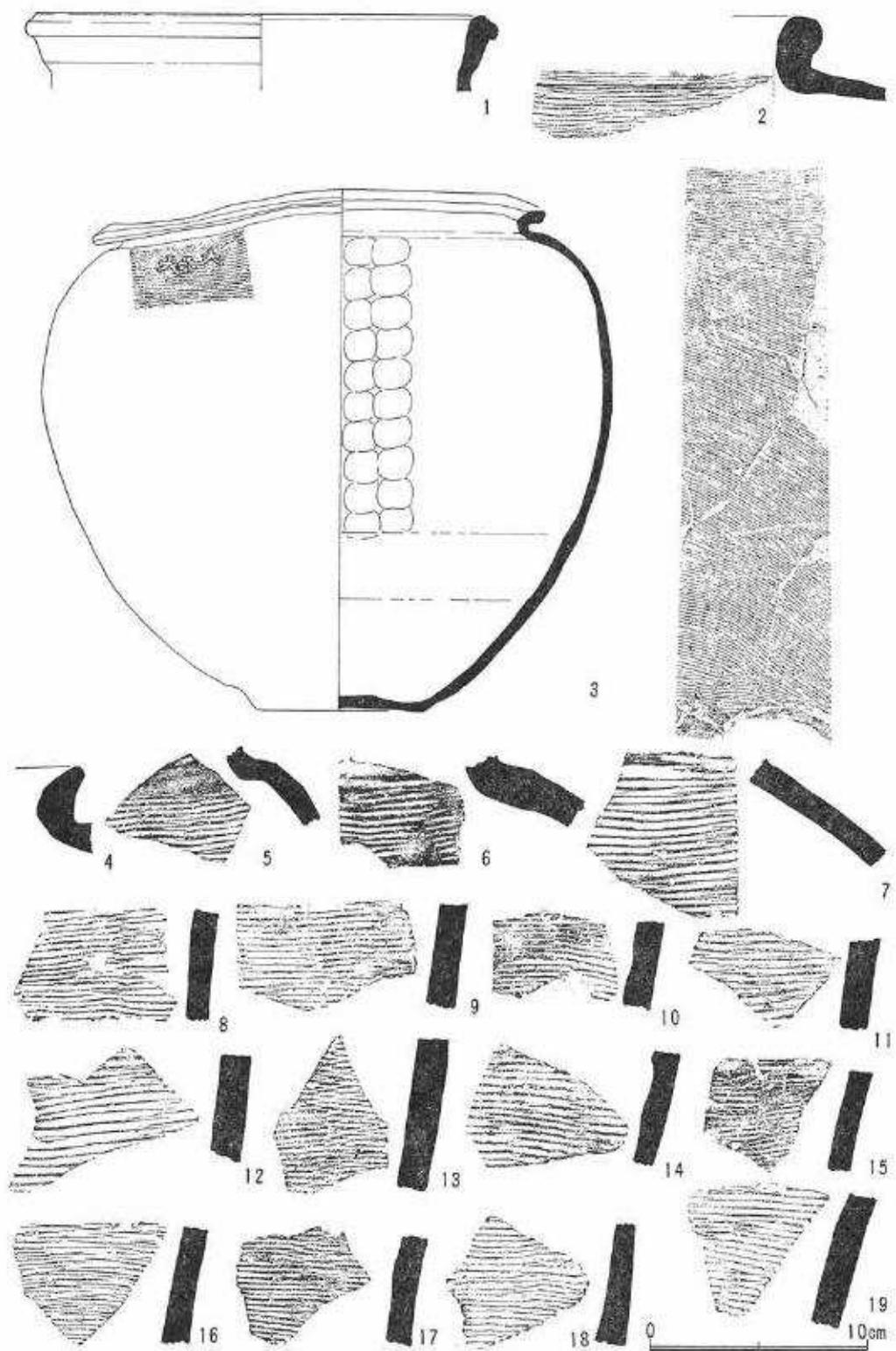
壺形土器（第28図2~4、図版第35図15~19） 壺形土器は口縁部の断面形態によって玉縁状のもの、「コ」の字状のもの、内削ぎ状を呈するものの3種類に分類されるが、全体量が少ないため一括して取扱うことにした。

2は頸部が直立して口縁部が玉縁状を呈し、肩が張る器形になると思われる。肩部には条線状の叩目が平行に施されている。4は直立する口縁部で、内面が削がれて内削ぎ状を呈している。3は焼成時の歪みが著しく現われており、口縁は長径47.5cm、短径42cmの梢円形を呈し、最大高49.4cm、最低高42cmで7cm強の器高差がある。底部は著しく歪みが現われ、揚底を呈している。口頸部は口縁を強く外方に折りまげて断面が「コ」の字状となり、肩部から胴部にいたる曲線はゆるやかで、胴上半部で最大径52.4cmを測る。胴部の成形は輪投手法であり、条線状の叩き板を使って器面を叩きしめている。叩目は1cm幅の中に4条が入る条線状叩目で、肩部は平行に施し、胴上半から底部に降るにつれて右下りになっている。内面のおさえには丸い工具を使用している。また、肩部には「大」の文字が2個ヘラで描かれ、その間には8弁の菊花文が押印されている。この土器は押しつぶされた状態で出土し（図版第26図下）、破片の割れ口には膠が付着し、特に底部から胴下半部に多くみられた。これは使用時に割れた大甕を膠で補修して再利用したものと考えられる。色調は黒褐色を呈し、肩部外面と胴部内面には白い斑点が浮出している。

叩目を有する胴部片（第28図5~19・第29図1~15、図版第35図20・21・図版第36図1~19）

壺形あるいは壺形土器の胴部片に叩目が施されているが、胴部片だけのため器形の判定が困難であり、一括して取扱うこととした。叩目は条線状のものが、器面に対して浅く施されたものが多く、叩目の方向により次の3種類に分類した。

A類（第28図5~19・第29図1~2、図版第35図20・21・図版第36図1~7） 本遺跡から出土した叩目を有する土器の多くはA類としてまとめた平行の条線状叩目である。第28図5~7は肩部で第28図3と同じようにナデ肩になると考えられる。5は1cm幅の中に4条の叩目が、6・7は1cm幅の中に3条の叩目が入る。1cm幅中に3条の条線状叩目が入るもののが最も多く6・7・9~12・14・19・第29図1・2がこれに含まれる。4条の叩目が入るのは8・13・15・17・18である。第28図16は1cm幅の中に4~5条入り、叩目の密度は高い。8・10・14・17~19の内面にはおさえの凹みが明瞭に観察される。



第28図 中世陶質土器(珠洲系土器)

B類（第29図3～12、図版第36図8～18）B類は右下りの条線状叩目が施された一群で、7～9には1cm幅で3条の叩目が施され、他は1cm幅の中に4条の叩目が施されている。3～6の叩目の傾斜がゆるいのに対して、7～11の叩目は45度前後の傾斜を持っている。12は右下りの叩目が角度をかえて施されている。11は輪積みの継ぎ目が外面にみられ、上部の粘土が下部の粘土を覆っている。3・4・7～11は内面におさえの凹みがみられ、4の断面が薄い箇所は輪積みの接合箇所と思われる。このA類とB類は第28図3の叩目の観察では肩部から胴上半部にかけては平行に、それ以下から底部までは叩目の傾斜角度が急になるところから、A類は口縁部に近い破片と思われ、B類の8～12は底部に近い破片と考えられる。このようにA類とB類の差異は叩目が施された部所の違いと思われる。

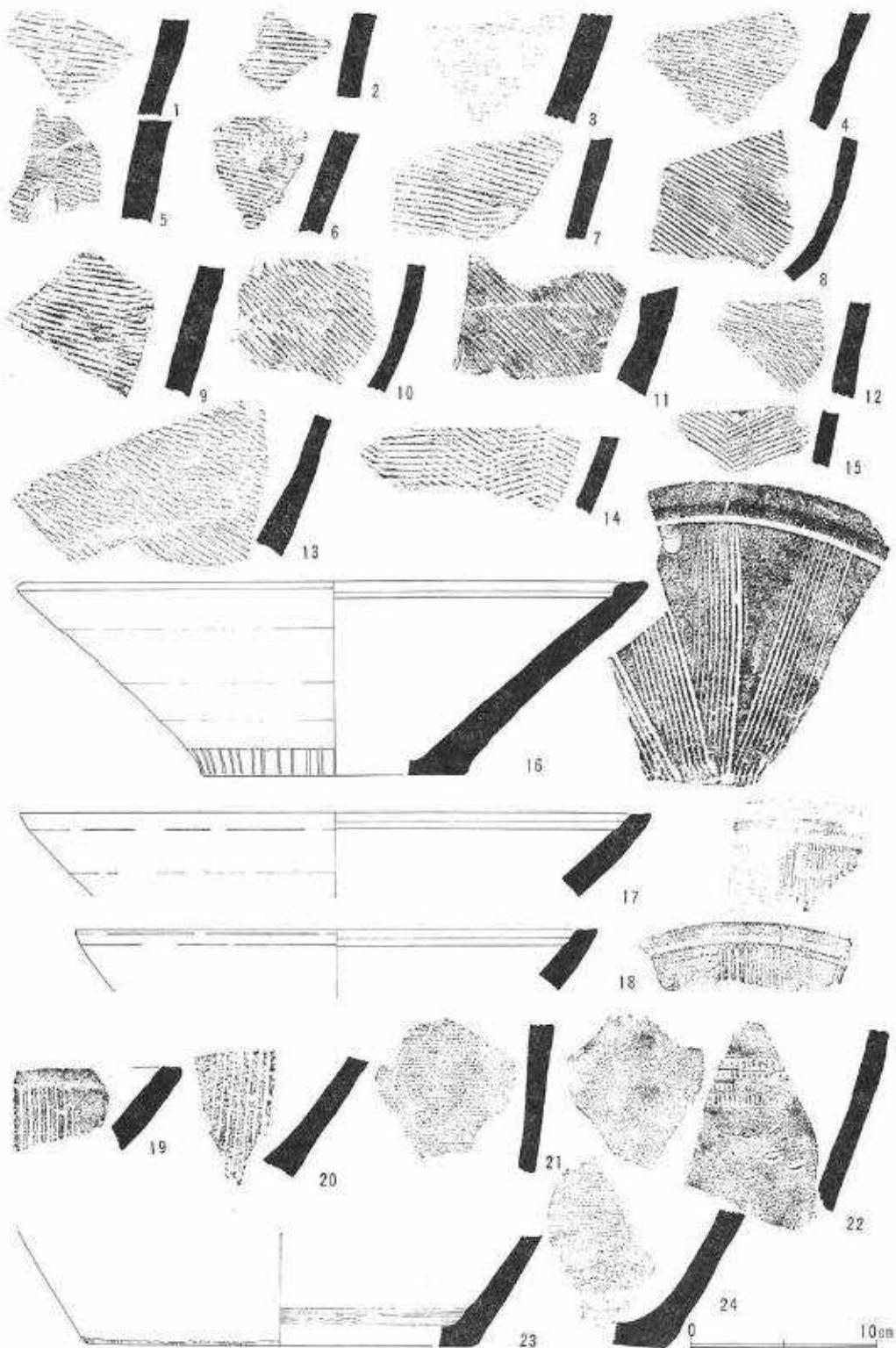
C類（第29図13～15、図版第36図19）叩目が羽状を呈するもので、1cm幅の中に3条の叩目が施されている。13・14は内面におさえの凹痕がみられる。13の外面には羽状の叩目の下に右下りの叩目がみられ、胴部下半に近い破片と考えられる。

常滑系土器（第29図16～24、図版第36図20～26）本遺跡から出土した常滑系土器は総数約20片を数え、擂鉢形土器と變形土器の2器形がある。胎土には石英粒を含み、きめが細かく、白灰色あるいは茶褐色を呈するものが多い。

擂鉢形土器（第29図16～20、図版第36図20～25）口唇中央部がくぼむ平口縁で、底部から直斜状に体部が開き、内外面にはクロ成形による横ナデ痕がみられる。内面の口縁直下には1条の沈線がめぐり、擂目は底部から口縁に向って搔き上げられている。擂目は深く施され、横断面は「U」字状を呈しており、断面が「V」字状を呈して浅く施されている珠洲系土器の擂鉢形土器の擂目とは明らかに違いがみられる。第29図16は口径約34cm、器高約10.5cm、底径約14.5cmを測り、底部から体部が直斜状に立ち上り、口縁部は外向している。底面は笠で削られ、底部外面には底面からはみだした粘土をナデつけた痕跡が認められる。擂目の単位は2.6cm幅で9条の櫛齒状工具で右から左へ施しているが、底部内面には擂目は認められない。胎土の色調は灰色で、器面は底部周辺が茶褐色、体上部が淡い青灰色を呈している。17・18の擂目は3.2cm幅の中に10条を、19は3cm幅で8条の擂目を1単位として施している。17～19の色調は乳白色を呈している。20は赤褐色を呈し、7条の擂目がみられる。

變形土器（第29図21～24、図版第36図26）常滑系土器の變形土器は胴部および底部破片が多く、器形全体を知ることはできない。しかし、破片の曲線等から全て大形製品と考えられる。胴部破片には緑色の降釉がみられるものが多く出土している。21・23・24は内面に櫛目状の整形痕がみられ、外面は横ナデ整形が施されている。21・24の胎土は茶褐色を呈している。23は胎土に緻密な石英粒を含み、白灰色を呈し、器面は他の常滑系土器と異なり、表黒色をしている。23の底部外面には底面からの粘土をナデつけた痕跡が認められる。22には竜状のスタンプが押印され、胴上半部と思われ、色調は赤褐色を呈している。

（鈴木敏朗）



第29図 中世陶質土器（株洲系土器・常滑系土器）

土師質土器（第30図1～6、図版第34図29～31）一般に灯明皿と呼ばれている土器で、器形は皿ないしは环形を呈している。本遺跡出土の土師質土器は器形の特色から4種に大別される。胎土には水こし粘土を用い、暗褐色ないしは橙褐色を呈しているものが多い。

A類（1）口径8cm、器高約1.6cmを測る小形の浅い皿で、口唇部が短かく直立状に立ち上るものである。手捏ねで成形された後にロクロで整形したもので、底部から体部にかける線は緩やかな曲線を呈し、体部・底部の区別はし得がない。

B類（2）口径10.8cm、器高2.1cmを測り、口縁部が強く外方へ開くものである。外面の体部から底部にかけては、箒で研磨されている。

C類（3・4）本類は口縁部が強く外方へ開き、底部は緩やかな丸底状を呈し、器体の下半部に稜線を有すものである。4は稜というより段を有し、内面には刷毛目状器具によって底面から口縁に向って左廻りに一周して口縁の一端へはね上げた痕跡が見られる。

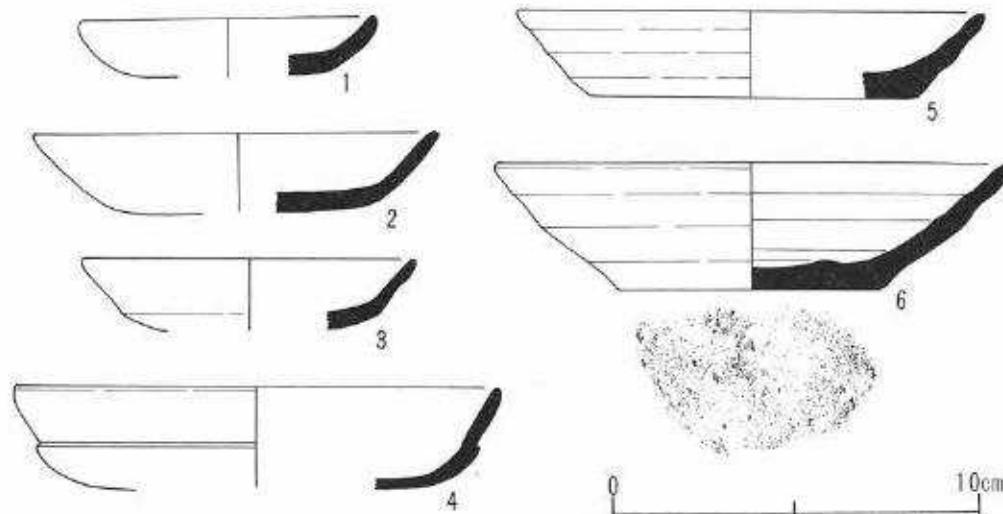
D類（5・6）口径12.5～13.5cm、器高2.3～3.4cmを測り、口縁が外方へ開き、底部が平底になる一群である。ロクロで整形され、内外面ともに横ナデ痕が顕著に見られる。6の底部は回転糸切で切離されている。5・6ともに油煙の付着が著しい。

（戸根与八郎）

4. 近現代陶磁器（図版第34図32～45）

本遺跡から出土した近世陶磁器片は約300片を数えるが、全体の器形を窺えるものは一点もない。陶器と磁器に大別されるが、肥料などと一緒に運び込まれたものであろう。

陶器（図版第34図32～39） 器形から變形土器（32～35）、鉢形土器（36）、皿形土器（37）、碗形



第30図 土師質土器

土器(38・39)に別けられる。36は捏鉢で青褐色の素地に白土で波状文を描き出したものである。上部からは、濃緑色の釉薬が2条重ねている。37は高台径5cm、現存器高1.5cmを測る皿形土器で、底部は削り出しである。見込みは蛇の目を呈し、黒味をおびた濃緑色の釉薬が施されている。素地は灰白色で、輪形の削り取り痕が顕著に見られる。

磁器(図版第34図40~45) 器形から碗形土器(40~44)、瓶形土器(45)に分けられる。いずれも染付で、素地は灰白色を呈し、胎土は精選されている。

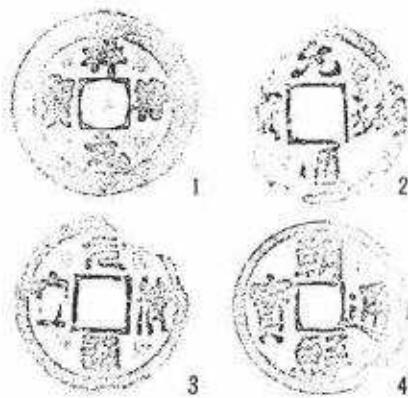
これらの陶磁器類はいずれも日用雑器で、九州産のものであろう。

(戸根与八郎)

5. 銭貨(第31図、図版第37図1~6)

銭貨は合計10枚が出土したが、そのうち遺構外からの出土は9枚である。汚損して名称のわからぬものが4枚あるので、判読できる5枚について図版番号順に名称をあげる。1. 太平通宝、2. 祥符元宝、3. 元祐通宝、4. 元符通宝、5. 朝鮮通宝。

「日本出土銭貨一覧」で、これらの鋳造年代をみると976年の太平通宝が最も古く、1423年の朝鮮通宝が最も新しい。前述した中之島村野口出土の銭貨の内容をみると、14,000余枚の中で本遺跡出土の5種類は、朝鮮通宝以外は何れも100枚以上の出土をみており、各地の出土品に照しても輸入銭の一般的な組み合せの中に含まれていることがわかる。



第31図 銭 貨(3)

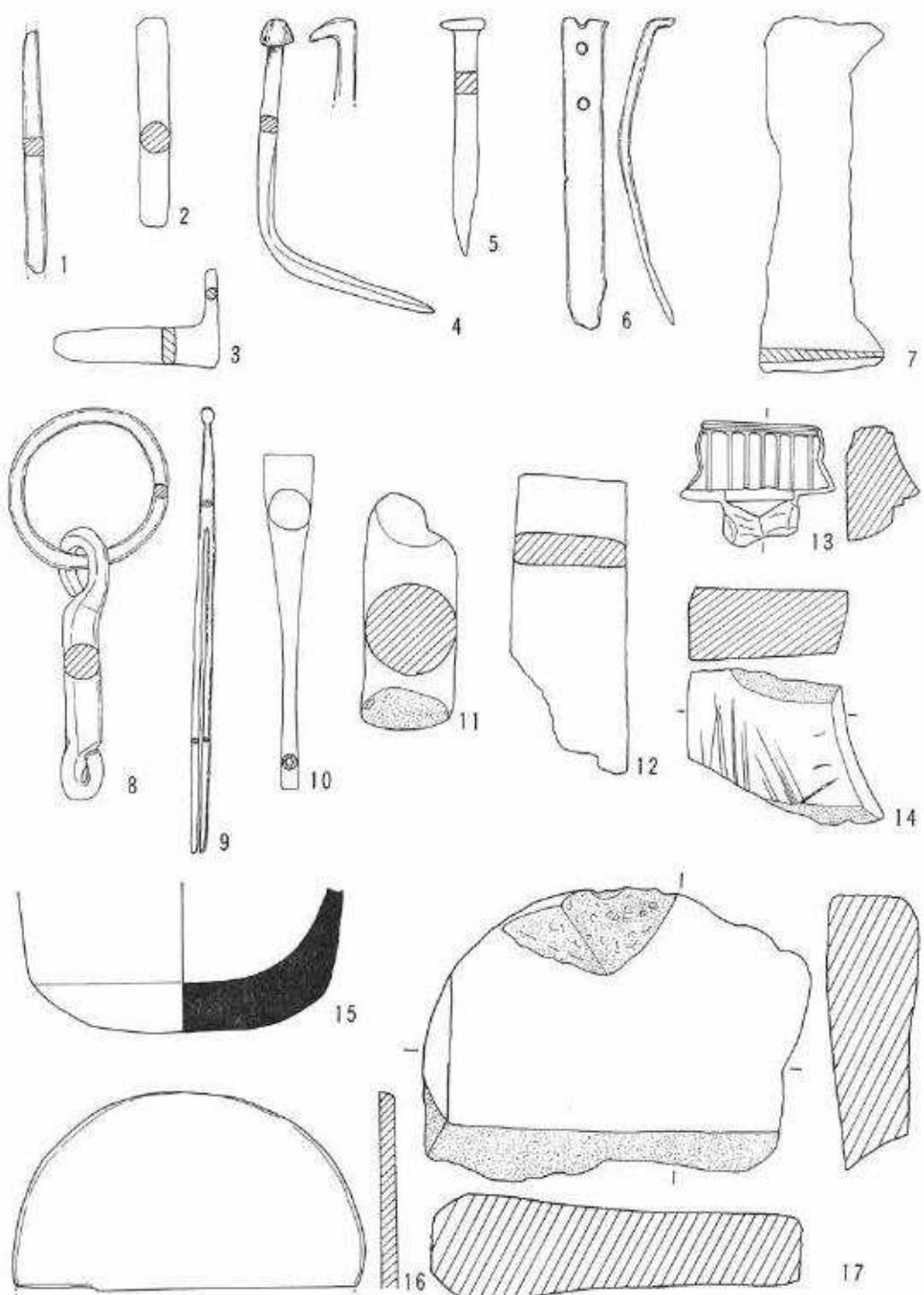
(家田順一郎)

6. 金属製品(第32図1~10、図版第37図7~17)

本遺跡で出土した金属製品は11点を数えるが、その大半が耕作土層から出土しているために年代が直接導き出せるものは一点もない。いずれも新しいものと考えられる。

1は一辺が約5.5mmの四角柱形の鉄片で、角釘の断片であろう。2は径9mmの円柱形の鉄片で、やはり釘の類と思われる。3は扉の支え金具であろう。4・5も角釘で、4は折れ曲った頭部をもち、径5mm、全長12.8cmを、5は径6.5mm、全長8cmを測る。6は一端を折り曲げて頭部とした板状のもので、釘とも考えられるが、頭部の角とその下に径4mmほどの穴が3個あり用途は不明である。7は鍼の一種と思われる。8は継手の両端の造りがほぼ同じで、2個の鉄環がついていたものと考えられ、牛馬具の引手金具であろう。9は真鍮製の簪で、頭部には耳かきが付されている。10は真鍮製の煙管の吸い口である。

(家田順一郎)



第32図 金属製品・土製品・木製品・石製品 (1/2)

7. 木製品（第32図15・16・第33図1・2, 図版第37図18~21）

本遺跡の遺構外から出土した木製品は総数4点を数えるのみである。ほとんど破片であり、完形品は少ない。このため明確にその製品の用途などを識別することはできない。

15は口縁部を欠失しているが、推定口径9.6cm, 現存器高4.2cmを測る小形容器と考えられる。底部は緩かな丸底状を呈し、底部から体部の変換点では稜を形成している。内外面には赤漆がじかに薄く塗られているが、底部付近はほとんど剥離し木地が露出している。

16は小形の曲物の底板もしくは蓋板で、長径10.5cm, 短径約9.6cm, 厚さ0.5cmを測り、橢円形を呈している。周縁の裁ち落としは外方に少し傾斜をつけている。周側面には木釘などで固定した痕跡はなく、はめ込み式のものであろう。

第33図1・2は内反する板材を円筒状に連結したもので、2は上端外径約32cm, 下端外径約24.4cm, 厚さ2.5cmを測り、その差は約8cmあり、下端がわずかにすぼまる形態を持つものである。内面の上端は金属工具で薄く斜めに削り取られている。また、下端には底板をあてた様な痕跡は認められない。外面の両端にはタガの圧痕が顕著に見られる。

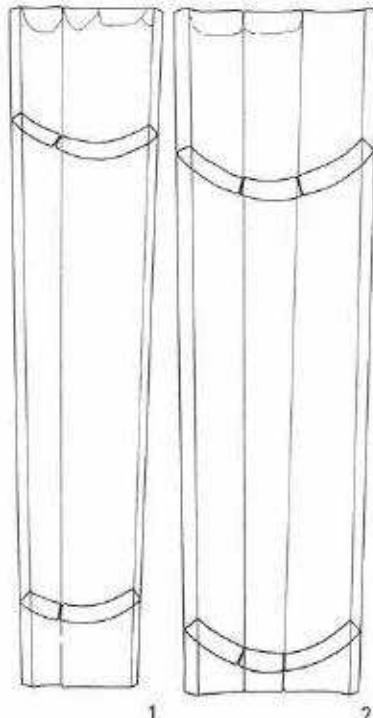
このような所見と出土状況から考慮してみると、本製品は旧道跡を横断するように2個並べられて埋置されていたことから、用排水用の樋と考えられ、その年代はあまり下らないものであろう。

（戸根与八郎）

8. 土製品・石製品（第32図11~14・17, 図版第37図22~29）

土製品としては、11の支脚片、13の小像の台座片、17の焼き台片の3点が出土している。11は胎土に細砂が混入され、澄褐色を呈する支脚片で、焼成は堅緻である。おそらく、古墳時代前期の土器に伴うものであろう。13は硬質の素焼き土製品で、型取りされたものである。小仏像の台座装飾のようなものと考えられ、台座下部には幅2.2cm, 厚さ1.2cmを測る枘が突出している。17は中世の窯跡の窯道具であるが、上下の両面及び周縁が研摩されている。特に上下両面には研摩痕が顕著に見られるところから砥石として二次的に利用されたものであろう。12・14および図版第37図25・26は何れも凝灰岩質の砥石の破片で、全て可動砥石に属するものであろう。他に石臼の破片（図版第37図28）が1点出土している。

（家田順一郎）



第33図 木 製 品 (31)

V 周辺遺跡の概要と出土遺物

1. 杉之森（通称 根岸）遺跡

ここで紹介する遺物は中之島村大字杉之森字屋敷付91番地（通称 根岸）出土のもので、本遺跡は発掘調査地点の西方約300mの杉之森集落内に位置している。現状は畑・水田で、遺物は水田面下10~20cmの橙褐色粘土層からまとまって出土したと言われている。遺物量は多く、本地点が古式の土師器を出土する中心地域とも考えられ、住居跡などの遺構の存在が多分に想定される。遺物の主体は古式の土師器で、この他に珠洲系陶質土器が若干出土している。

押出の土器類は口縁部片をもとに復元実測をしたものが多く、肩部以下が不明なものが多い。

土師器（第34図～第39図、図版第38図～図版第40図1～24）　蓋形から蓋形土器・壺形土器・広口盤形土器・高环形土器・器台形土器・壺形土器・斐形土器の7種に大別される。

蓋形土器（第34図1）　1は笠形の蓋でつまみ径2.9cm、器高2.4cm、口径7.8cmを測り、「ハ」の字状に大きく開いて口唇部に至るものである。器面は笠で研摩され光沢を有している。つまみは体部に差し込んで接合したもので、つまみと体部との詰曲部は笠で丁寧に整形されている。胎土に細砂が混入され、器面に化粧粘土を塗ったもので暗褐色を呈している。

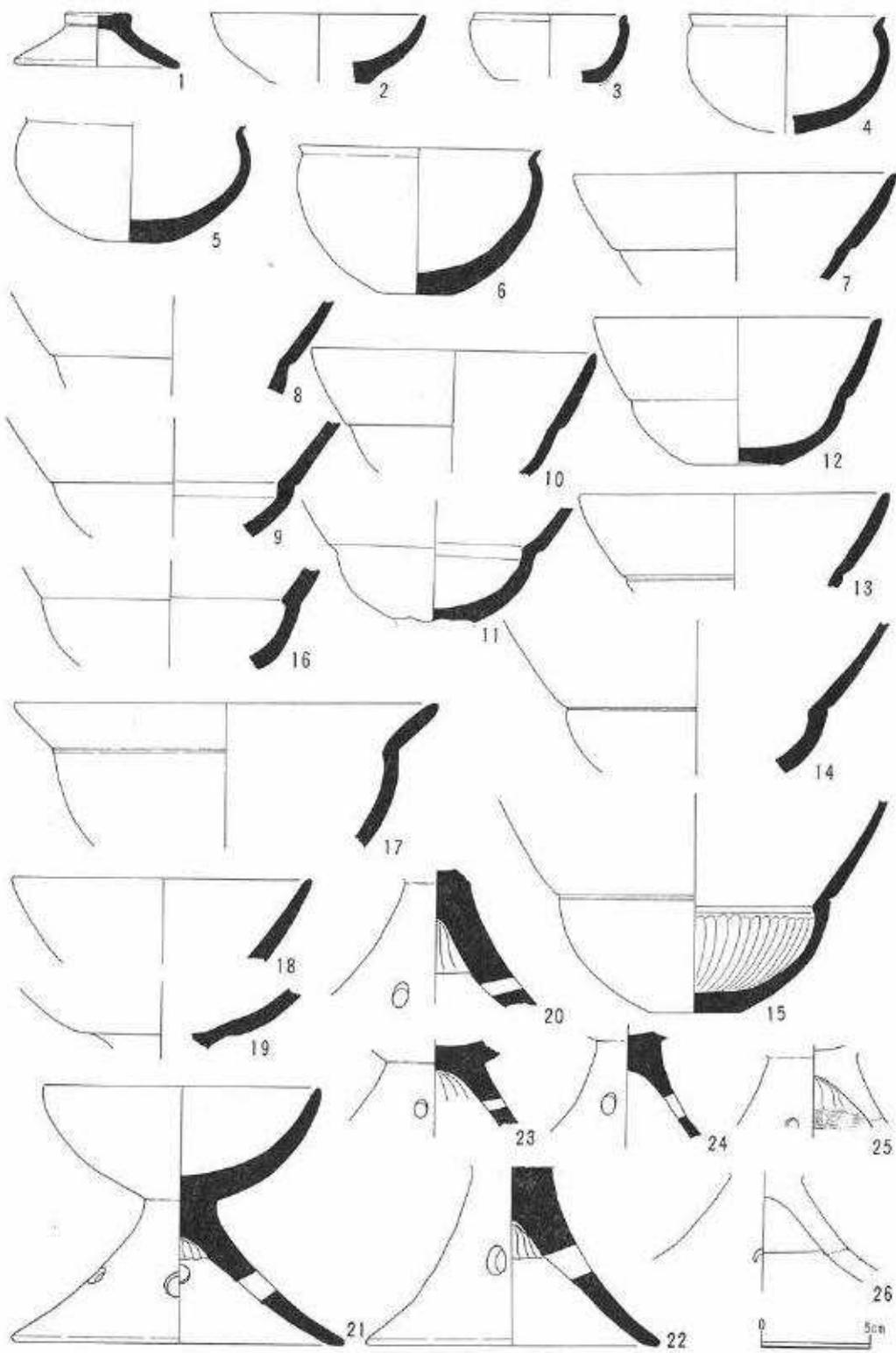
壺形土器（第34図2～6、図版第38図1～2）　壺形土器は形態から3種に大別される。

A類（2）　口縁部がやや内巻気味に立ち上るもので、底部は平底を呈している。器面は笠で研摩されているが、剥離している部分が多い。

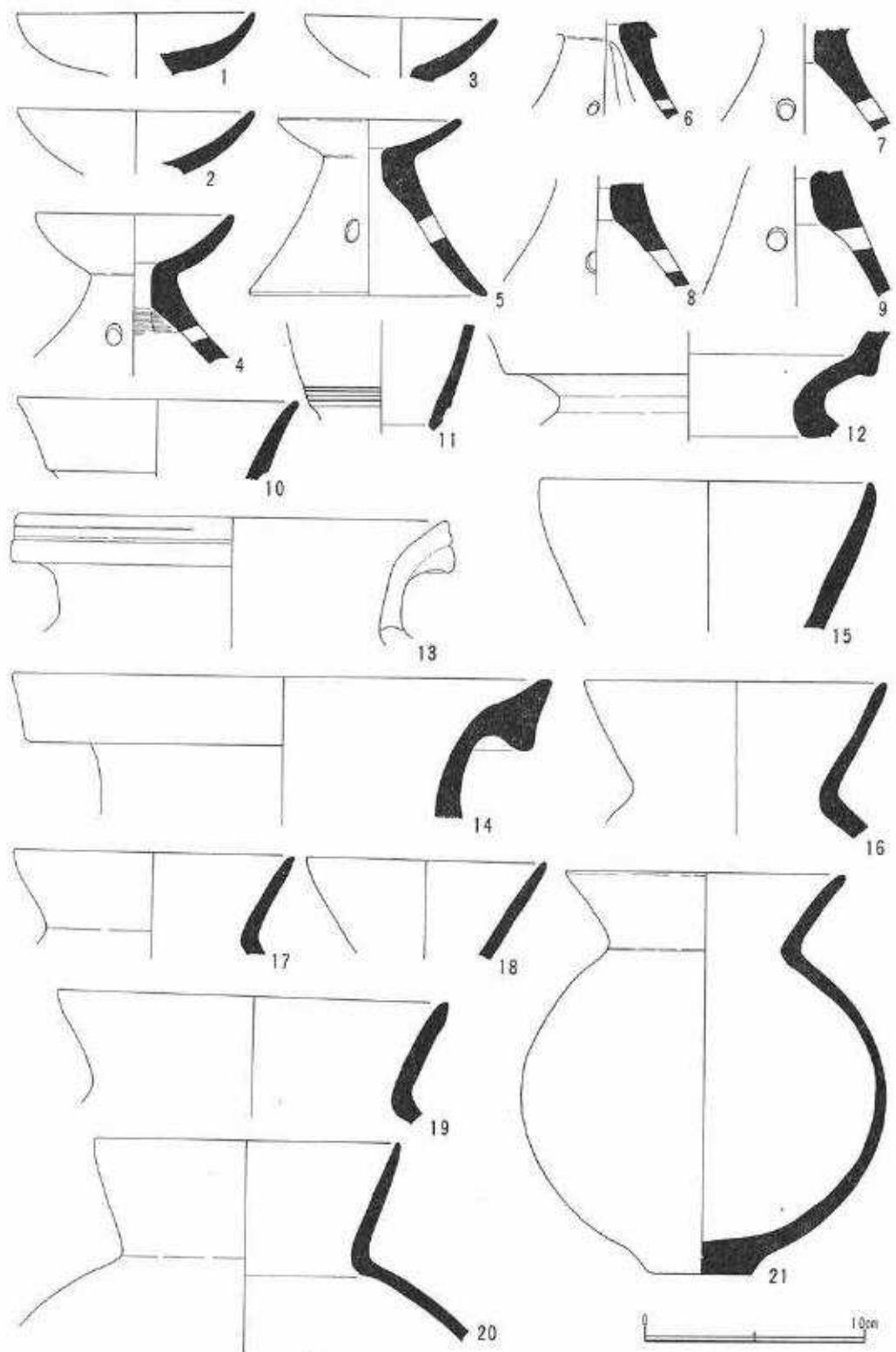
B類（3）　内巻した平底の体部に低く短かい口縁部を付した小形の土器である。口縁部は緩やかに外反し、口唇部内面には内削ぎ状の鋭い稜が見られる。口縁部は横ナデ手法、体部は笠による横ナデ整形が施されている。胎土には精選されたものが用いられ、化粧粘土を器面に塗り焼成は堅緻である。

C類（4～6）　内巻した丸底ないしは平底の体部に低く短かい口縁部を付したもので、器高が相対的に高い一群である。口縁部は外反し、頸部が「く」の字状にくびれて、内面にやや鋭い稜を形成している。器面には化粧粘土が塗られ、内外面ともに笠で研摩され光沢を有している。胎土には細砂が混入されて暗褐色を呈し、焼成は堅緻である。

広口盤形土器（第34図7～17、図版第38図3～5）　内巻した体部に広く開いた口縁部を付したもので形態から2種に大別され、更に器面整形から細分される。胎土に細砂が混入され、暗褐色ないし橙褐色をし、焼成は堅緻である。器面には化粧粘土が塗られ、笠で研摩されて光沢を有しているものと剥離しているものとがある。



第34図 土師器(蓋・壺・広口盤・高环)



第35図 土 篩 器(器台・壺)

A類（7～16） 口縁部が複合口縁状を呈し、内巻きみに緩やかに外向する一群である。7～12は頸部内外面に鋭い段を有し、肥厚している。12の口唇部内面は窓で削られて内削ぎ状を呈している。13～15は頸部に一条の沈線を引くことによって頸部の屈曲度を作り出したもので、形態的には7～12と大差がない。胎土には細砂が混入され、焼成は堅緻である。なお、11は台付盤形土器で、器面には化粧粘土が塗り、内外面ともに窓で横ナデされ光沢を有している。

B類（16・17） 頸部にくびれの鋭さがなく、口縁部から頸部及び体部に向って緩やかな曲線を描く一群である。17は口縁部が厚く直線的に外向し、内面の屈曲部には稜がかすかに残っている。胎土には精選されたものが用いられ、焼成は堅緻である。器面には化粧粘土が塗られ、口縁部から頸部は横ナデが、体部は窓で研摩され光沢を有している。

高環形土器（第34図18～26、図版第38図6～9） 环部と脚部に別けられるが、环部は更に2種に大別される。なお、器面に丹などを塗ったものは一点もない。

A類（19） 口縁部と环底部の接合面で緩やかな稜を形成し、口縁部が緩やかな曲線を描いて立ち上るものと考えられる。环底部は平底状にならず緩やかなカーブを描いている。器面はヘラによる横ナデで調整され光沢を有している。

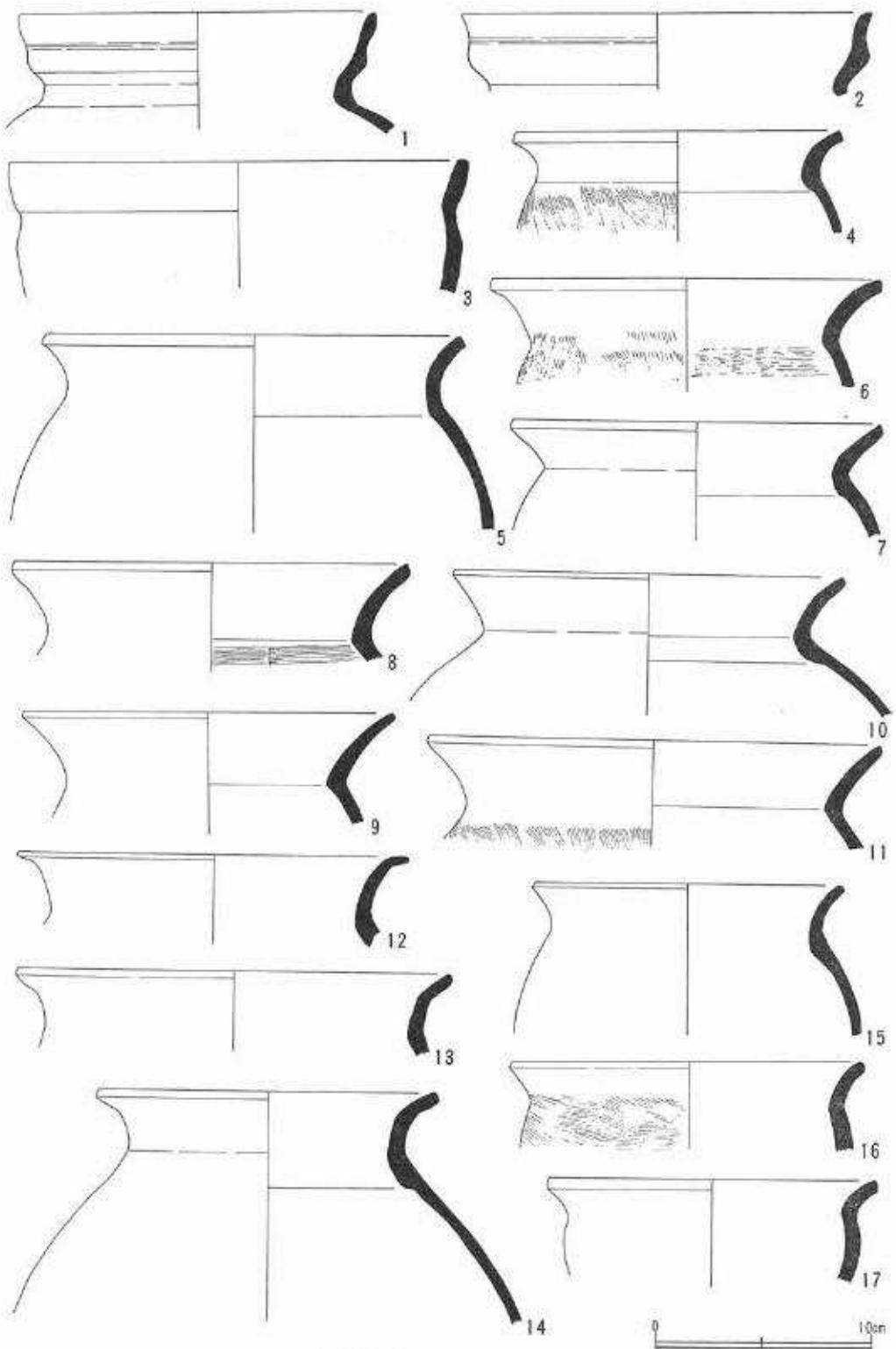
B類（18・21） 21が本類の基本形態を示すものと考えられ、环部径12.7cm、器高11.8cm、脚部据径15.5cmを測る。环部の口縁部は内巻きみに丸味を持って立ち上って碗状を呈し、脚部は漏斗状に大きく裾を開いて外反している。脚部には円形の透しが4個穿たれている。胎土には粗砂が混入され橙褐色を呈している。器面が荒れているために整形手法などは不明である。22～26は脚部で形態的にはB類に近似しているが、环部にいかなる形態のものが接合され得るか定かではない。22の脚部裾の端部内面は窓で薄く削られている。脚部外面には化粧粘土が塗られ、縦位の窓磨き痕が顕著に見られる。20、22～25には円形の透しが3個穿たれている。また、脚部内面にはしばり痕や横位の刷毛目痕を有すものもある。

器台形土器（第35図1～9、図版第38図10～14） 器台形土器は器受部の形態から2種に大別される。器面に丹などを塗ったものは一点もない。

A類（1～4） 小形の环状の器受部を持ち、口縁部がやや内巻気味に立ち上る一群である。4は器面を窓で横ナデ調整をしたもので光沢を有し、脚部には円形の孔を3孔穿っている。脚部全体は不明であるが、比較的据部が広く開くものと考えられる。

B類（5） A類に比して器受部が浅く、直線的で漏斗状を呈している。また、脚部の開きもA類に比して直線的である。器受部の口唇部の内面は窓で削られて内削ぎ状を呈している。脚部には円形の孔が3孔穿たれている。6～9は脚部片であるが、いずれの類に接合し得るか定かではない。A類・B類ともに脚部に化粧粘土が塗られ、窓で研摩されている。胎土には細砂が混入され、赤褐色や暗褐色などを呈し、焼成は堅緻である。

壺形土器（第35図10～21、第36図1・2、図版第38図15～23） 壺形土器は口縁部の形態から4種に



第36図 土器(甕)

大別される。胎土には細砂や粗砂が混入され灰褐色・暗褐色・赤褐色などを呈し、焼成は堅緻のものとやや軟質のものとがある。

A類(10・11) 複合口縁を有し、幅広の口縁部が大きくラッパ状に広がる一群である。10は頸部との境に顕著な折り返しの板を有し、器面には化粧粘土が塗られ、箆で横ナデされ光沢を有している。11は内巻きみに口縁部が立ち上り、折り返しの口縁帯の下部には幅1.3cmで4条の平行沈線が浅く施されている。小形の土器と考えられ、外面には丹が塗られている。2点とも胎土には精選された粘土が用いられ灰褐色を呈している。

B類(12~14) 口縁部が強く屈曲して外面に段を持つ大形の壺形土器である。器肉は厚く、胎土には粗砂が混入され褐色・暗褐色・茶褐色を呈し、焼成は堅緻である。13は頸部がほぼ垂直に立ち上り、口縁部に粘土を三角状に貼りつけて口縁帶を作り出したものである。口縁帶には粘土の貼りつけ痕と1条の沈線が見られる。おそらく、この上に化粧粘土を塗ったものと考えられるが、それを的確に証明する痕跡は見られない。胎土には粗砂が混入され黄褐色を呈している。14は13と同じようにして作り出されたものと考えられ、口縁部と頸部との屈曲度は13よりも強く、口縁部内面は指の腹でナデた様な緩やかな曲線を描いている。口縁部の内外面には化粧粘土が塗られ、箆で横ナデされ光沢を有している。

C類(15~21) 頸部が「く」の字状にくびれて口縁部が外向し、胴部が球形を呈する一群である。21は口径13.1cm、器高18.5cm、底径4.7cmを測り、底部は腰高の平底である。口縁部の内外面は横ナデで整形されているが、胴部は器面が荒れているために整形手法は不明である。底部から胴部に至る屈曲部及び底面は箆で整形されている。胎土には粗砂が混入され橙褐色を呈し、焼成は軟質である。

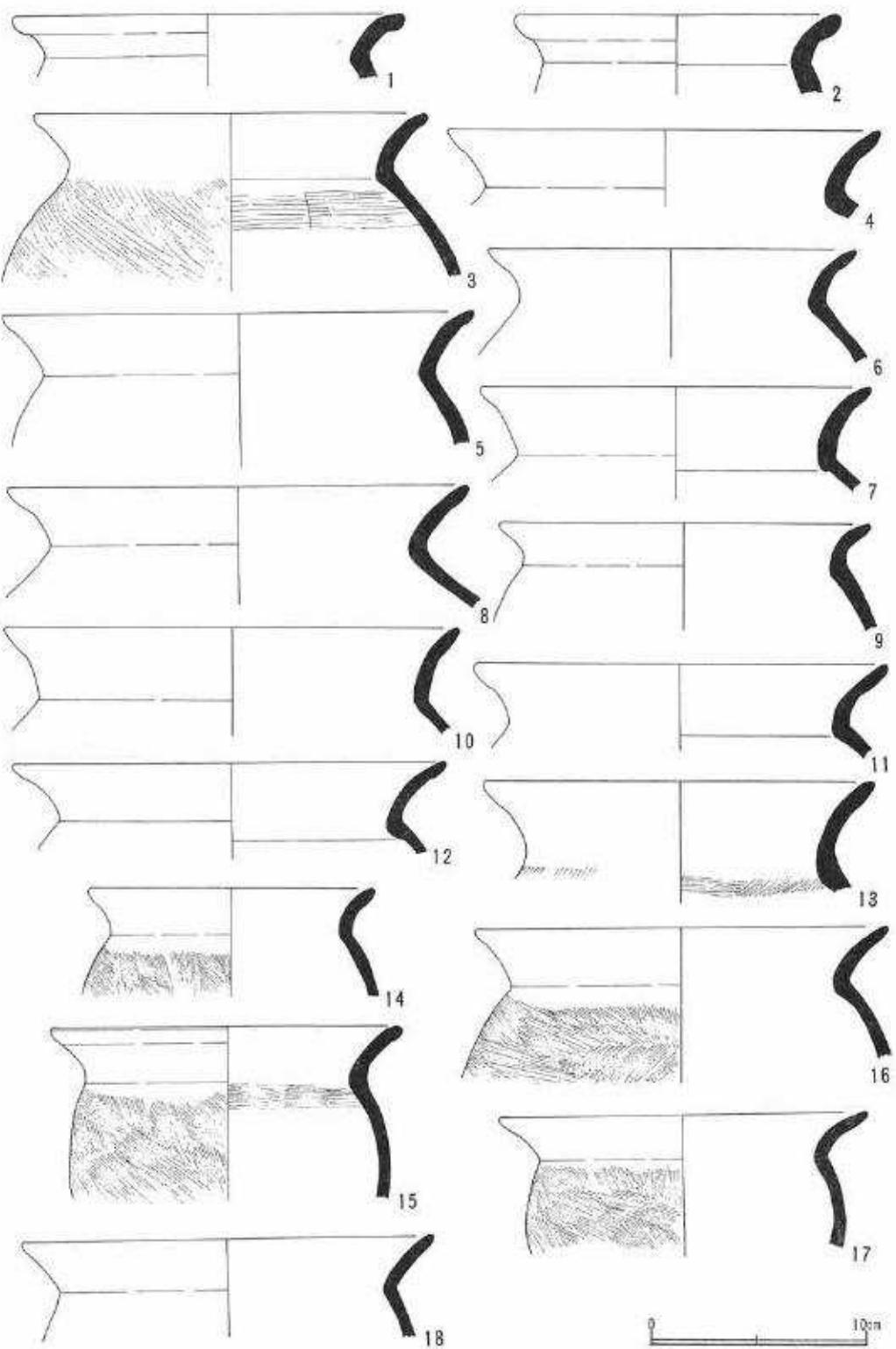
D類(第36図1~2) 本類は肩部以下を欠失しているため壺形土器とすべきものか疑問が残るものである。口縁部はほぼ垂直に直立し、頸部との屈曲部で緩かな稜を有して頸部に至るもので、比較的肩の張る土器と考えられる。口縁部の内外面は横ナデ調整されている。胎土には粗砂が混入されて暗褐色を呈し、焼成はやや軟質である。

壺形土器(第36図3~17・第37図・第38図1~11・第39図、図版第39図) 壺形土器は口縁部の形態から3種に大別され、複合口縁状を呈するものをA類、外巻き状を呈するものをB類、単純口縁を呈するものをC類とする。なお、B、C類は更にその特徴から細分される。

A類(第36図3) 口縁部がほぼ垂直に直立して、口縁下部にだれた稜線を有している。頸部から胴部に移行する線は緩やかにカーブを描いて胴部に至る。口唇部は水平で、口縁部外面は横ナデされている。胎土には粗砂が混入され暗褐色を呈している。

B類(第36図4~17)

B類(4・5) 頸部が緩やかに外反して口縁部に至り、口唇部外面の端部に稜を有している。胴部と頸部との屈曲部内面には稜が見られる。4の胴部内面には斜位の櫛目痕が施されて



第37図 土 師 器(甕)

いる。なお、本類の口唇部外面の貌は、箒で削る際に外方から圧が加えられた結果生じたものと考えられ、本来はB₂～B₄類の口唇部形態と同一のものであろう。

B₂類（第36図6～11） 頸部が「く」の字状に強く屈曲して口縁部が外反するもので、頸部と胴部の屈曲部の内外面に稜線を有している。口唇部の削ぎ角度は約60度を測り、口縁部から頸部にかける外面には横ナデ調整痕が見られる。6の外面には斜位の櫛目が、内面の屈曲部下には横位の櫛目が施されている。胎土には粗砂が混入され、赤褐色を呈しているものが多い。

B₃類（第36図12～14） 頸部がほぼ垂直に立ち上り、口縁がゆるやかに屈曲して外向する一群である。12は口唇部から約1.7cm位のところで急に折れ曲って外向している。14は口縁部・頸部・胴部に分けて作られたもので、内面の屈曲部には補強粘土が貼られている。口縁部から胴部上半にかけては横ナデ調整されている。

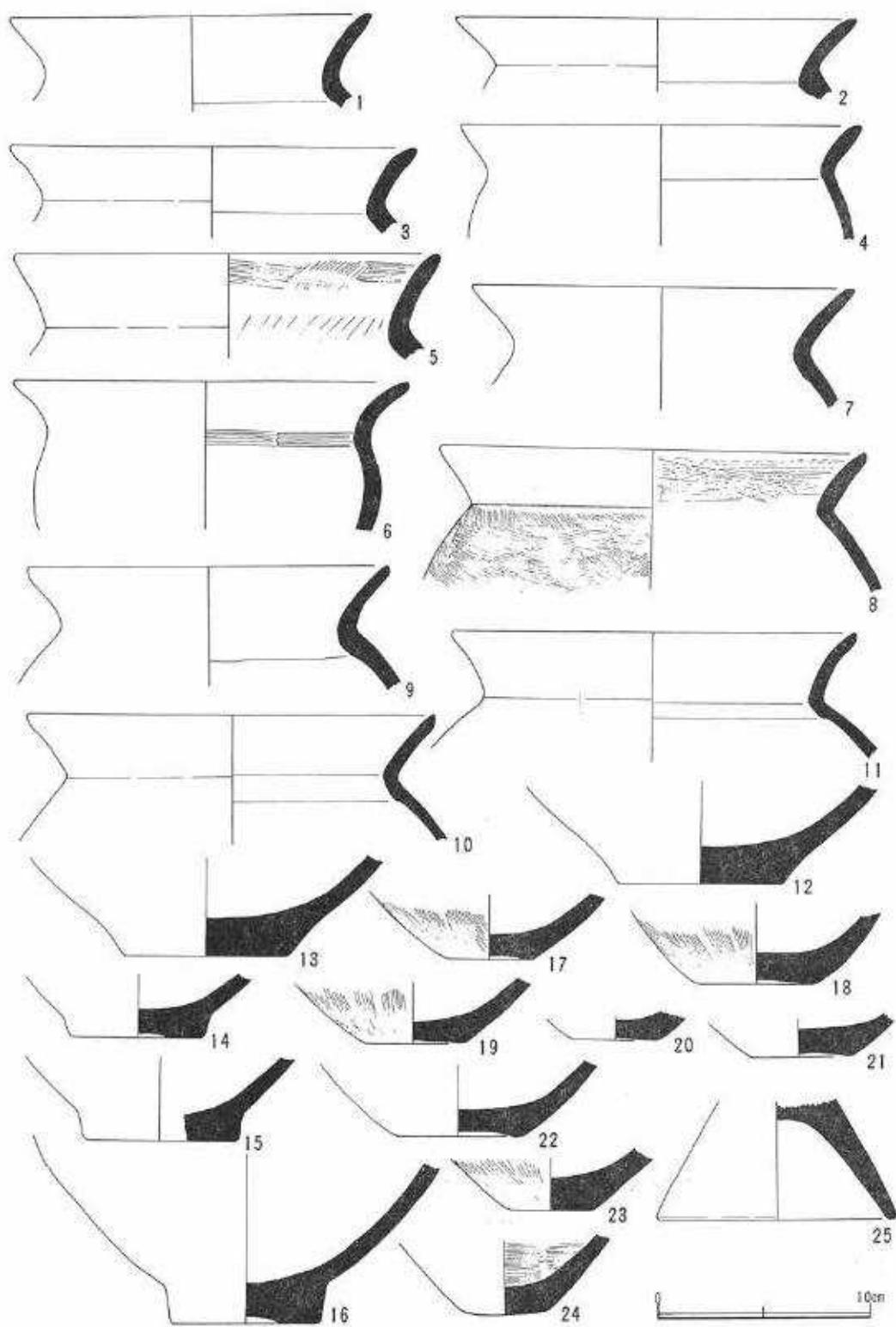
B₄類（第36図15～17） 口縁帶が短かい小形の土器で、A₂類の頸部の屈曲及び口唇形態に近似した一群である。胎土には粗砂が混入され、赤褐色や暗褐色などを呈しているが、焼成はやや軟質である。口縁部の内外面は横ナデ調整されている。16は外面に櫛目が施されている。なお、17は頸部のくびれや胴部へのカーブから壺形土器ないしは壺形土器になるものであろう。

C類（第37図・第38図1～11、第39図1～3）

C₁類（第37図1） 口縁が外反ぎみに立ち上り、口唇部から1cm位のところで急に折れ曲って外向する土器である。口縁部の器肉は厚く、内外面ともに横ナデ整形されている。胎土には粗砂が混入されて暗褐色を呈し、焼成は堅緻である。器面にはススの付着が認められる。

C₂類（第37図2～17） 口縁が直立ぎみに立ち上り、次第に強く外反して端部が肥厚する一群である。口縁部外面は横ナデ整形され、頸部以下には櫛目ないしは刷毛目による調整痕が施されたものが多い。2は器肉が厚い土器で最大幅が口縁にくるものと考えられ、頸部に段を有している。口唇部は肥厚し、折り返したような感じをうけ、器面にはススの付着が認められる。3・7・12の頸部内面には稜が見られ、12の頸部の接合部内面には粘土を貼りつけて補強している。また、3・5・6の口辺から胴部上半にはススが付着している。15・17も最大幅が口縁にくるもので、15の胴部内面上半には刷毛目調整痕が見られる。胎土には粗砂ないしは細砂が混入され、色調は黄褐色や暗褐色等を呈し、焼成堅緻のものが多い。

C₃類（第37図18・第38図1～11・第39図1～3） 頸部が「く」の字状に折れ、口縁部が直線的に外向する一群である。口縁部は横ナデで整形され、胴部には斜位の櫛目ないしは刷毛目による調整痕が施されたものが多い。最大幅は第38図6を除いて胴部にあって肩部及び胴部が比較的張るものと考えられる。第38図7～11は、本類の中でも特に肩部及び胴部の張りが大きい。口唇部の形態は丸くなるものと、第38図7～11、第39図1～3の様に細くなっているものとがある。第38図6・9、第39図1～3の口辺から胴部にかけてはススの付着が見られる。胎土には粗砂ないしは細砂を含み、焼成は比較的堅緻である。器肉は全体的に薄く仕上げられ



第38図 土 器 (更・底部)

ている。

土器底部（第38図12～25）壺ないしは甕形土器の底部である。平底と揚底、それに台付甕形土器の台部片に分けられ、それぞれの特徴から少なくとも5つに大別される。12・13は底部から胴下半に向って大きく開き、底部の突出が顕著ではない。14～16は胴部から収約してきた曲線が底部近くで僅かに反転し、いわゆる腰高の形態となるものである。14・16の底部中央部は指頭で上へ押し上げた様な凹みを有している。ともに壺形土器の底部と考えられ、16は壺形土器C類の21に形態が極めて近似している。器面は箒で横ナデされ、光沢を有している。17～22は揚底の一群で、外面には刷毛目ないしは櫛目が底部近くまで施されたものが多い。23・24は平底で底径が小さく、胴部への立ち上りが直線的になるもので、底面は箒で整形されている。25は台付甕形土器の台部片で、高台の端部は箒で削がれて水平になっている。外面には櫛目痕がかすかに、内面には箒によるナデ痕が見られる。

（戸根与八郎）

中世陶質土器（第40図1～4）図示した中世陶質土器はいずれも石川県の珠洲焼に酷似した特徴を有している。器形から甕形土器と鉢形土器の2種に大別される。

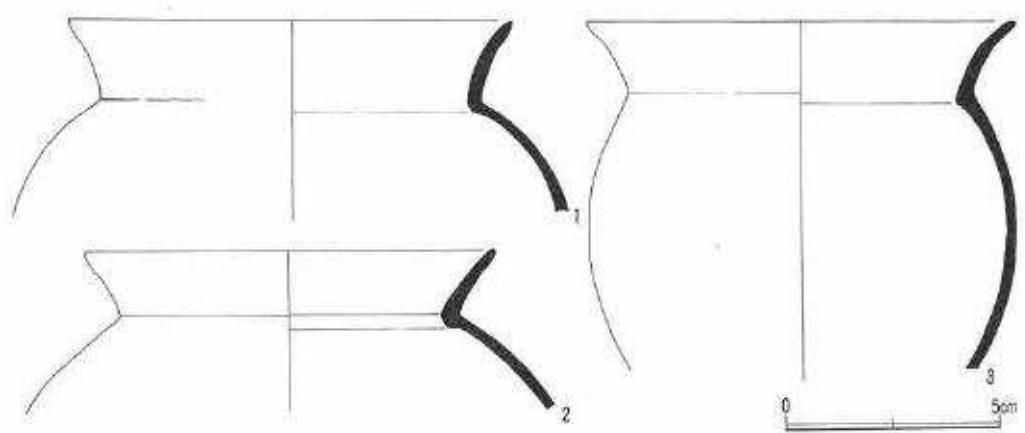
1は甕形土器の頸部から肩部にかける破片で、外面には平行条線状の叩目が浅く施されている。内面には円形の押圧痕が見られる。胎土には微粒の砂礫を含み、灰白色を呈している。

2～4は鉢形土器で、2の器面には火ブクレが見られ、口唇部内面には8条一単位の櫛描波状文が施されている。3は片口付の摺鉢である。内面には幅2.5cmで12条を一単位とした摺目が底部から口縁に向って搔き上げられている。内面は摩滅し円滑になっている。4は底径約4cmを測る摺鉢底部である。内面には幅3.5cmで13条を一単位とした摺目が施されている。底部には平行の圧痕が見られるが、静止糸切痕とは考えられず、底部を切離した後に二次的に付いたものと考えられる。2は黒色、3・4は墨灰色を呈し、胎土には砂礫粒を含んでいる。

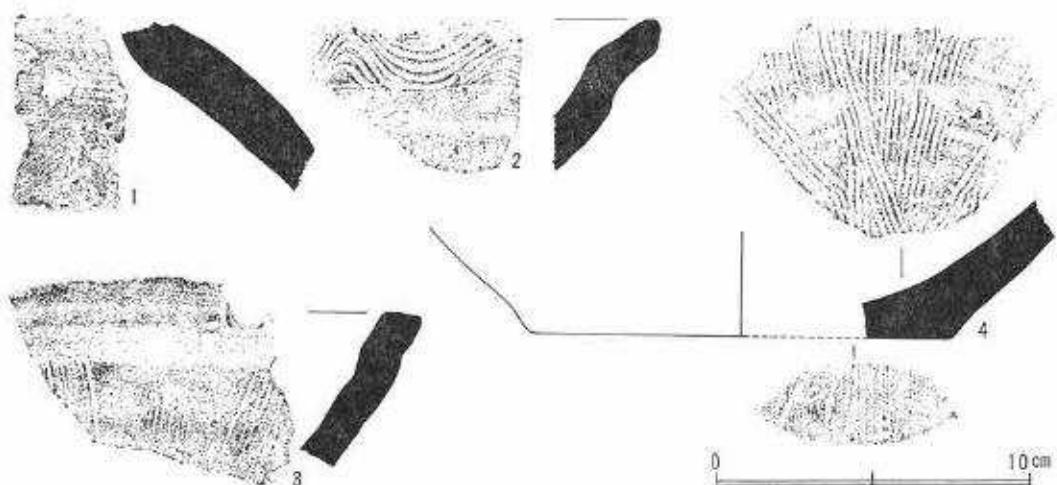
（和田寿久）

2. 横山遺跡

図版第40図25の土器は中之島村大字高畠字屋敷付出土のもので、昭和12年頃水田を果樹園にする際、水田面下15～20cmで土地所有者の今井正雄氏が発見したものである。現在も遺物の採集が可能で、今井氏が甕形土器口縁部片、高环形土器脚部片と共に所蔵しておられる。壺形土器は全体的に歪んでいるが、口径11.2cm、器高18.8cm、底径6.5cmを測り、最大幅を胴部中半に有している。頸部は直立ぎみに立ち上り、次第に口縁が強く外反する。頸部からは緩やかな曲線を描いて胴部に至り、底部は無文の平底である。口縁部の内外面は横ナデが、胴部には斜位の櫛目が施されている。胎土には細砂が混入され赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。遺物の時期は前述の杉之森字屋敷付出土のものとほぼ同一のものと考えられる。（戸根与八郎）



第39図 土 器 (瓶)



第40図 中世陶質土器(珠洲系土器)

VI 総括

1. 出土遺物について

本遺跡出土の土器類は大別して3時期に分けられるが、その出土状態には安定性がなく、同一個体がまとまって出土する例は稀で、個々の破片が単発的に包含された状態で出土している。このため遺物自体に制限があり、セット関係を明確に把握することはできない。特に土師器と須恵器はその傾向が大である。なお、土師器についてはV周辺遺跡の概要と出土遺物で紹介した杉之森字屋敷付（通称 根岸）出土の土器を中心として記述することにした。

A) 土師器 新潟県内における土師器の研究は、弥生時代の終末期の問題として千種式土器の編年的位置づけをめぐって論が進められ、小出義治氏^(註1)や吉岡康暢氏^(註2)らの研究によって北陸地方の古式土師器に対する問題点が具体的に提起された。しかし両者の間には月影式土器の把握の仕方において方法論上の相違が見られる。この後、上原甲子郎氏等によって千種式土器に対比される緒立Ⅱ式土器が提唱された。^(註3)また最近では、三条市の狐崎遺跡では五領Ⅱ式併行のベット状造構を伴う方形プランの住居跡が、吉川町の長峰遺跡では隅丸方形プランを有する住居跡^(註4)が、真野町の浜田遺跡では方形プランの住居跡内から柳葉形の銅鏡が1点検出されている。このように古式土師器の資料は年々増加しているのに対して第Ⅱ様式（和泉期）、第Ⅲ様式（鬼高期）の土師器については断片的に調査がされたにすぎず、まだ土器集成の段階にまでは至っていないのが現状である。

杉之森（通称 根岸）遺跡の土器についてはVの項で個々に触れてきたが、県内では対比され得る資料は少ないため、この種の土器は全国的な視野から見た方が妥当と考えられる。土師器の編年的研究は多くの先学諸氏によって進められ、細分化されてゆく傾向がある。玉口時雄氏^(註5)は土師器の変遷を第Ⅰ様式から第Ⅳ様式までの4様式に区分され、さらに第Ⅰ様式を前半・後半の2時期に細分している。また、金井塙良一氏^(註6)は五領遺跡の調査を通じて古式土師器を総称して五領式土器と呼称し、土器には「弥生式土器の土器製作の伝統を強く継承している土器群」と「外来の土器製作の影響を受けて出現した土器群」の2種があるとされ、更に土器の組み合せから五領式土器をⅠ・Ⅱ式に細分している。小出義治氏^(註7)は静岡県東部の土師器編年に際して、和泉式土器をⅠ、Ⅱに細分されている。このような土師器の編年研究を踏えて本遺跡の土器を検討する必要がある。本遺跡出土の土器は採集資料のためにセットとして取り扱うには多少問題があるが、細分することはさけ、今後の資料の増加をまって考えた方がより妥当と考えられる。

器種の組成においては蓋形土器、壺形土器・広口壺形土器・台付広口壺形土器・高环形土

器・器台形土器・壺形土器・甕形土器・台付甕形土器・手捏土器などがあるが、小形壺形土器・甕形土器は検出されていない。数量的には甕形土器が一番多く、器台形土器・高环形土器・壺形土器などは全体的に少ない。成形においては碗形土器、広口盤形土器・高环形土器・器台形土器などの器種を除いては刷毛目整形痕が顕著に見られ、範磨き手法は稀である。布や箋などの整形工具による横ナデ、ナデが調整手法の中心である。また、壺形土器・高环形土器・器台形土器などは化粧粘土を塗ったのち、入念に範磨きされ光沢を有しているものが多い。

甕形土器は口唇部が外削ぎ状を呈するものと単純口縁のものとがあるが、口唇部が鋭角的で丸味を持たない前者は弥生時代後半の伝統的手法である。胴部には斜位の整形痕が施されている。壺形土器は複合口縁で外反するものと内彎ぎみに立ち上るものとがある。胴部は球形に近く、底部は平底となる。高环は环部に梗は見られず壺状のものと付している。また脚部は第Ⅱ様式の特徴である脚部のなればほどが膨らみ、裾が大きく聞くものは一点もなく、脚部上部から「ハ」の字状に裾が聞くものが多い。器台形土器は漏斗状に開く脚台に小皿状の器受部を付したものが多い。この他に広口盤形土器などがあるが、台付甕形土器は台部片のみで全体の器形は不明である。

このような器形の特徴や整形技法等から本遺跡出土の土師器は地方色がうすれ、全国的に齊一性をおびた一群と考えられる。この土器を玉口時雄氏の様式にあてはめると第Ⅰ様式に属すが、第Ⅰ様式でも第Ⅱ様式に近い位置におかれるものであろう。なお、発掘調査対象地域出土の土師器はセットとしては把握されないが、その年代は若干新しくなるものと考えられる。

(戸根与八郎)

- 註1. 小出義治「佐渡に於ける後期弥生文化の限界」國學院雜誌第56卷第2号 昭和30年
 2. 小出義治「北陸の古式土師器と二三の問題」國學院高校紀要4 昭和37年
 3. 吉岡康暢「北陸における土師器の編年」考古学ジャーナル3月号 昭和42年
 4. 上原甲子郎・磯崎正彦・永峯光一「越後猪立遺跡における古式土師器について」考古学雜誌第52卷第3号 昭和42年
 5. 三条市教育委員会『大崎地区中心周辺の歴史資料蒐集調査報告書—長嶺廻時遺跡—』昭和49年
 6. 室岡博・関 雅之・本間信昭『新潟県中頸城郡吉川町長峰遺跡発掘調査報告』吉川町教育委員会 昭和49年
 7. 本間嘉晴・関 雅之・本間信昭『新潟県佐渡郡真野町浜田遺跡発掘調査報告』真野町教育委員会 昭和50年
 8. 玉口時雄「土師器」新版考古学講座5 昭和45年
 9. 金井塙良一「埼玉県東松山市五領遺跡B区」(土師器研究者グループ編『土師器集成図』第2集) 昭和43年
 10. 小出義治『伊東市史』昭和33年
- B) 中世陶磁器 本遺跡からは中国から渡来してきた青磁と日本で焼かれた珠洲系や常滑系の陶質土器が出土している。このうち最も出土量が多いのは珠洲系土器で、常滑系土器がそれについている。

珠洲系土器は鉢形土器・擂鉢形土器・壺形土器・甕形土器の4種があり、鉢形土器や擂鉢形土器はロクロ成形で仕上げられ、内外面に横ナデ痕がみられ、壺形土器・甕形土器は叩きしめ技法で条線叩目を平行に施している。また、胎土・色調などからも石川県珠洲市周辺で焼かれた珠洲焼の一群に酷似している。本県では墳墓・経塚・城館跡・集落跡などから多く出土している。甕形土器は骨蔵器や経筒の外容器として利用されたものが多く、柏崎市上軽井川経塚^(註1)では建久8年(1197)の銘を、笹神村華報寺墳墓^(註2)では正安元年(1229)の銘を有する経筒の外容器として利用されている。十日町市小黒沢遺跡^(註3)では正平8年(1353)銘の板碑の下に壺が骨蔵器として埋蔵されている。栗島浦村観音堂遺跡^(註4)からは片口の鉢形土器・擂鉢形土器・壺形土器・甕形土器が南北朝時代より降る五輪塔の近くから出土している。また、水原町堀越館・下田村五十嵐館^(註5)・長岡市上除館^(註6)・上越市御館^(註7)などの城館跡や黒崎町釈迦堂遺跡^(註8)などの集落跡からは珠洲系土器が常滑系土器と共に出土している。その他、特異な例として名立町沖合タラバ^(註9)・能生町徳合崎沖^(註10)・寺泊町沖合タラバ^(註11)等から揚陸された珠洲系土器がある。

このことをふまえて本遺跡出土の珠洲系土器の年代を考えてみよう。鉢形土器は片口を有し、底部は静止糸切で切離され、底部周端部に再調整が加えられた土器もある。片口の鉢形土器は上軽井川経塚や観音堂遺跡から出土しているが、積極的に本遺跡のものとこれらとの類似性を求めるることはできない。口唇中央部がくぼみ、外削ぎ状の口縁をもつ土器は釈迦堂遺跡擂鉢A類に類似し、室町時代中頃に比定されよう。擂鉢形土器は口唇部と体部の内面状況により2大別したが、内削ぎの口唇部内面に櫛描波状文が施された土器は燕市長所館^(註12)から出土している。櫛描波状文は「珠洲焼後半期の特徴的な美術技法」で、「盛行するのは第Ⅲ期」と考えられているところから、A類は室町時代前期以降に比定される。口唇部内面に櫛描波状文が施されていないB類は普通的にみられるが、名立町沖合タラバの擂鉢形土器は底部内面に撻目が「米」印状に施され、本遺跡の擂鉢形土器に施された撻目の在り方とは異なる。本遺跡の撻目に近いものは釈迦堂遺跡や珠洲焼第Ⅳ期の石川県正院町遺跡出土の遺物中にある。正院町遺跡の土器は揚底で、底部が直立ぎみに立ち上り、B類の形態に類似している。口縁部が外方に折りまげられた壺形土器は小黒沢遺跡や永享3年(1431)銘の五輪塔下に埋置していた石川県明千寺遺跡^(註13)などからも出土しているが、本遺跡のものと類似するかについての言は持たない。本遺跡の甕形土器は口縁部の断面から3種類に分類されるが、口縁を外方へ折りまげて「コ」の字状を呈するものが多く、外面の叩目は条線状を呈し、平行あるいは右下に施されているものが圧倒的に多い。本県で出土している甕形土器の口縁部形態は各期を通じて本遺跡と同様まちまちで、本遺跡出土の甕形土器の年代を直接求めることは不可能である。

次に常滑系土器についてみると、本県で常滑系土器を焼いた窯として笹神村狼沢第1号窯跡^(註14)と權兵衛沢窯跡^(註15)の2基がある。両窯跡で焼かれた甕形土器は「N」字状に折り返された口縁を持ち、南北朝時代のものである。本遺跡の甕形土器の口縁は素縁で直立しており、笹神村の2

窯跡出土品と対比することはできない。本遺跡の瓔形土器の口縁部形態は水野古陶磁館蔵の室町時代末期の越前焼に類似しており、福井県朝倉館や県内の五十嵐館・上除館などから出土している。擂鉢形土器は口縁直下の体部内面に1条の沈線をめぐらし、底部から掘目を深く搔き上げており、天文21年(1552)上杉謙信によって造営され、天正7年(1579)御館の乱で廃城となった御館や文明3年(1471)から天正元年(1571)まで続いた朝倉館などの出土品に類似している。また、この摺目の状況は室町時代に比定されている福井県織田郷神社境内出土の越前焼に酷似している。のことから本遺跡の常滑系土器は16世紀後半の越前焼と考えられる。

(説明)

- 註1. 金子拓男「新潟県柏崎市上脇井川の経塚」越佐研究第22集 昭和40年
2. 川上貞雄「正安元年正在銘筒の出土」水原郡土誌料第5集 昭和48年
3. 中川成夫「十日町市小黒沢発見の正平在銘筒について」越佐研究第20集 昭和38年
4. 木間嘉晴・計良勝「栗島の考古」(『栗島』新潟県教育委員会) 昭和47年
5. 中川成夫他「水原郷の遺跡・遺物」(『水原郷』新潟県教育委員会) 昭和46年
6. 金子拓男「五十嵐小文治館発掘調査報告書」下田村教育委員会 昭和48年
7. 中村孝三郎「越後編文風土記の丘馬高丘陵」長岡科学博物館研究調査報告第13冊 昭和50年
8. 「御館跡緊急調査経過報告」新潟県教育委員会 昭和41年
9. 関 雅之他「西蒲原郡黒崎町秋迦堂遺跡調査報告」(『埋蔵文化財緊急調査報告書第1』新潟県教育委員会) 昭和48年
10. A 室岡博「頸城地方の海と海底・海浜遺跡」上越市立総合博物館教養叢書第1篇 昭和47年
B 伊藤信太郎・室岡博・金子拓男「名立タラバ発見の六個一组の珠洲焼」越佐研究第35集 昭和50年
11. 言10のAと同じ
12. 寺村光晴・久我勇「寺泊町のおいたち」昭和35年
13. 山本仁「燕市長所館址発掘報告」燕郷土史考第三集 昭和46年
14. 「普正寺」石川考古学研究会 昭和45年
15. 浜岡賢太郎他「蒸業一北陸一」日本の考古学・歴史時代上 昭和42年
16. 「北陸の古陶」図86 五島美術館 昭和42年、註14・15と同じ
17. 言14・15と同じ
18. 中川成夫他「新潟県北蒲原郡猿神村狼沢窯址群の調査」(『猿神村文化財調査報告4』猿神村教育委員会) 昭和48年
19. 中川成夫他「猿神村権兵衛窯址の調査」(『水原郷』新潟県教育委員会) 昭和46年
20. 沢田由治「常滑・越前」グラビア版68 陶磁大系第7巻 昭和48年
21. 「特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡Ⅲ」福井県教育委員会 昭和47年
22. 「北陸の古陶」図22 五島美術館 昭和42年

2. 遺構について

中世集落の考古学的な調査、研究は全国的にもほとんど未開拓で、わずかに草戸千軒町遺跡が計画的に調査が進められているにすぎない。しかし、これも中世の門前町であり、一般の農

村落にいたってはその調査例が極めて少ない。こうした中にあって集落内の建物配置の一部が知られているものとしては、平安期以後のものと考えられている安満遺跡と宮田遺跡があるにすぎない。安満遺跡では建物が10棟、井戸が29ヶ所、溝などの遺構が検出されている。^(註1)

本遺跡のA・B両地域に於ても溝とピットが検出されているが、明らかに柱穴と言われるものはB地域のP₈しかない。A地域のピットの分布は溝の周辺に濃密に存在しているが、中央部ではその分布が稀薄となる。更に溝周辺のピットはP₁～P₁₃、P₁₈～P₂₉、P₁₄～P₁₇・P₃₁～P₃₅、P₃₀・P₃₇～P₃₉・P₄₁～P₄₈の4つにグルーピングすることができる。これらのグループは柱穴とも考えられるが、ピットの方向・柱間などにも規則性がなく、独立柱の建物とは考えられない。また縫が列状に並ぶものでもない。A地域で確認された54個のピットのうち、内部底面から曲物・漆器・板・石・錢貨などの遺物が出土したものは9個を数える。ピット内から遺物が出土している事実は櫛原遺跡で検出された井戸を見てもわかる様に本遺跡の9個のピットも井戸と考えざるを得ない。板が2枚検出されたP₂₁の板は礎板とも考えられたが柱痕や摩滅痕は見られず、ピットの底面に板の角をたち落として埋置したものと考えられる。また底面から石を出したP₄₂・P₃₇の石は柱穴の根石としては貧弱で、この湿地帯の中では柱を支え切れないのである。A地域のP₂およびB地域の井戸の最下部からは曲物が出土しているが、いずれも底板を有してはいない。底面に石や木炭などを敷いた痕跡は2者ともに見出されない。県内で曲物が井筒として利用された例は長岡市藏王遺跡、西川町浦田遺跡がある。いずれも伴出遺物や上部の井桁構造は不明であるが、藏王遺跡の井戸筒は板1枚の幅1尺、長さ5・6尺を測るものと言われているところから直径47cmないしは55cmで、高さ30cmの曲物である。浦田遺跡の場合は曲物を数段重ねられていたということから曲物の累積井筒と考えられる。P₂およびB地区の井戸はこの累積井筒かとも考えられる。またP₁₆は地山井筒、自然石や木片を出土したP₂₄・P₃₇・P₄₂も井戸枠はないが井戸と推定される。P₂₁の板は井底に設備した「まなこ」的なもので、一種の濾過器的役割を果したものと考えられる。井筒内発見の遺物には①意識的に埋納したもの、②湧水濾過のために礫や木炭の間に土器片を充填するもの、③使用中に土器や他の器具等を落とし込んだもの、④井戸廃棄の際土砂とともに放棄したものなどがある。しかし、本遺跡のピット内出土遺物の大部分は細片となって単発的であるためにいずれの類に属するかは不明であるが、A地域のP₂・P₄₂は③に、P₂₁・P₂₄・P₃₇は①に該当するものと考えられる。なお、A地域のP₁は性格の異なるものである。また、溝とピットの相関関係や溝の性格は不明である。

(戸根与八郎)

註1. 『安満遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会(大阪府文化財調査概要1973-2) 昭和49年

2. 『櫛原』奈良県教育委員会 昭和36年

3. 山本博『井戸の研究』昭和45年

4. 上原甲子郎氏御教示

3. 杉之森遺跡の性格

新潟県における古代から中世にかけての遺跡数は約2,300を数え、その分布は全県にわたっている。遺跡の種別から見てみると城館跡・墳墓・経塚・寺院跡・遺物包含地などに分けられる。このうち古くから調査されているものは主に城館跡・墳墓・経塚などで、平野部の遺物包含地の調査・報告例は近年の諸開発事業に伴ってなされるケースが多くなってきていている。平野部の遺跡の大半は古代から中世にかけるもので、縄文から古墳時代のものは極めて少ない。遺物の出土状況も他時代の遺物と混在し、同一個体がまとまって出土することは稀で、個々の破片が単発で包含された状況で出土する傾向が多い。これは数度にわたる耕地整理などで土砂の移動がなされた事に帰因するものと考えられるが、平野部で遺跡と言われているものにも種々のタイプがあるものと考えられる。本遺跡でも古墳時代・平安時代・室町時代の遺物が混在し、同一個体がまとまっては出土せず平野部における遺跡のあり方を如実に示していると言える。

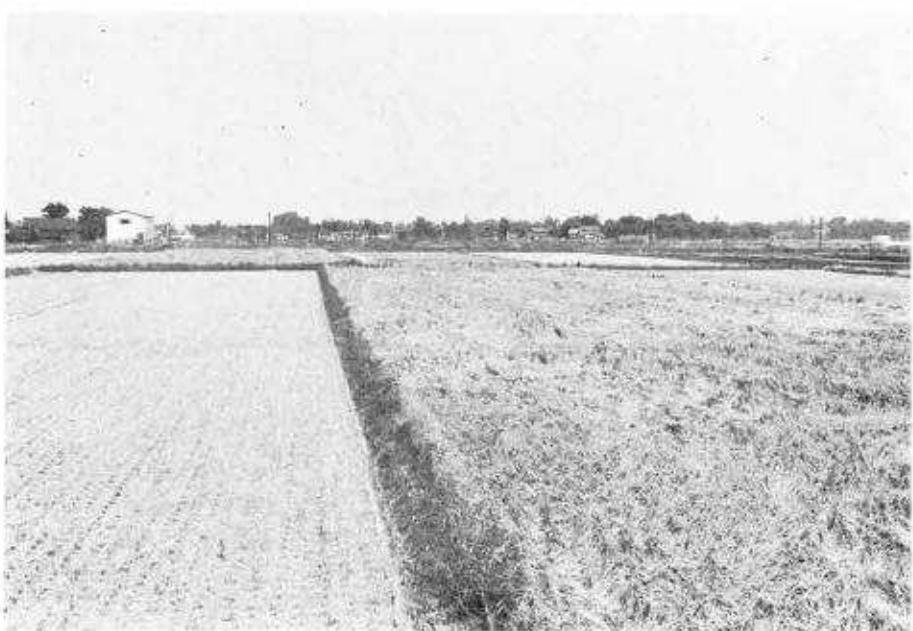
本遺跡ではピット群・井戸・溝などの遺構とそれに伴うと考えられる陶質土器（珠洲系・常滑系）・天目・土御賀土器・船載磁器などの土器類と木製品・錢貨などが出土している。土器類の大半は生活什器であり、その年代は室町時代中頃～後半に比定される。出土遺物は城館跡・寺院跡などから出土するものと大差がなく、遺構面からは県内の平野部における中世遺跡の発掘調査がないために類例がなく、本遺跡の性格を一概には論じられない。遺構は南側に沼湖をひかえた位置に所在し、ピット群は3本の溝に接近して検出されているが、それぞれグルーピングされる。ピット群にはまとまりがなく建築物の柱穴としては問題を残すが、曲物や木製椀などが出土したピットは井戸と考えられ、中世の生活跡と考えた方がより妥当であろう。更に、井戸が近接して存在しているという事実は、本遺跡が特殊な性格を有するものか、集落の中で特殊な部分を占めるものかいずれかであろうが、限定された範囲内の調査のためその性格を明らかにすることはできなかった。また、出土遺物からは一般庶民の集落跡とは考えられず、寺院跡ないしは城館跡かとも考えられる。しかし、後者を全面的に否定する根拠もない。

本遺跡の位置する中之島村をとりまく歴史的景観を考えると、直江兼続が出雲田庄・大槻庄保内の換地のために上杉氏の家臣上松弥兵衛・甘粕近江守を奉行と定め、それに従う役人の数と職務分担を示した永禄4年6月11日の直江兼続黒印状（越佐史料稿本）に蒲原郡出雲田庄村数として、中野村・傍所村・中之島村・大口村・中条村などの村名が15ヶ村記載されている。現在は往古の庄園の四至を示す様な資料は未確認であるが、この村名は出雲田庄の庄域をある程度推測させてくれるものである。また、萩原龍夫著の『中世祭祀組織の研究』所収の「補論伊勢信仰の発展と祭祀組織」の永禄3年10月の信濃守充秀に「越後・米山より奥之分」として「高畠・杉の森・中の島・野口」などの地名が記載されている。このように考えると、本遺跡は出雲田庄に属し、杉之森周辺の名主層を中心とする集落の一部と推定される。（戸根与八郎）

表1. ピット計測値一覧(単位mm)

ピット番号	長径	短径	深度	備考	ピット番号	長径	短径	深度	備考
	A地域				38	0.60	0.50	0.27	
1	2.45	2.35	1.20	土師・珠洲・漆器	39	0.90	0.68	0.34	
2	0.85	0.80	0.79	曲物・漆器・杭	40	0.42	0.40	0.25	
3	0.35	0.35	0.23		41	0.55	0.55	0.54	
4	0.35	0.35	0.35		42	0.63	0.55	0.36	珠洲・木片
5	0.60	0.50	0.62		43	0.80	0.80	0.58	土師・常滑・鐵質
6	0.75	0.75	0.71		44	0.38	0.35	0.24	
7	0.20	0.20	0.10		45	0.73	0.53	0.61	
8	0.20	0.15	0.21		46	1.03	0.82	0.43	
9	0.30	0.30	0.23		47	0.65	0.65	0.44	曲物
10	0.18	0.15	0.13		48	0.40	0.40	0.15	
11	0.30	0.30	0.20		49	0.22	0.20	0.35	
12	0.23	0.18	0.09		50	0.44	0.40	0.20	土師
13	0.66	0.60	0.37		51	0.21	0.20	0.18	
14	0.65	0.60	0.83	方形	52	0.71	0.70	0.57	土師
15	0.75	0.75	0.70		53	0.20	0.20	0.18	
16	0.95	0.95	1.68		54	0.25	0.25	0.14	
17	0.65	0.63	0.70			B地域			
18	0.36	0.35	0.39		1	0.80	0.75	0.37	珠洲
19	0.20	0.18	0.16		2	1.10	1.00	0.41	
20	0.30	0.20	0.34		3	0.70		0.21	重複
21	1.63	1.00	0.83	板	4	0.70	0.55	0.18	
22	0.25	0.25	0.41		5	0.20	0.20	0.05	
23	0.43	0.40	0.08		6	0.45	0.45	0.21	二重ピット
24	0.70	0.67	0.67	土師・珠洲・石	7	0.63	0.60	0.29	土師
25	0.90	0.76	0.68		8	0.30	0.20		
26	0.25	0.25	0.18		9	0.55	0.55	0.35	
27	0.15	0.15	0.10		10	0.90	0.80	0.41	土師
28	0.20	0.18	0.14		11	0.65	0.57	0.49	重複・方形
29	0.80	0.60	0.32		12	0.95	0.75	0.53	一部欠
30	0.75	0.65	0.67	方形(一部欠)	13	0.75	0.73	0.51	重複
31	0.25	0.25	0.28		14	0.23	0.20	0.12	
32	0.20	0.20	0.24		15	0.73	0.63	0.50	方形・土師
33	0.40	0.40	0.31	二重ピット	16	0.75	0.65	0.36	土師
34	1.87	1.48	0.31	不整形	17	1.45	1.35	0.38	
35	0.96	0.70	0.56						
36	0.15	0.12	0.16						
37	0.70	0.70	0.56	石					

註 土師は「土師器」の、珠洲は「珠洲系土器」の、常滑は「常滑系土器」の略である。



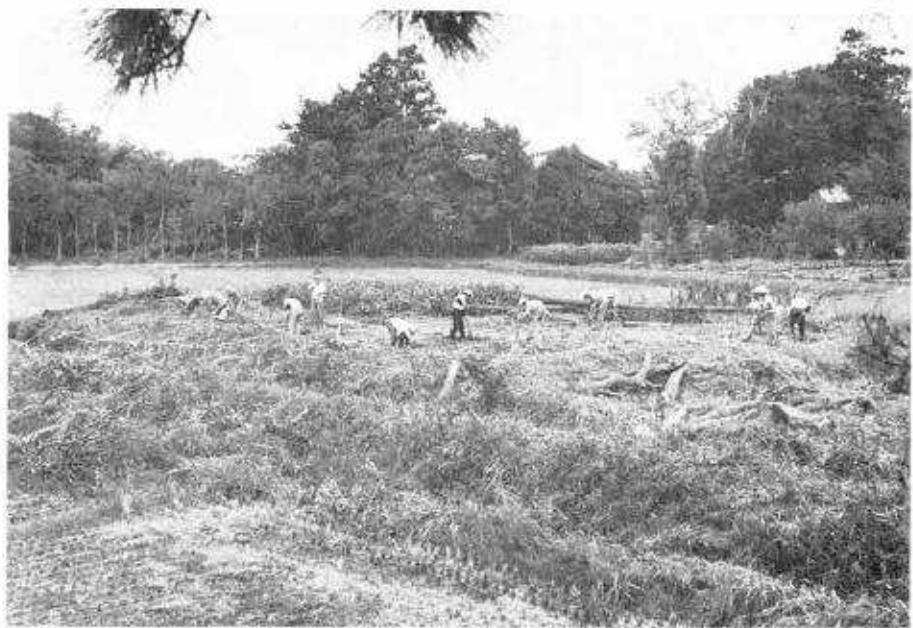
焼屋敷遺跡の遠景（南東側より）



焼屋敷遺跡の近景（南側より）



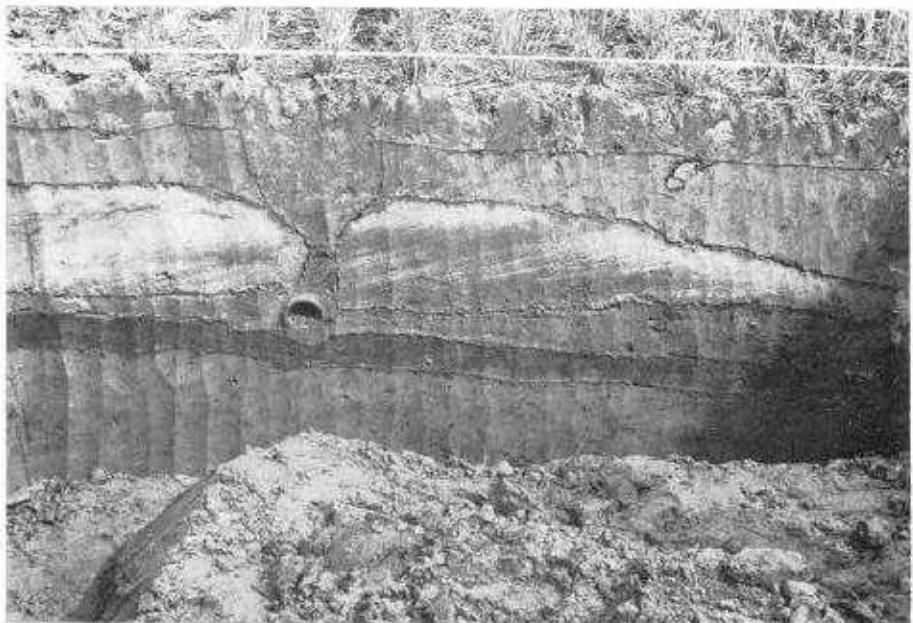
発掘風景



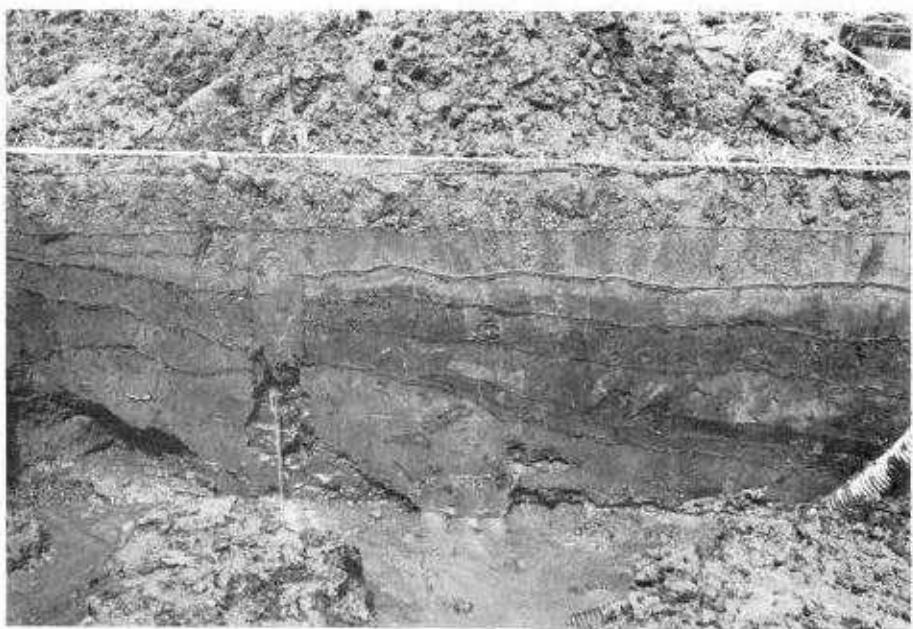
発掘風景



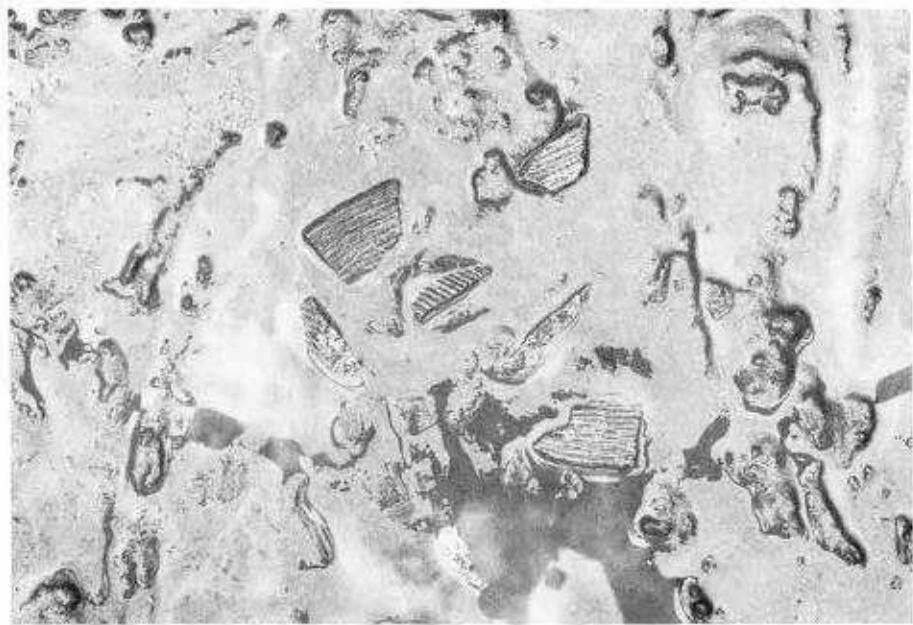
86F北グリッド土層断面



90B北グリッド土層断面



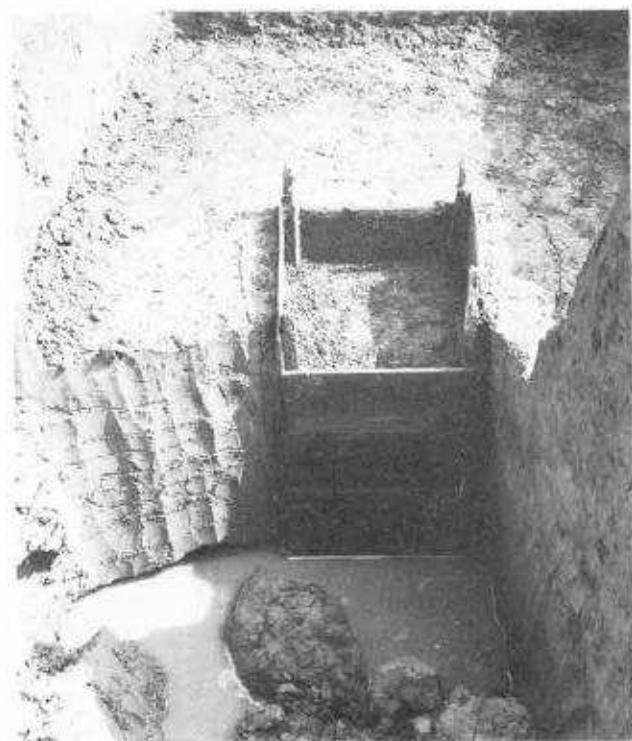
78B北グリッド土層断面



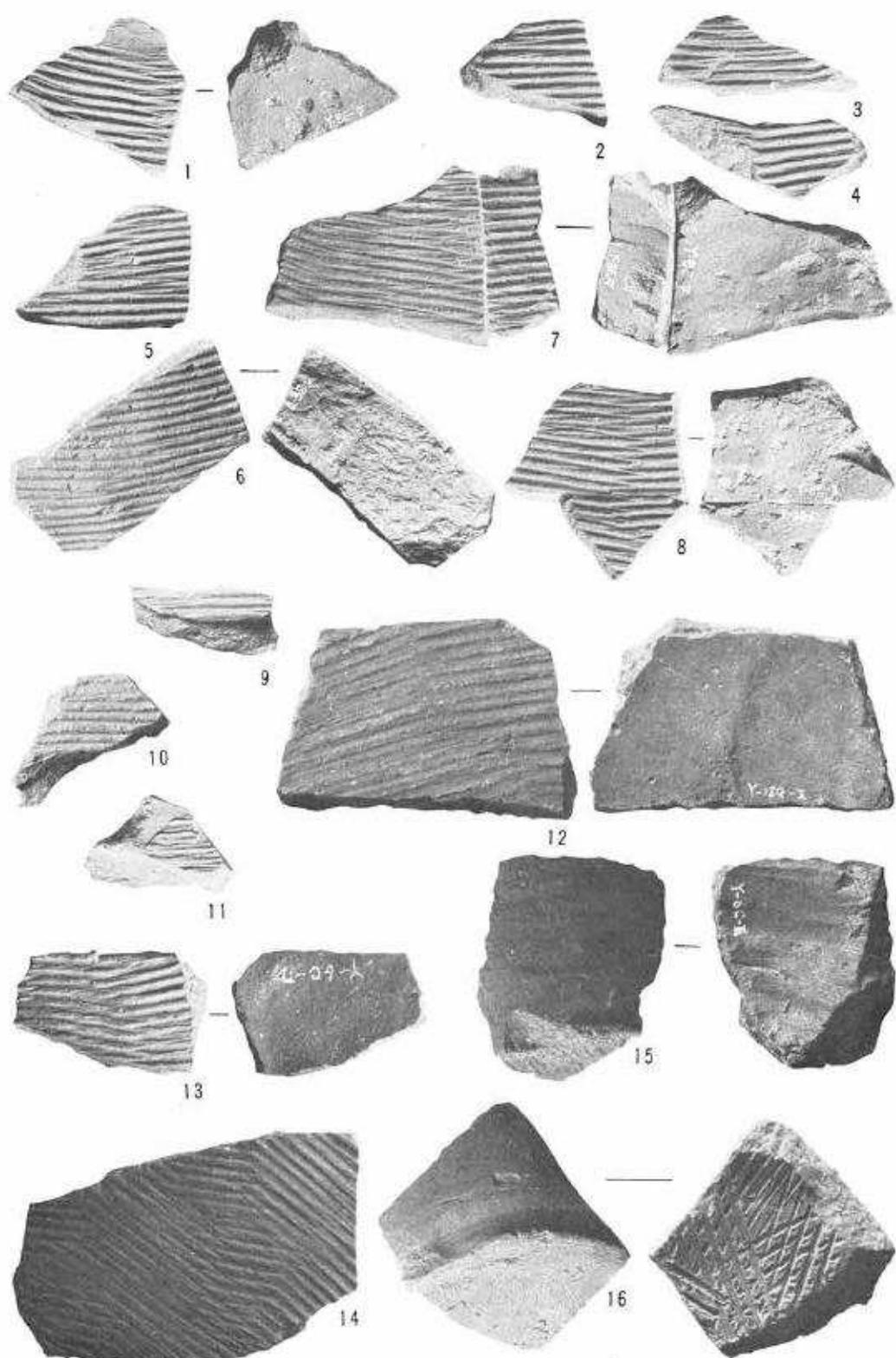
中世陶質土器出土状態



井 戸

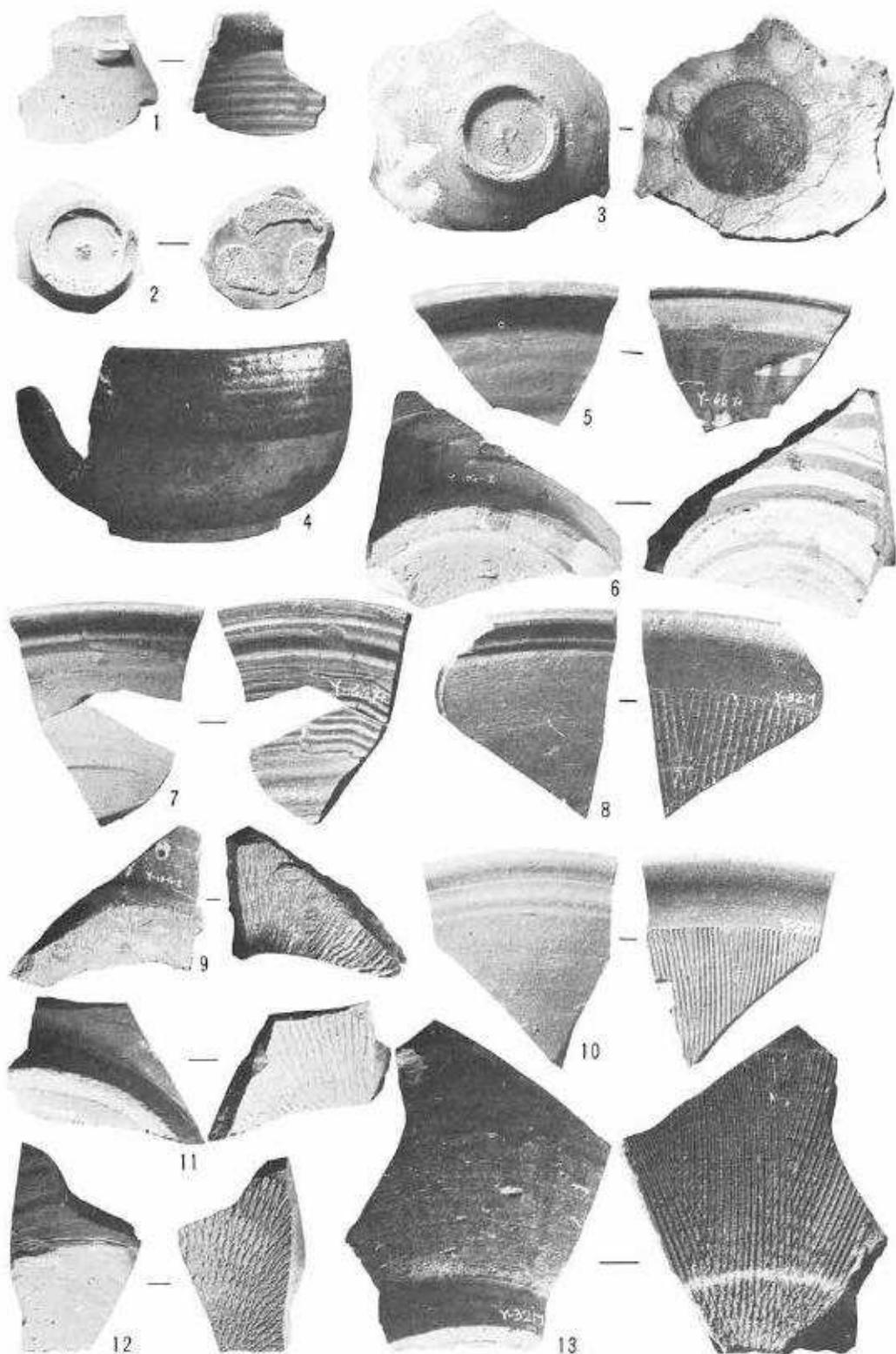


井戸の断面

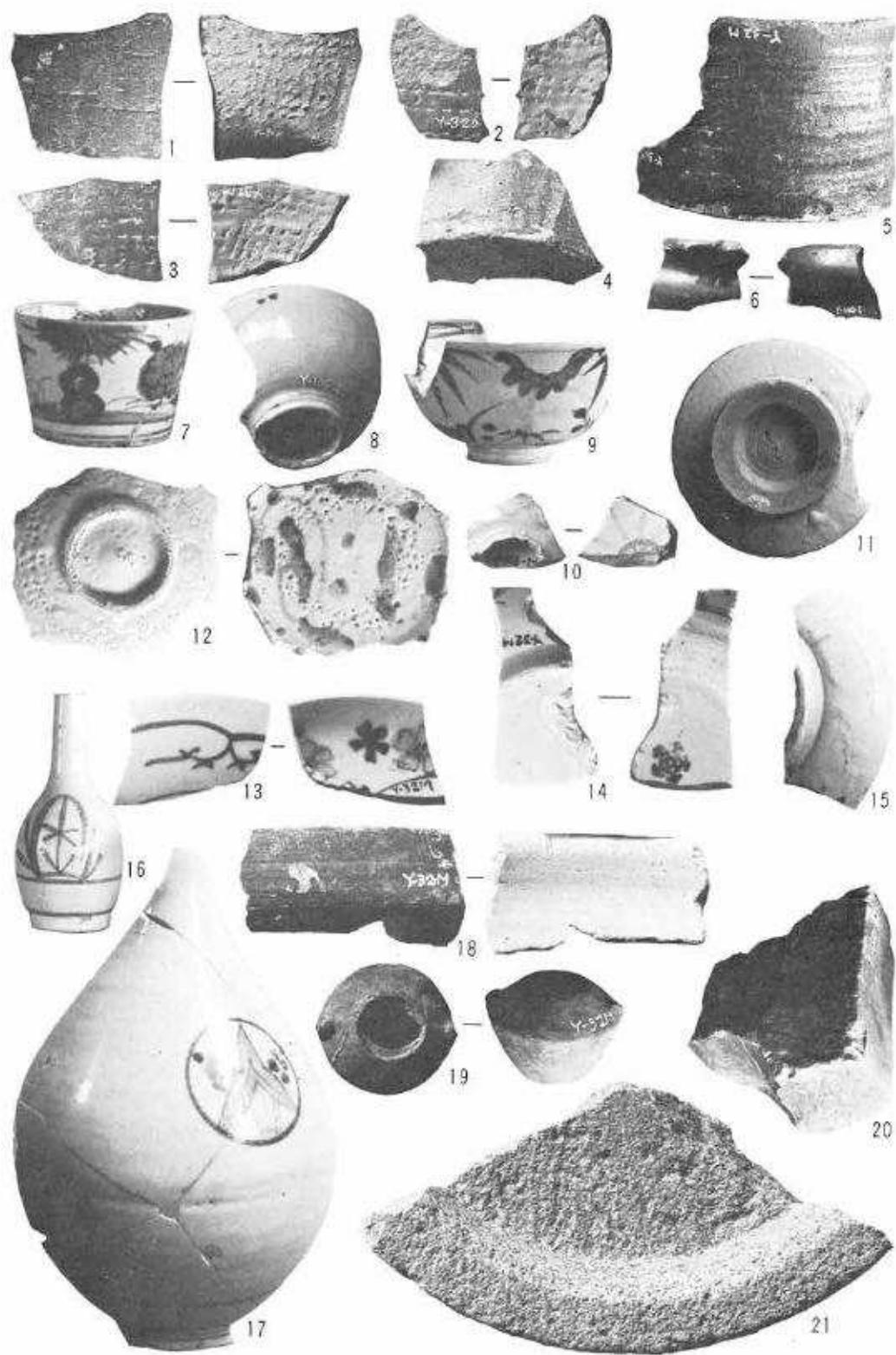


中世陶質土器 (6)

図版第7図



近・現代陶器 (3)



近・現代陶磁器・石製品 (3)



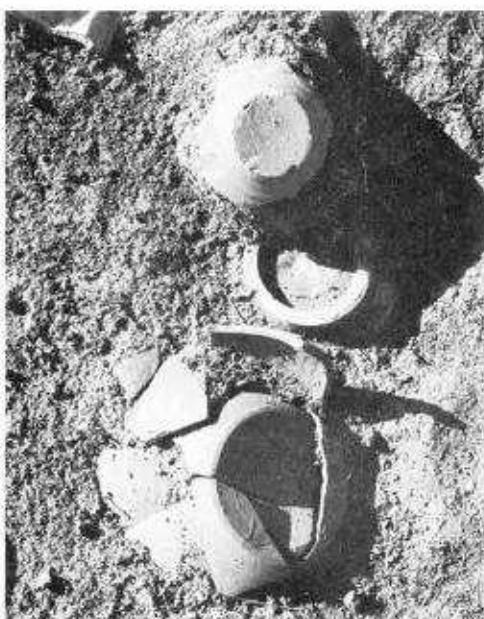
近世墳墓近景(西側より)



近世墳墓近景(南西側より)



骨藏器出土状態



鉢・1号甌・2号甌出土状態



3号甌出土状態



植木鉢出土状態



骨蔵器出土状態断面



骨蔵器除去平面



1



2



3



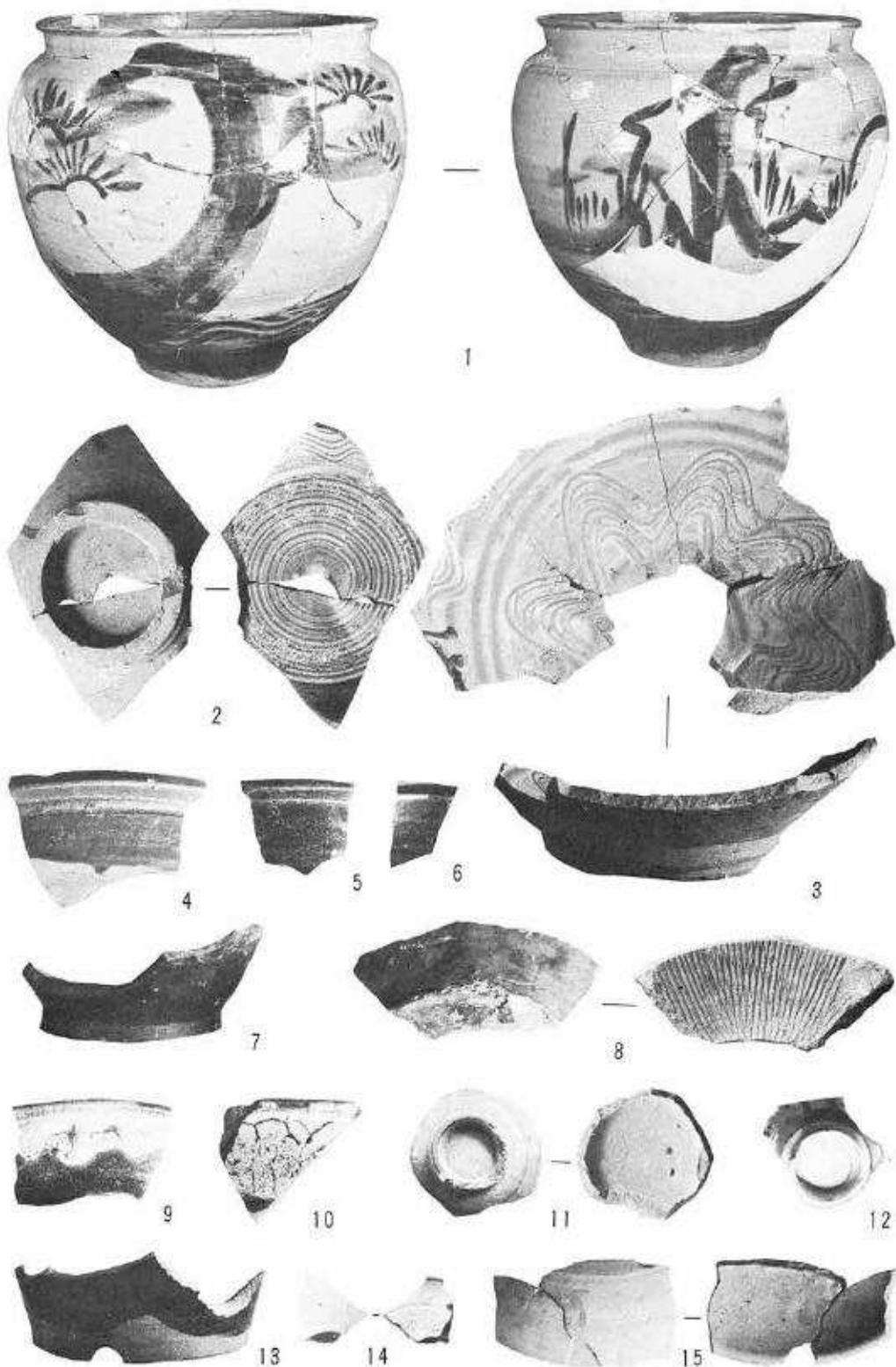
4



5



6



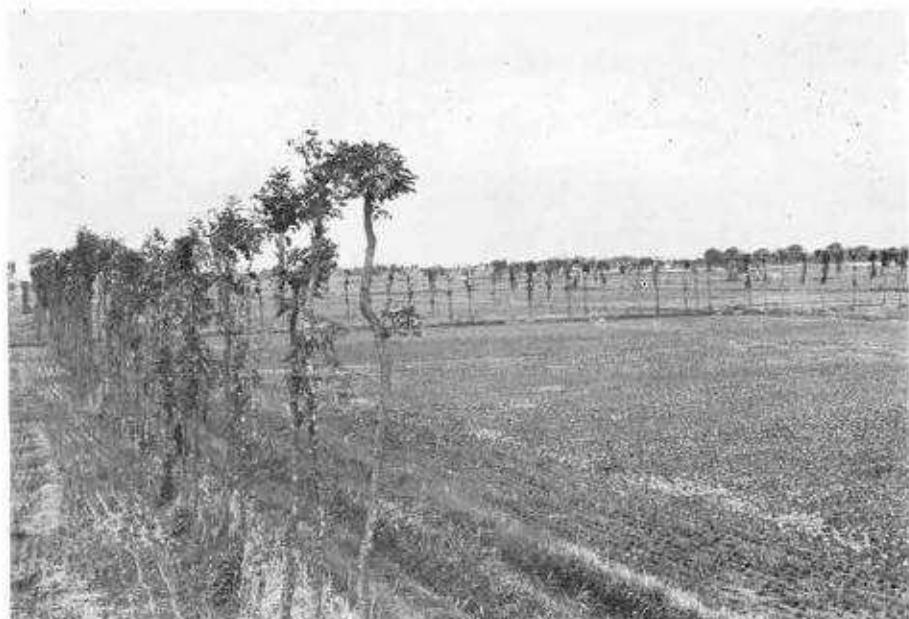
骨蔵器甕・鉢・摺鉢・碗・植木鉢・蓋 (14)



杉之森遺跡周辺の航空写真
(国土地理院 1965年10月5日撮影 空中写真)



遺跡の近景(北側から)



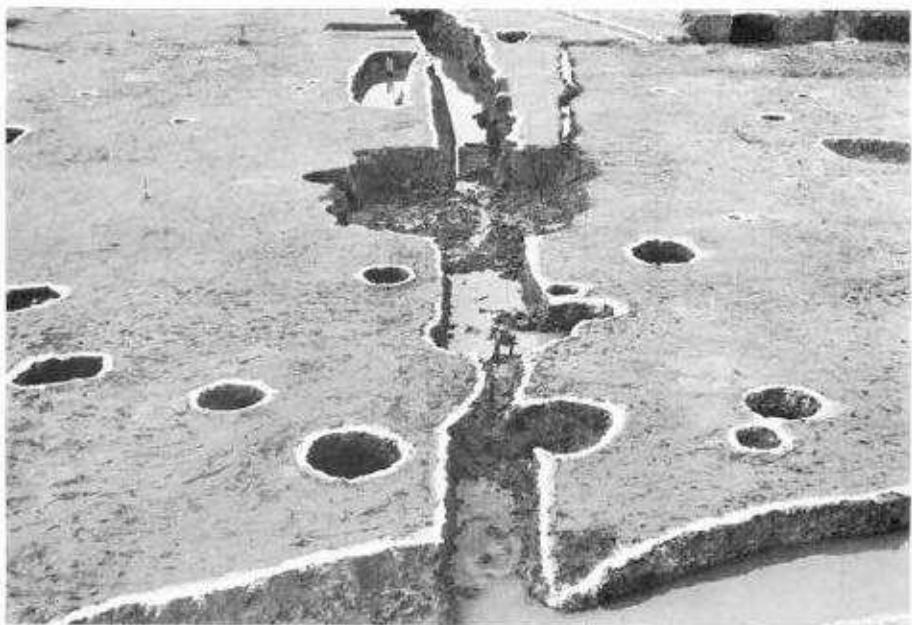
遺跡の近景(南側から)



89 K グリッド断面



120 H グリッド断面



A 地域遺構群 (4~6号溝・ビット)



遺構群(1号溝・ピット)



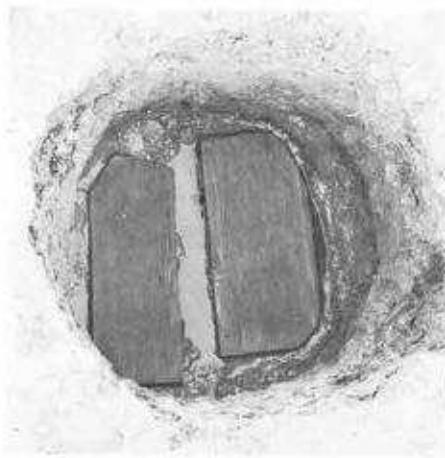
遺構群(3・4号溝)



P₂



P₂



P₂₁

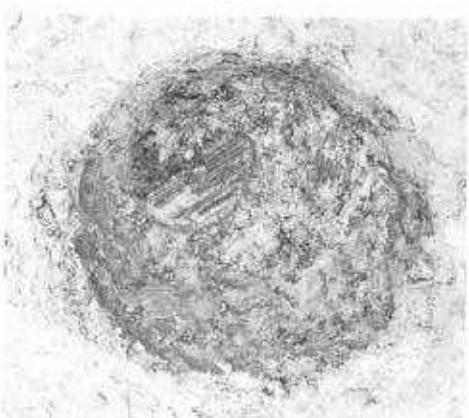


P₂₄



P₂₄

ビット各種



P₄₇



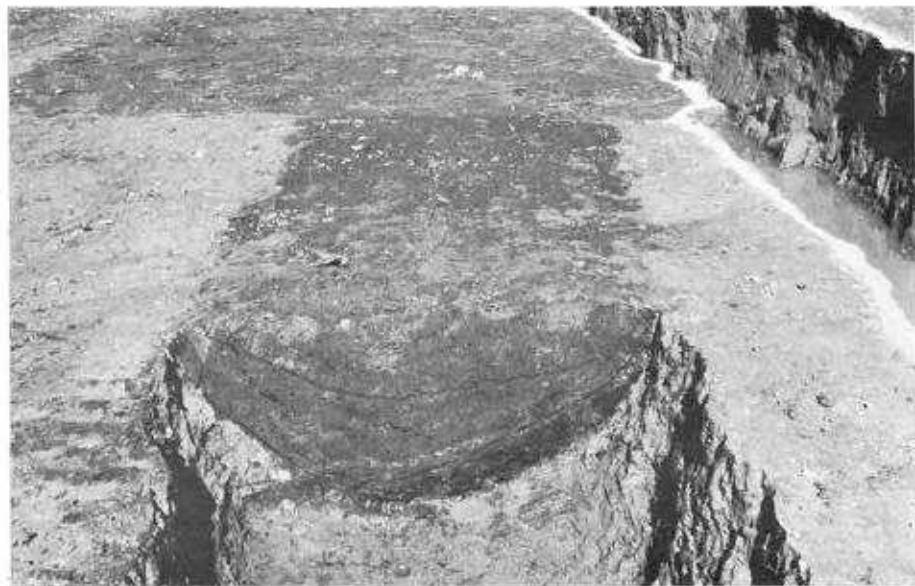
2号ピット断面



16号ピット断面



4号溝断面



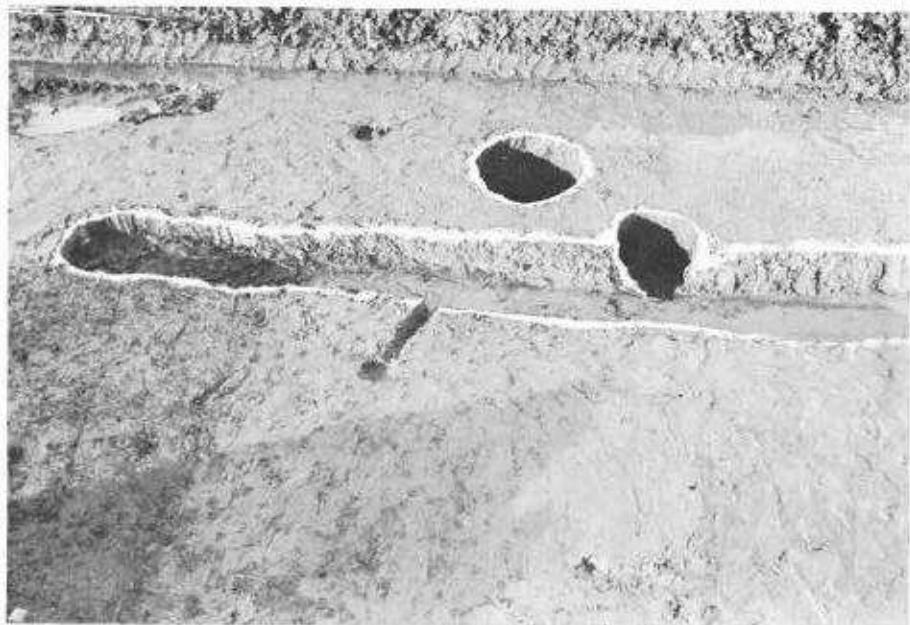
5号溝断面



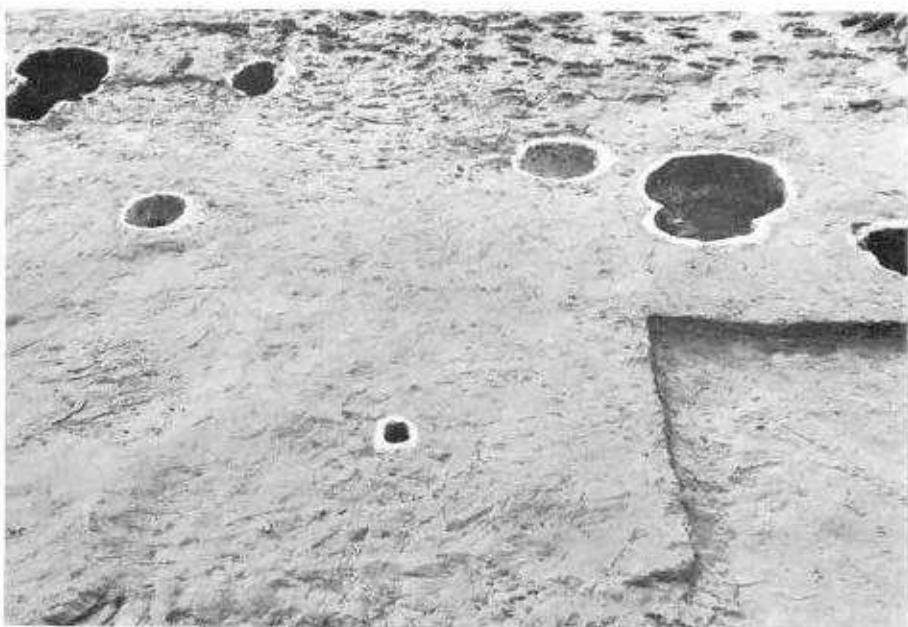
B 地域遺構群(東側から)



B 地域遺構群(西側から)



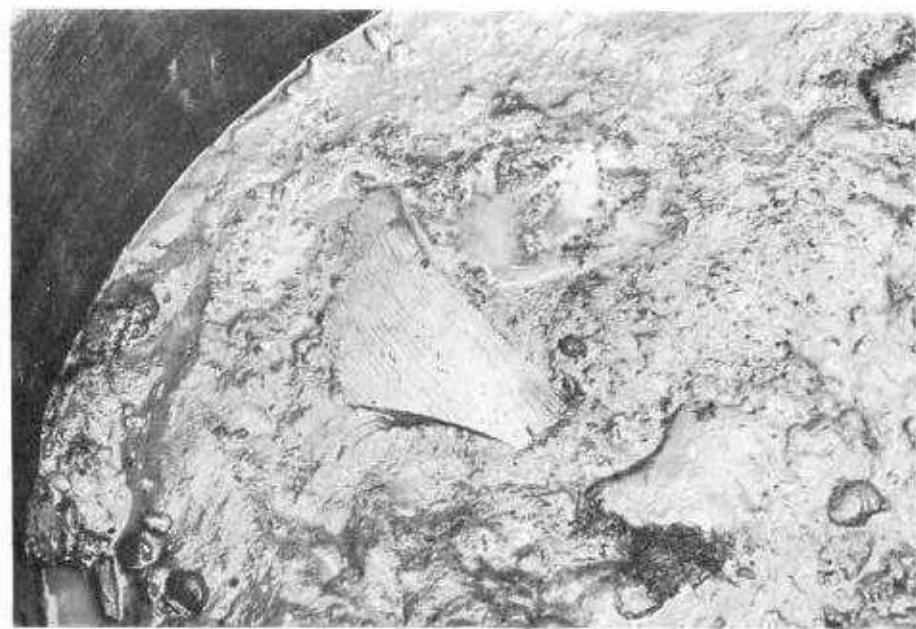
遺構群（1号溝・ピット）



遺構群（ピット）



井戸枠出土状態



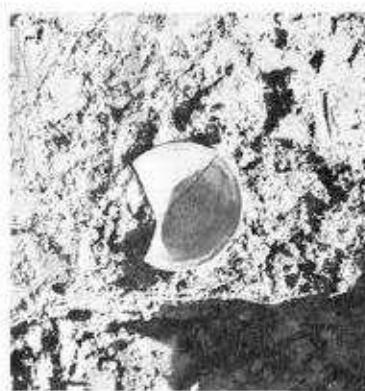
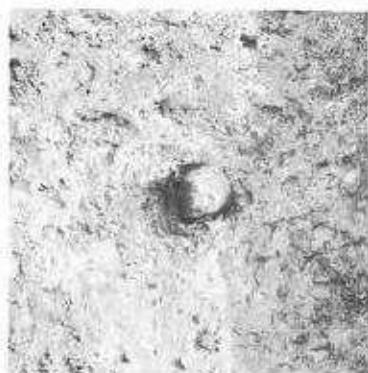
井戸内部珠洲系土器出土状態



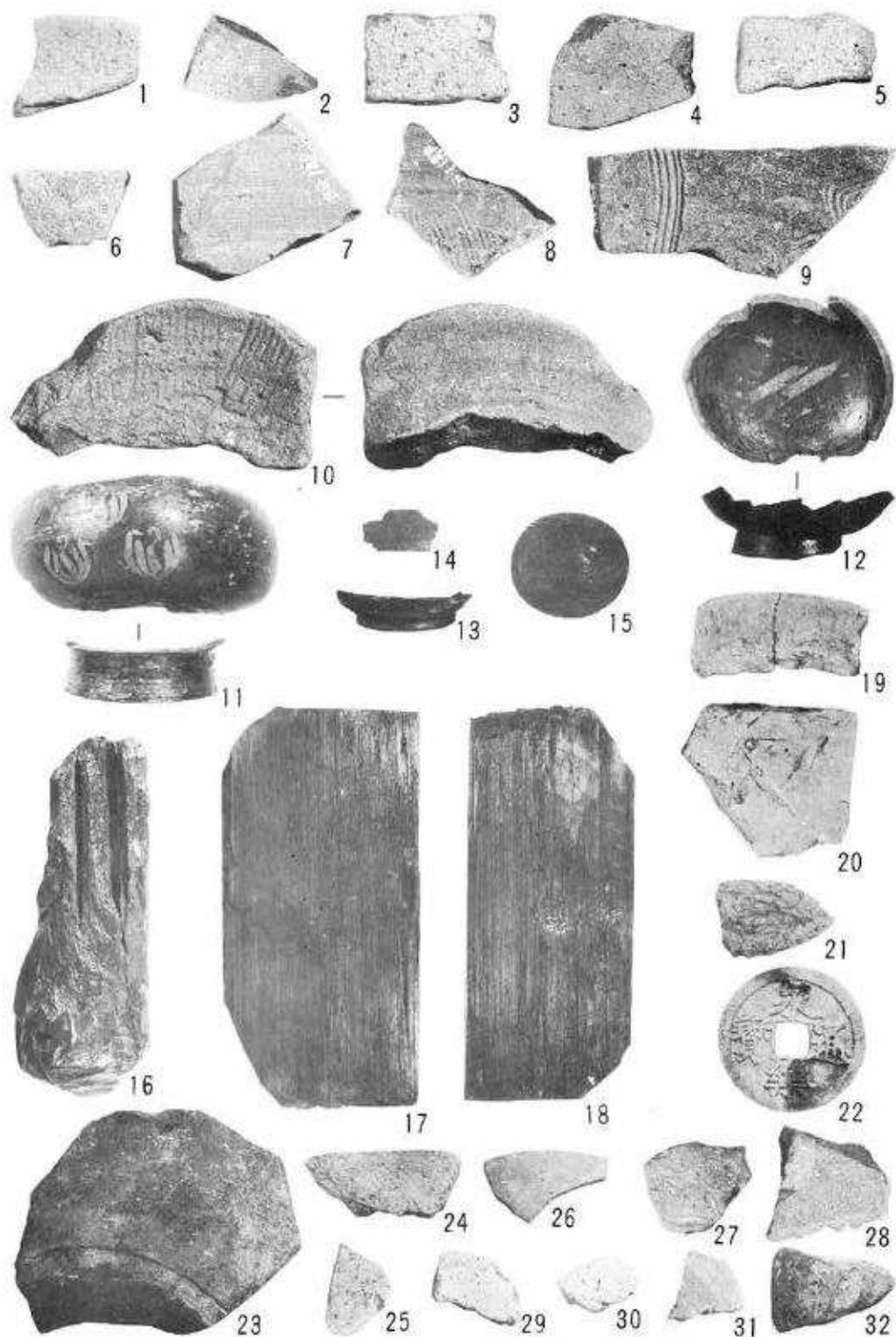
2号溝



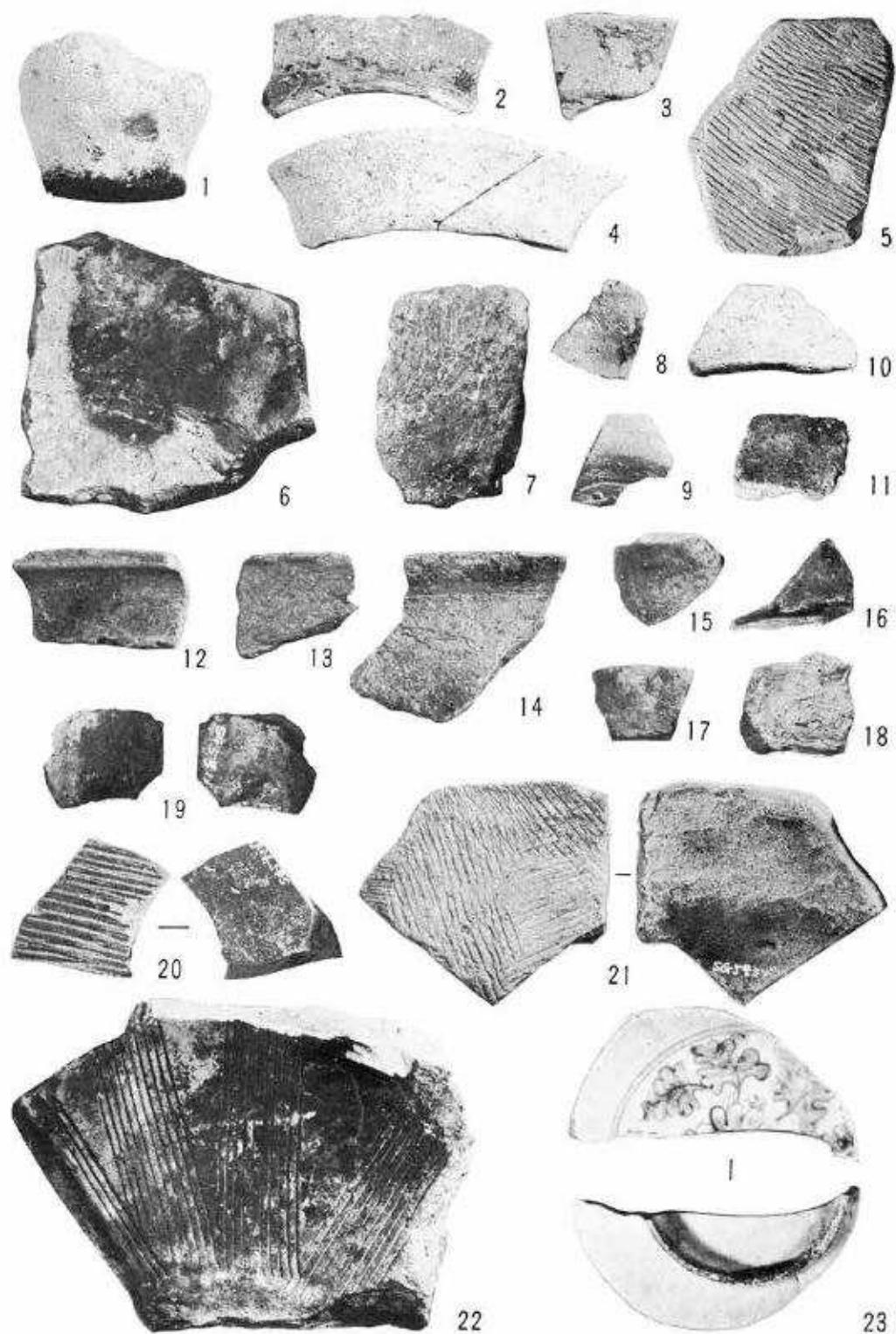
2号溝内曲物出土状態



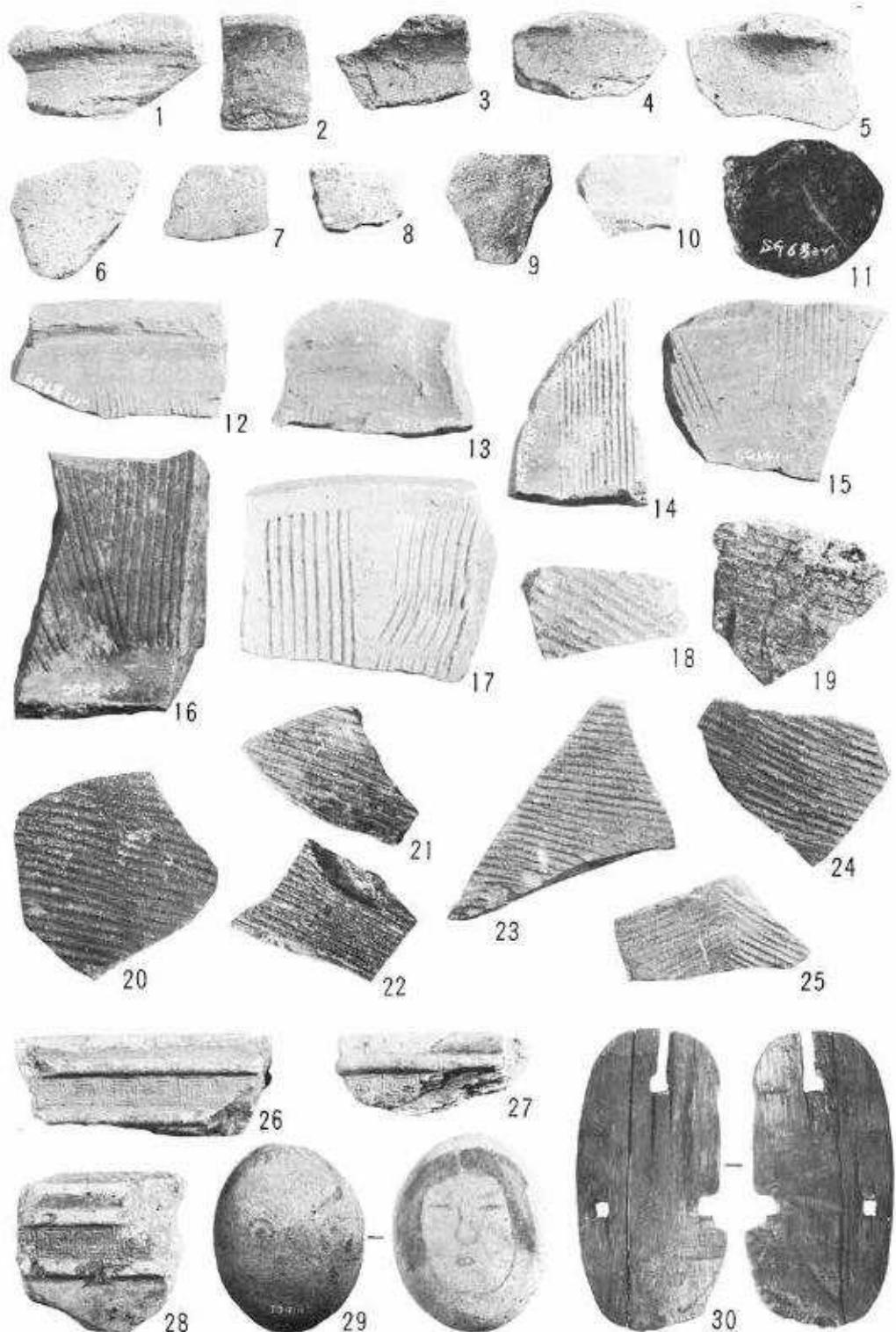
遺物出土状態（土器・珠洲系土器・土師質土器・下駄）



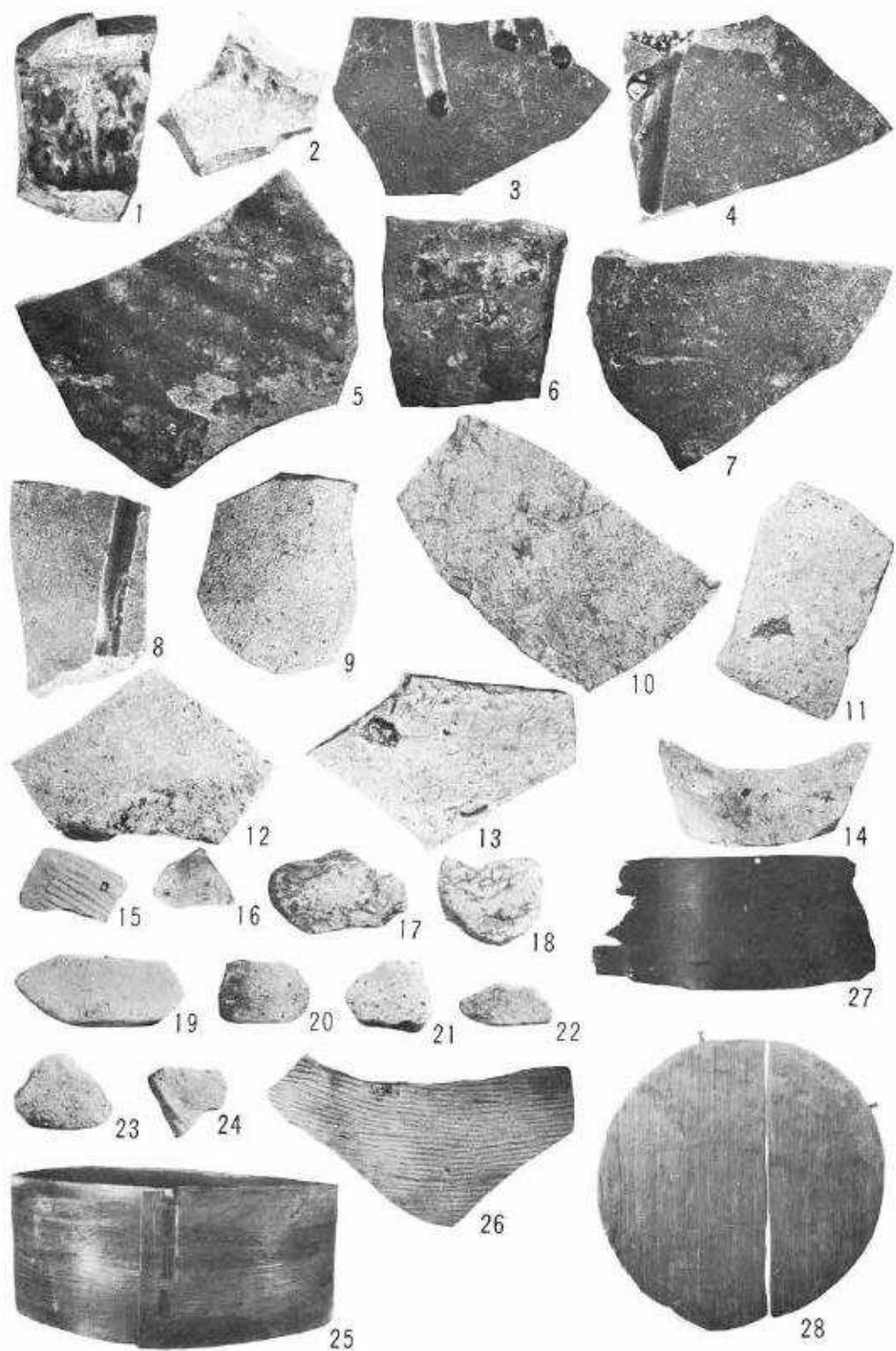
A地域ピット内出土遺物



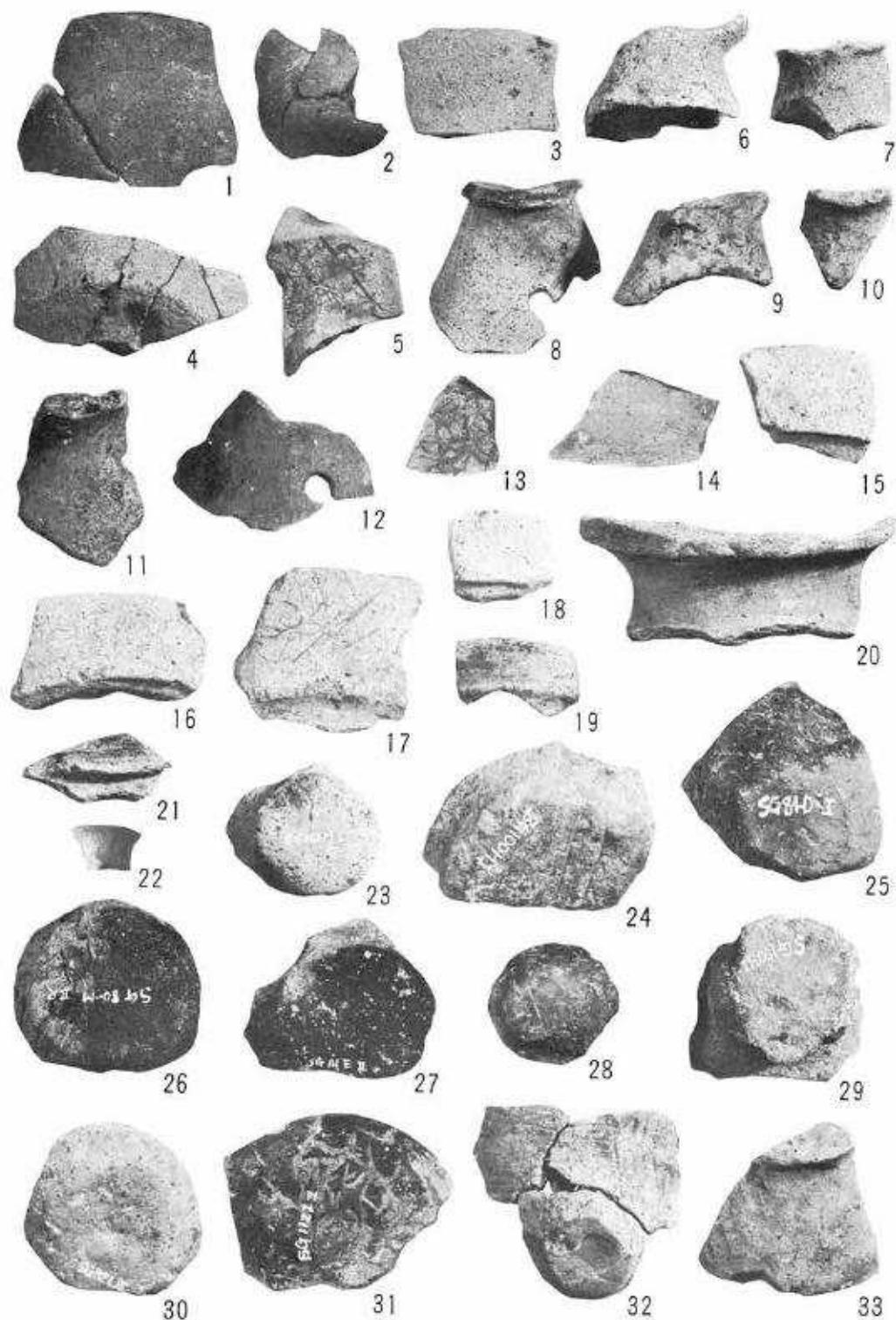
A地域溝内出土遺物（1～5号）



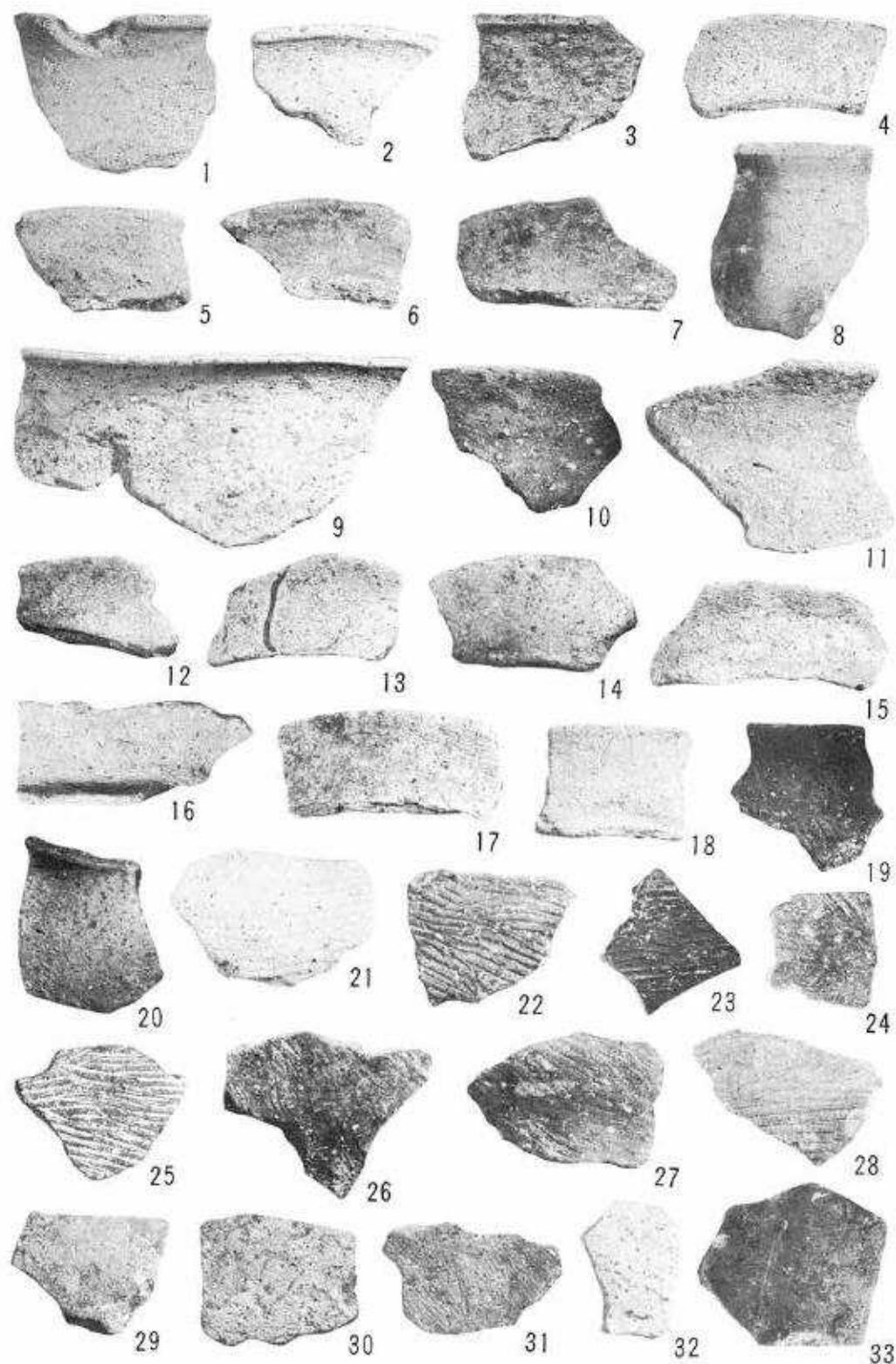
A-地域溝内出土遺物(6号)



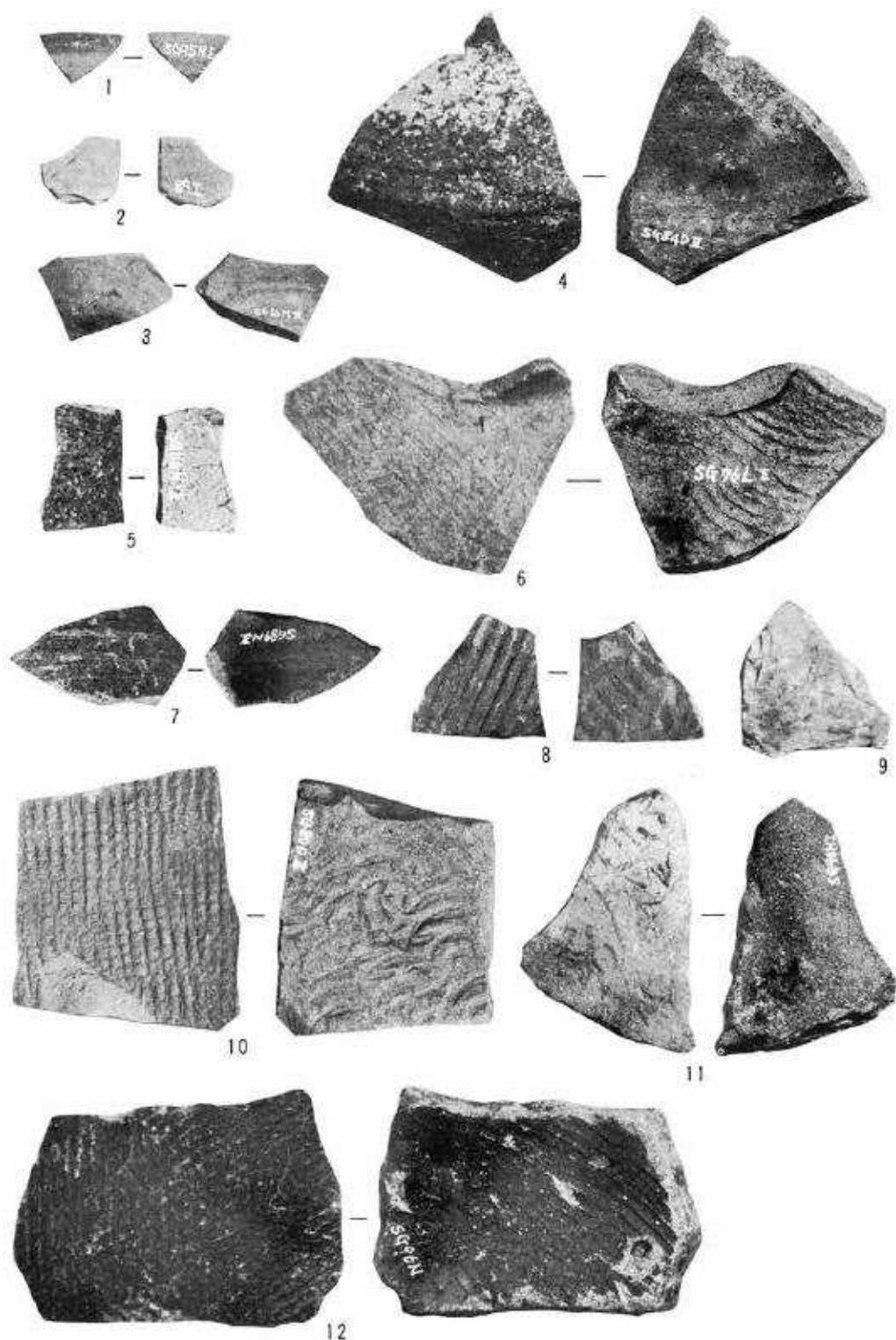
A地域溝内出土遺物（6号）・B地域遺構内出土遺物



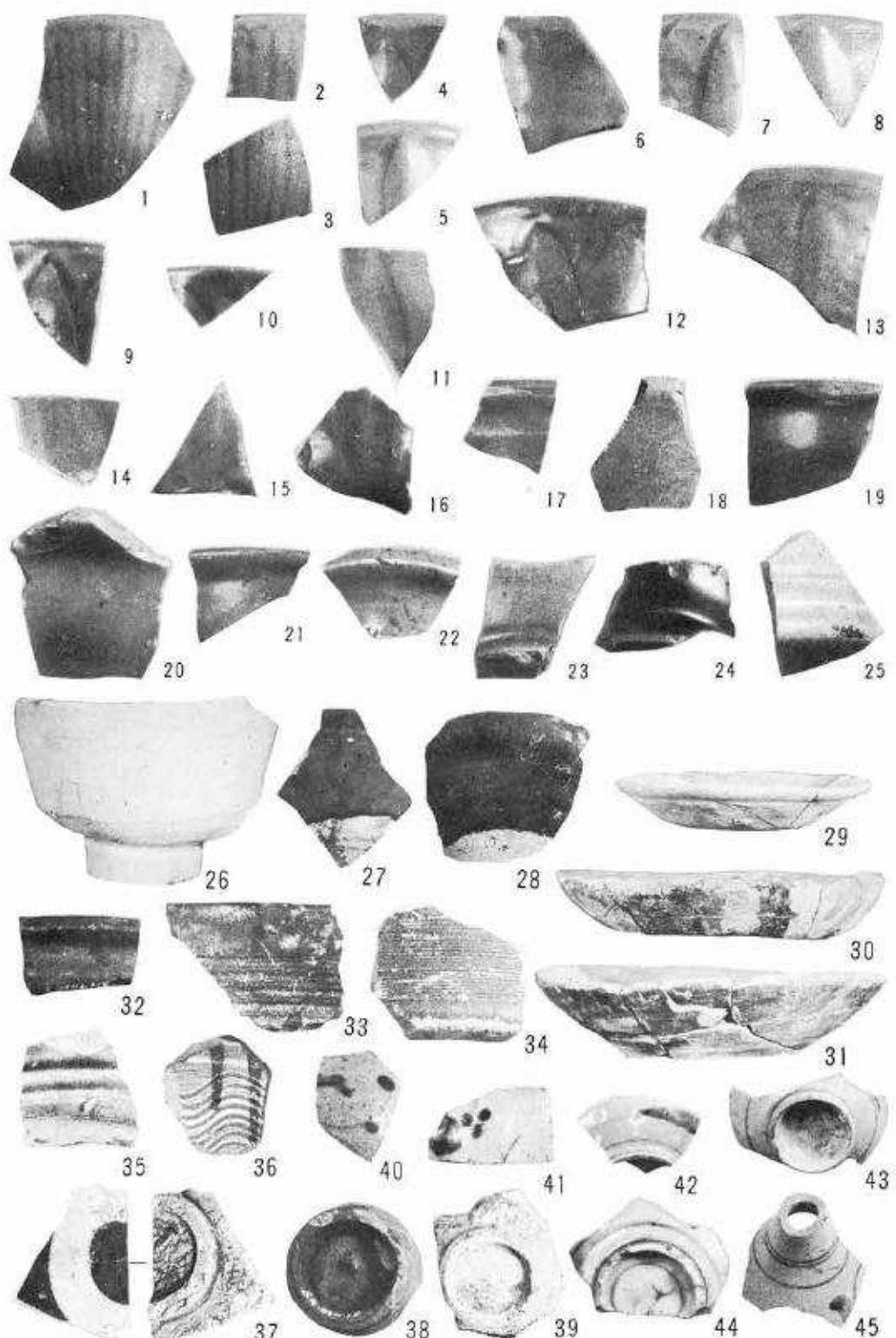
土師器（盤・高杯・器台・壺・蓋・底部）



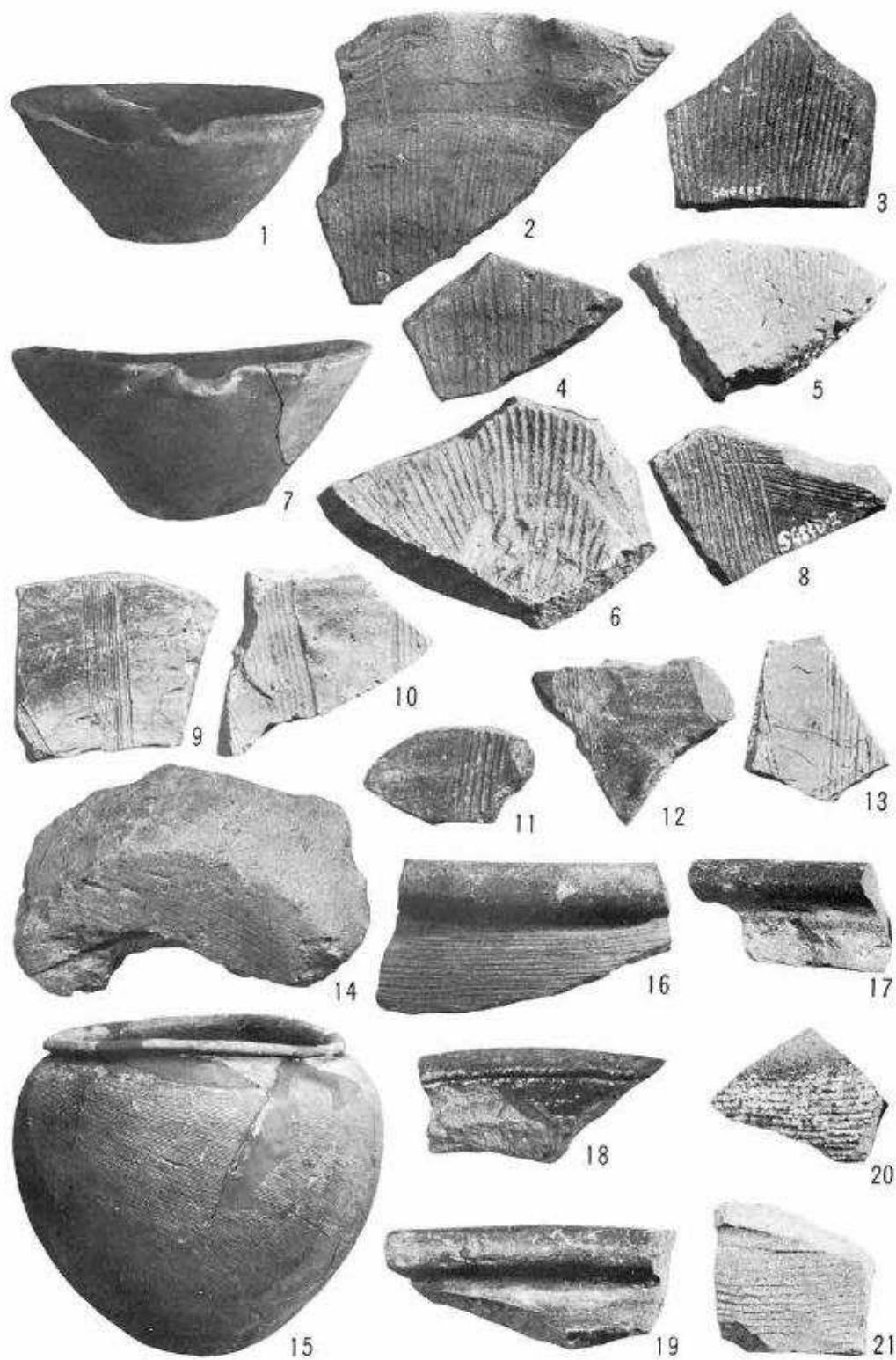
土 爵 器(甌・胴部破片)



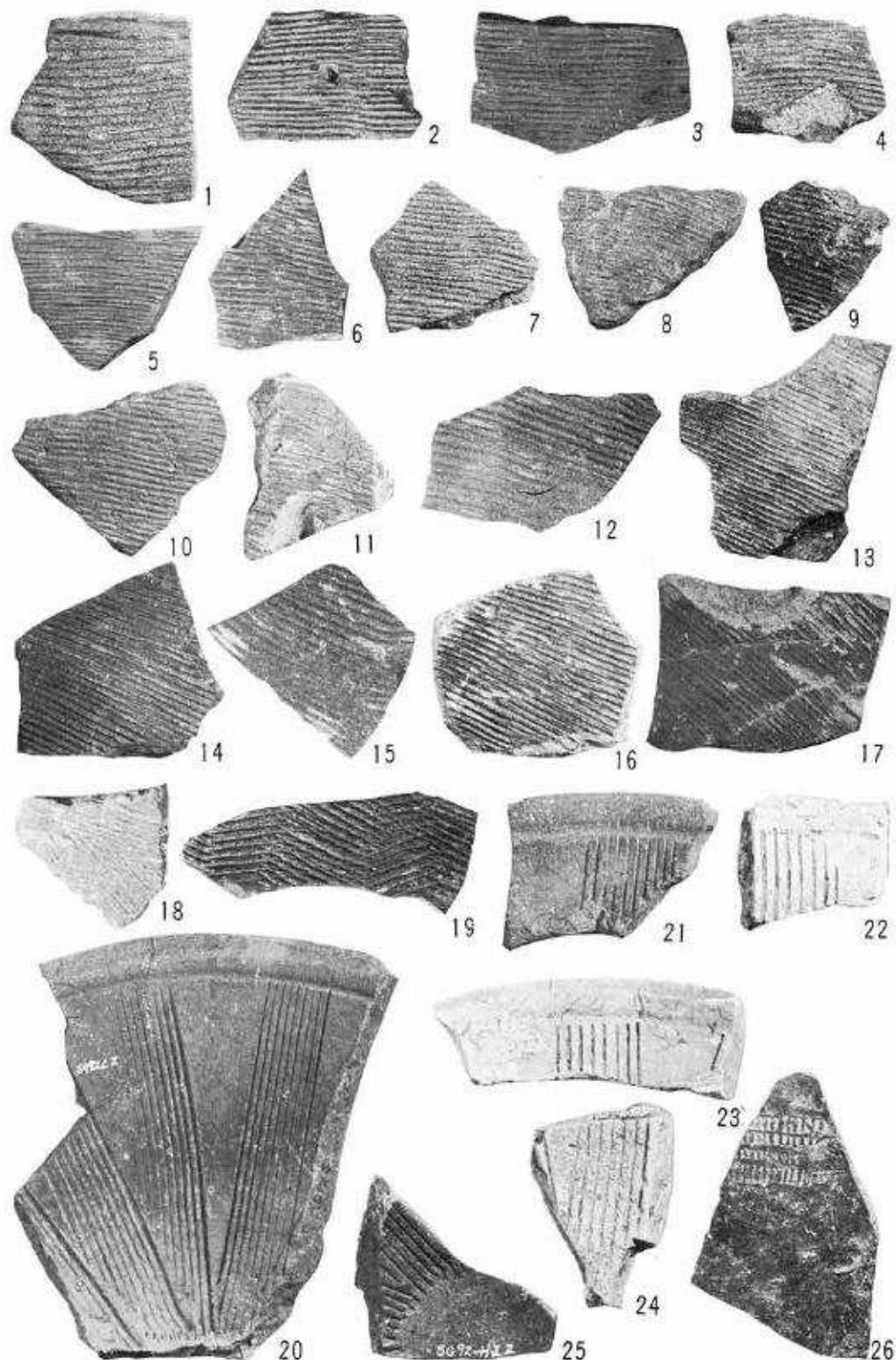
須 恵 器 (壺・壺・甕)



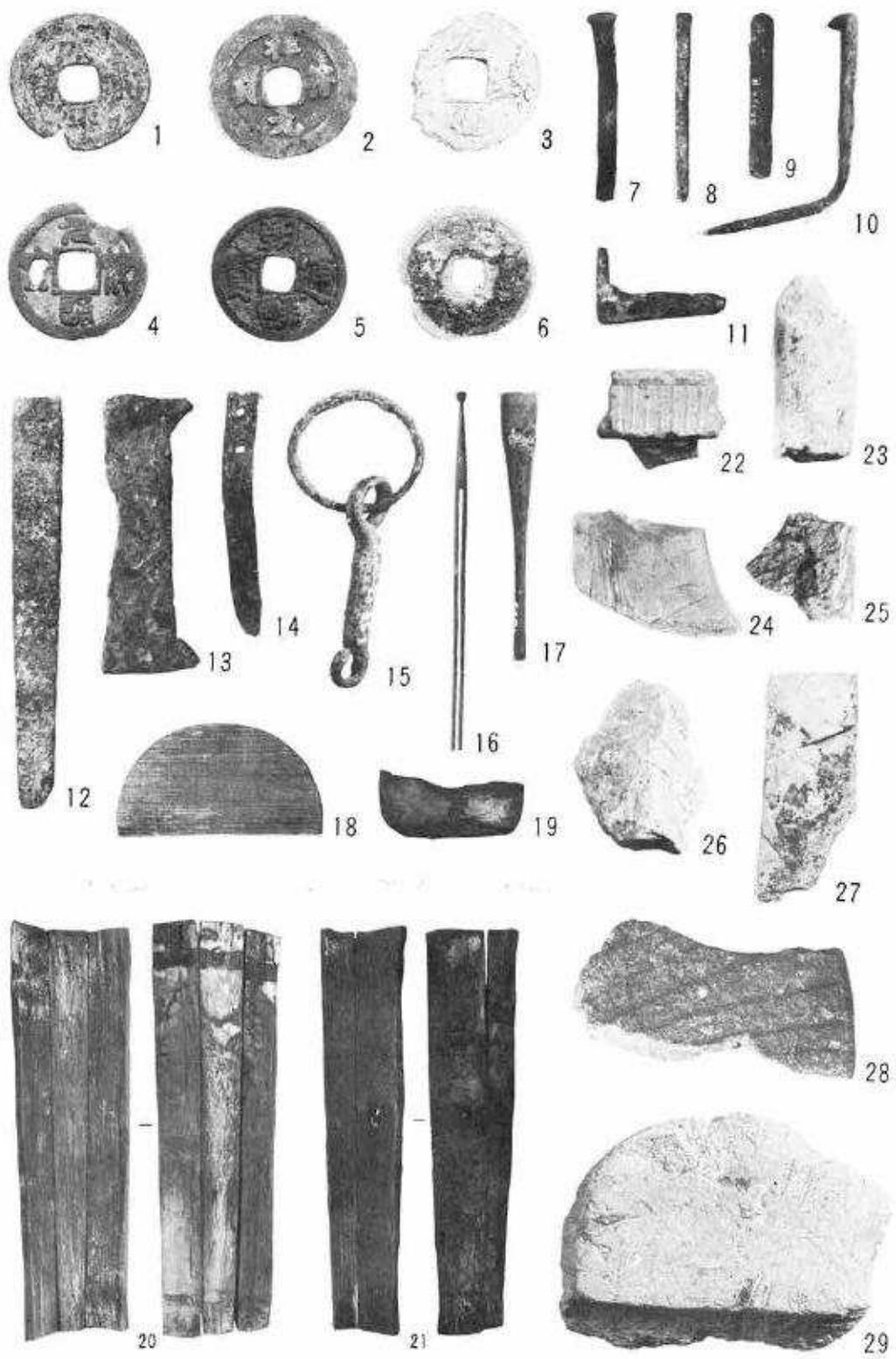
組載磁器・陶器・土師質土器・近現代陶磁器



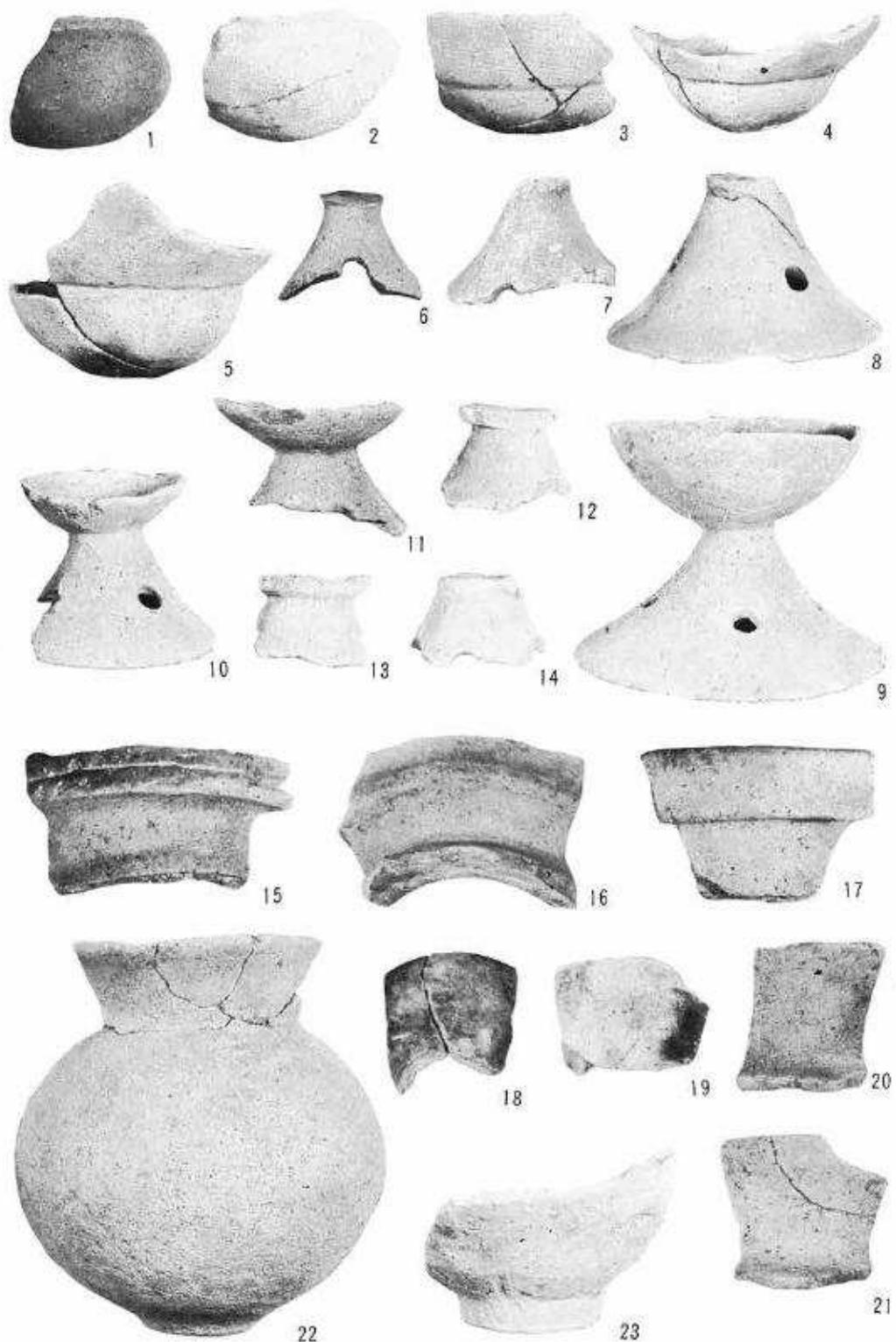
中世陶質土器(擂鉢・壺)



中世陶質土器(壺・指鉢)



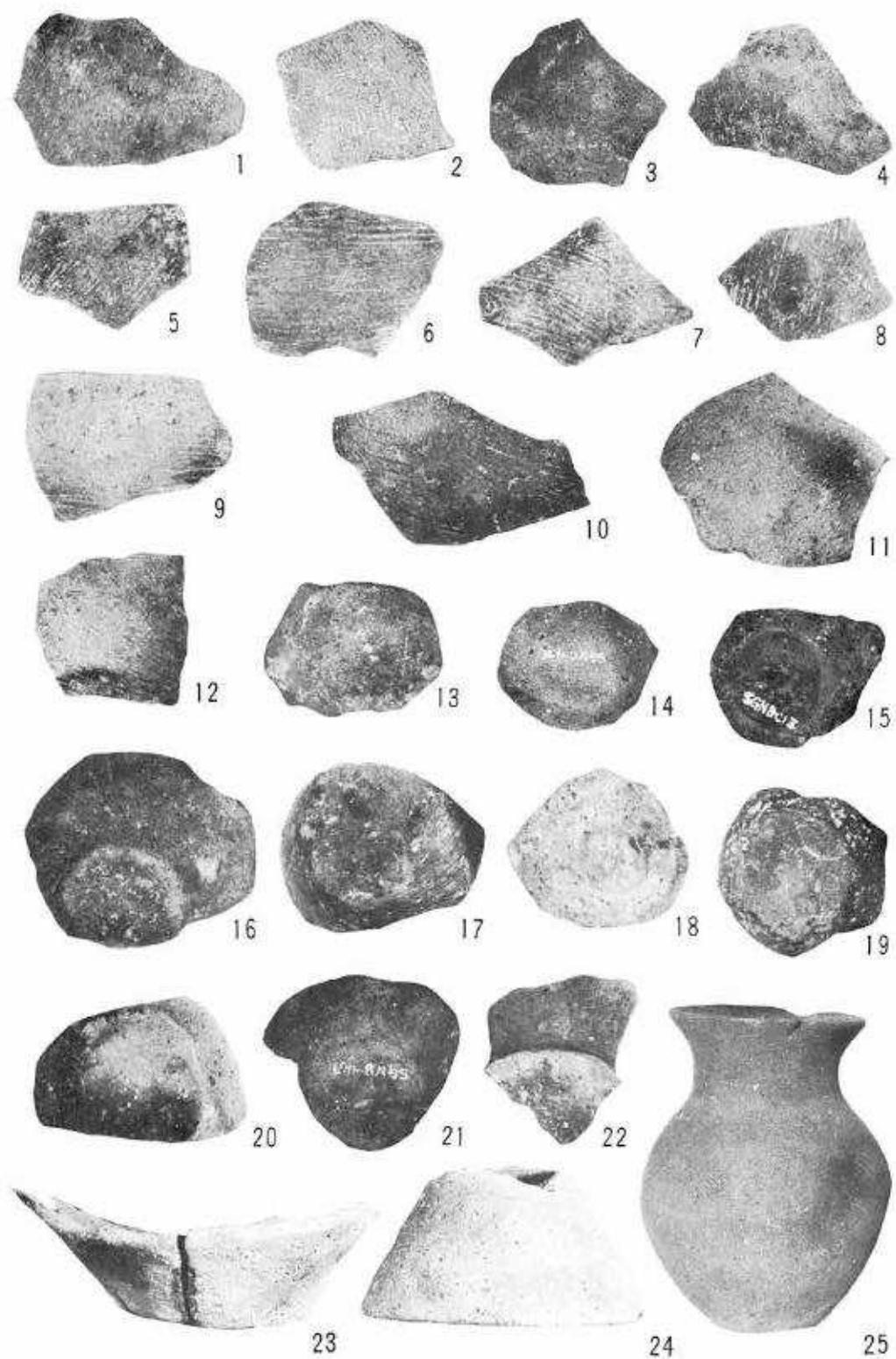
錢貨・金屬製品・土製品・木製品・石製品



杉之森(通称根岸)遺跡出土遺物



杉之森（通称 根岸）遺跡出土遺物



杉之森（通称 根岸）遺跡・横山遺跡出土遺物

新潟県埋蔵文化財調査報告書第8

北陸高速自動車道
埋蔵文化財調査報告書

焼屋敷遺跡
杉之森遺跡

昭和51年3月20日印刷
昭和51年3月25日発行

発行 新潟県教育委員会
印刷 北越印刷株式会社

新潟県埋蔵文化財調査報告書第8 正誤表

ページ	行	誤	正
目次	2	燕市焼屋遺跡発掘調査報告	燕市焼屋敷遺跡発掘調査報告
2	16	厚い砂の堆積が検出する。	厚い砂の堆積を検出する。
3	1	井戸の平面、測面実測	井戸の平面、側面実測
4	下から14	<u>2</u> は菖蒲塚で	3は菖蒲塚で
	下から12	<u>3</u> は下郷屋遺跡で	2は下郷屋遺跡で
	"	<u>いくにつれ高くなる微高地で</u>	<u>ゆくにつれて高くなる微高地で</u>
	" 10	<u>本遺跡周辺は</u>	<u>本遺跡周辺には</u>
	" 5	河川による <u>沖積が活発に</u>	河川による <u>沖積作用が活発に</u>
6	下から14	標高4~5mの <u>微高地</u>	標高4~5mの <u>微高地</u>
	下から12	砂堆等の <u>微高地</u>	砂堆等の <u>微高地</u>
	"	自然堤防上の <u>微高地</u>	自然堤防上の <u>微高地</u>
9	3	<u>発掘前の</u> 数回にわたる	発掘調査前に数回にわたる
10	下から 7~8	低湿な <u>湛水地</u>	低湿な <u>灌水地</u>
13	5~6	内面は凹凸の大きい。	内面は凹凸が大きい。
	9	間隔が広く	間隔が広く
	13~14	位置づけられるか、否か、	位置づけられるか否か、
	15	(第8図 図版第7・8図)	(第8図 図版第7・8図1~19)
15	17	徳利(図版第8図16, 17) 器高	徳利(図版第8図16, 17) 16は器高
20	6	(第12図1~4・第13図1, ……)	(第12図1~4・第13図3, ……)
22	1	鉢(……図版第13図2・5)	鉢(……図版第13図2・3)
23	1	植木鉢(……図版第13図8・10・13)	植木鉢(……図版第13図9・10・13)
23	8~9	<u>13</u> は陶器小皿で	<u>14</u> は磁器小皿で
24	下から15	規模は <u>5.7×5m</u> ,	規模は <u>7×7m</u> ,
25	3	推定される。石囲いの	推定される、石囲いの
	下から4	<u>「横甕の骨蔵器」</u>	<u>「横瓶の骨蔵器」</u>
27	8~9	それ以前には <u>逆のぼらず</u> ,	それ以前には <u>遡らず</u> ,
62	第28図	……(<u>珠洲系土器</u>)	……(<u>珠洲系土器</u> , 3は36)